

冊子原寸 縦二四・五種 横一六・五種 一九枚

二六五〇ノ二

〔表紙〕
「議草綱目 坤」

○綱之四 国教

○目ノ一 今ヤ華族ト土族ト、又決シテ廢スヘカラサル時ハ、文武ノ道終ニ廢スヘカラス、文武ノ道不レ可レ廢トキハ、中人已上ノ教ト中人已下ノ教トヲ分タザルベカラズ、故ニ今ヤ封建ノ制ハ廢スレトモ、其美ハ皇華士ノ無祿ヲ廢スルコト不レ能ハ、是其実ハ封建之制、儼然存スルニ似タリ、今ヤ此三族、絶シテ概廢スヘカラサレハ、郡県ノ政教トモニ、又概シテ洋国ノ制度等ニハ迎モ從ヒ難キ所アリ、故ニ西洋ノ郡県迎モ、強テ行ヒ難キヲ、強テ西教等ニ一二矯飭センコトヲ欲スルハ、是全ク方柄（つら）開鑿（くわいさく）左支右梧シテ必行ナハレザル所ナリ、然ルニ西俗ニ準擬スル

ニ從ツテ中人以上以下ノ教混シテトナルヤ、且中人已下ハ教憲アツテ中人以上ノ教法ヲ欠クニ似タリ、中人以下ノ教トハ何ゾヤ、陽ニ賞罰ヲ以テ畏シ、陰ニ禍福ヲ以テ嚇ス、其功ナルヤ、或ハ天堂地獄ノ説アリ、又高天黄泉ノ論アリ、以テ是ヲ勸誘スルハ今ノ教部中人以下ノ教ヲ主トスル所以ナリ、中人以上ノ教トハ何ゾヤ、詩書礼楽ヨリ、射御書數ト性ト天道トニ至ツテ、治国平天下、經濟之業、宏大精微、迎モ庶賤ノ者偏ク及フ所ニアラズ、兵学モ亦同シ、將略持徳ヲ修ルニ至ツテハ中人以上ノ教ニシテ、炮馬擊射ノ技芸ハ中人以下、兵卒ノ専ラ習フヘキ業也、是中人已下ノ兵学也、只々仁義遜讓ノ道ト孝弟忠信等ノ教ハ、上天子ヨリ下庶民ニ至ル迄一貫シテ、只大小輕重ノ分社アレ、和漢古今、少シモ異ナルコトナシ、是ヲ以テ此三綱五常ハ仏也、耶蘇也、老莊也、申韓商軼也、方国古今少シモ變ルコトナシ、サテ右ノ中人已下以上ノ教ハ古判然大小二学ニ在テ、古聖

代ハ下土已上、此教ニ与ルコトナレドモ、農工商賈等ニ是ヲ攻ル学校ナド云ハ一モ是アルヲキカズ、今ヤ西洋ニ擬シテ田夫野老ニモ課金ヲ賦シテ、十二八九八今日父母妻子ノ養育サヘ艱難ナル小民ヲ押ヘテ、強テ文明之道読書手習等ヲ攻ルハ、迎モ永続スヘキ道ニ非ス、其弊害敢テ数ヘカクシ、

○目ノ二 新聞上ニモ政学家ト行政家ト、實際ト理論ノ打合ハザル説アリ、然レトモ我今日ノ如ク理論ト實際ト、氷炭相反スルコトハ実ニ古今希代ノ鬭争トナレリ、真ニ他日ノ国乱ヲ醸シ、外侮ヲ招クノ大釁隙ヲナス、有識者ノ彈指スル所ナラズヤ、是ヲシテ其弊ナカラシムルハ政教一致ニシテ、教学相扶ケ、学問事業ト合挙シテ、文武一致ニ帰セシムルニアリ、ソハ古大小学校ノ教ヲ興復スルニアルノミ、何モ六ケシキコトナシ、

○目ノ三 国体風俗同シカラザレハ、章甫ノ冠リヲ越ニウリ、中国ノ白豕ヲ遼東ニ鬻クノ類ニシテ、教学

ノ道、亦随テ同シキコトヲ得ズ、山国ト水国トノ別アルガ如シ、是亦其詳ナルコトハ復明密議等ニ具スル所、尚又篇未政体ノ篇中ニ詳カナリ、

○目ノ四 僧侶説教、説教説別ニ具ス、

○目ノ五 漢学説 是ハ別ニ勸学論、及漢学論等二篇アリ、略之、又横浜毎日新聞、第一千二百七十八号ニ讀井逸三ガ漢学説アリ、可参考、

○目ノ六 内以ニ神聖之大道ニ、設教而外制ニ洋対万国之諸教ニ、此亦在ニ百官府之外ニ、以窃糾ニ洋教ニ、蓋先自講ニ明耶穌之教書等ニ、併掌ニ皇漢之學術教典ニ者非ニ、学識卓絶之士任之、則必陷ニ異端ニ矣、不レ可レ不レ重、
右ニ条機密建言

○目ノ七 改正學術教典ニ、蓋古人則先講ニ究六經ニ以及ニ諸子百家ニ、故有ニ順流直下之勢ニ今人則以ニ雜施不遜之史眼ニ見ニ三史六經ニ三史、日本紀、古事記、旧事記以大誤ニ順逆猶レ遡ニ急流之源ニ、其弊害或甚ニ於不学ニ風俗頹敗国不堪小人之多者生レ此、不レ可レ不レ慎、諸書義之

府、礼楽徳之則也、古者撰三軍之将尚在レ此矣、
況於_レ為_レ天下之宰相、以變_レ理陰陽、総_レ攬紀綱_レ者乎、
學術教典之以育_レ人材、培_レ國本、豈可_レ弗_レ重哉、

○目ノ八 復明密議第八第九第十二具ス、

○目ノ九 同後編開化教道二篇中二具ス、

○目ノ拾 同学校教院二篇中二具ス、

○目ノ十一 同三編ノ第五第六第九中二具ス、

○目ノ十二 同後編ノ外教篇中二具ス、

○目ノ十三 排仏、此ケ条同三編ノ第五第六条、

右外教排仏ノ議論頗長シ、深謀遠慮ナクンバ正ニ近
憂ニ堪サル者アランカ、

尚又本山各宗ノ教師ヲシテ能説得ヲ加ヘシメ、百万
石ノ大名握籙ノ公卿華族ヲ初メ、幾万人ノ士族サヘ
今更ニ大小刀ヲ廢シテ断髮胡服等ニ憤発、朝旨ヲ遵
奉スルニ僧侶輩ノミ緋ノコロモヤ七裏ノ袈裟等ヲツ
ケ、大祿高閣ニ居食ス、是イカナル頑固無用ノ物ナ
ルヤ、且又千百歳莫太ノ 朝恩ニ浴シタルカヒモナ

ク、且久ク葬祭等ヲ任セ置シカヒモナク、大切ノ御
陵墓等空シク荒廢セシムル、其罪等今更責ルニ及バ
サルモ、尚靦然トシテ羞惡ノ念ナシ、唯速カニ還俗
シテ其罪ヲ謝セシメ、屹度 朝憲ヲ遵奉スベシ、

○目ノ十四 君民同治、男女同權等ニ至リテハ、尤正

教ニ戻リ、政体ヲ破ルノ極、政教共ニ失スルノ邪説
ニシテ、其弊ヤ必父子同權ヲ唱、其甚シキニ至ツテ

ハ、終ニ德義ト高老トヲ次トシ、只少壯ヲ尚ヒ功利
ヲ貪ル、虎狼世界ノ道ニ陥ルコト、掌ヲサスガ如シ、

〔(現在ニアリ) 柳田翁評、君民同治、男女同權ニテ歐米各国ハ治レトモ、ソ
レハ何故也、我國ノ如キハ否ス云マト云ズンハ不可ナランカ、
如何、他亦然リ、

熙其故ハ何々ヲ略スルハ吾輩ノ皆知ル所、今此ニ断ハルニ及
サル故也、尤此一書ハ同志ノ帳中ニ秘メ、門外漢ニ示ス者ニ
非ス、看者恕諸」

○目ノ十五 初メ、大教院ヲ開クニ与ルヤ、仏ヲ容
ル、所以ンノ者ハ仏ヲ廢セントスル所以ン、漢学ヲ

用ントスルハ我神典ヲ助ケテ名教ヲ千載ノ下ニ維持
セントスル所以ナルニ、或ハ我仏ヲ容ル、ヲ疑ヒ我
漢学ヲ唱フルヲ惡ム、実ニ無念ノ事ナレトモ今日果
シテ仏ヲ廢シ外教ヲ拒ムノ難キ、其初メヨリ十倍シ
テ、却テ外教仏教等ノ為メニ神典漢学並ニ侵蝕セラ
レテ、終ニ地ニ落下スルノミ、今日ニ至ツテ、尚
不レ悟、則是所謂至レ死弗レ悟者ナリ、豈是ニ与議ニ乎、
○目ノ十六 真ニ中人已上ノ大小ニ学ハ只今自然ニ開
建セル、是古道ノ不レ可レ得レ已ヲ知ルベシ、今ヤ華
族ノ大会館ハ直チニ古大学校ノ有様ニ近シ、トリモ
直サズ是ヲ大学ノ一ツニ充テ、華族区々ニ建設セル、
小学ノ久松学校・桜池学校・有馬学校ノ如キハ直ニ
小学ニ充テ、可ナラン、又田野中ノ寺々モ直チニ姑
ク村塾ニ充テ、学師ヲ置クヘシ、

○綱之五 音楽

○目ノ一 楽調図説并芦管図説別ニ具ス、

○目ノ二 礼記ノ楽記説、別ニ具ス、

○目ノ三 士族已上、弦妓娼婦等ヲ雇フ事ヲ禁ズ、官
員ハ勿論也、伴遊行楽スルコトヲ禁ス、

但シ是ラハ寛大ニシテ、只教護学校ノ大道サヘ漸次開
帳ニ及バ、姑ク据置クトモ可也、

○目ノ四 官員華士族ノ子弟、必雅楽ヲ兼習スルコト
ヲ專ラトシ、能・狂言タリトモ是ヲ学フコトヲ禁ズ、

白川楽翁・会津信公等何レモ能役者等ヲ放逐スル由、

○目ノ五 宮中ノ女楽ハ内教坊ヲ起スベシ、季桓子ノ
女楽ハ鄭声也、宮中等ニアルヘキ者ニ非ズ、関雎ノ
女楽ハ雅楽也、風教王化ノ大本ハ宮中ニ在リト知ベ
シ、今ヤ風化ノ大命、却テ劇場等ニアリ、古今風化
ノ善惡、大ニ異ナル所以ン在レ此矣、

○目ノ六 毎月一次、舞楽ノ大会ヲ開カセ、士庶人ト
モニ縦観セシムヘシ、尤華族已上ノ課役トシテ芸
スルト否ラザルトヲ不問、各家相当ノ課金ヲ出サセ、
士庶已下ハ時ノ纏頭ハ勝手ニ致サセ、尤縦観中、曲

間ニ各静肅、只酒飯ヲ窃カニ用ルコトヲ許スヘシ、
尤酔狂ノ法ハ至テ敵ナルヲ要ス、

但豪富等ノ献金ハ分限ニ応シ差出スコトヲ許シ、
縦観ノ席ハ華士族各棧上棧下ニ其生ヲ分チ、尤東
西ニ棧シキヲ構テ土庶ノ列ヲ分チ、東棧ハ華士ノ
上中下等、西棧ハ庶人ノ上中下等ニ分チ、當繕料
トシテ上中下共夫々許多ノ手伝金ヲ出サシメ、以
テ茶炉等ノ用ニ給与ス、尤此一大局、一ツノ借樂
縦観場トシテ夏涼冬温、適宜ノ良法ヲ設ケ後園等
ニハ泉石假山ニ茶亭ノ休息所ヲ設ケ置クベシ、尤
此一場只舞樂ヲ催スノミナラズ、時アツテハ能・
狂言、或ハ太神樂・獅子舞・輕業・駒舞ハシ、又
ハ細工物生人形、又ハ竹田、
斐ハラ細工ノ類、又ハ博物書画展観等モ、
少シハ舞台座席等ノ模様ヲ変シテ土庶已上ノ縦観
ヲ許ス、時アツテハ士以上ニ限ルコトモアリヌベ
シ、只鄭衛猥褻淫靡風化ニ害アル者ヲ除クノミ、

○綱之六 典礼

- 目ノ一 祭典、復明密議後編、神社ノ篇別二具ス、
- 目ノ二 定国社、請レ建ニ神武帝等ノ廟社ニ疏別二具ス、

- 目ノ三 上自朝廷下至閭巷、定ニ氏神祭ウツクネノミ子事、

- 目ノ四 陵墓ノ別ヲ定メ貴賤異數ノ規則ヲ分ツ事、

- 目ノ五 定ニ凶礼ニ事、再禁ニ火化ニ建白書別具ス、但

禁ニ仏葬ニ、專用ニ神伝旧典ニ、斟ニ酌礼制ニ事、

- 目ノ六 養老尚齒、復明密議第九立国布条下、第四目別具ス、

- 目ノ七 群臣ニ賜レ宴賜レ餼、詳細他日ノ議案ヲ期ス、

○綱之七 富国

- 目ノ一 大意、復明密議第三條、同三篇、第八第九條下別具

ス、

- 目ノ二 節ニ国用ニ省ニ土木、同第三、目ノ一、

- 目ノ三 封建郡県世祿等ノ得失ヲ論ズヘシ、

同第三ノ目ノ一、同三編ノ第十條ハ急時務建議ノ第九條等參考、

○目ノ四 開國産事、是ハ内務省中官員等大ニ会議スヘキ事、

○目ノ五 外国物品ノ用ヲ節ス、尤兵器ニ械船艦・医

藥・書籍等ハ格別ノ事、

○目ノ六 交易、復明密議第三ノ目ノ三、

〔願在アリ〕再考、封建ノ華土族アツテ不能用之、其祿養ヲ廢セント

欲シテ是ヲ廢却スルコト不能、郡県ノ民ヲ驅使シテ兵ノタメ
ナランコトヲ欲シテ又祿養ノ不給ヲ患フ、是貧弱ノ大根本也、

是封建ノ土ト郡県ノ兵トヲ二重ニ祿養スル也、両ツ作ラ是ヲ

失フ国用ノ乏キ（待マ）恠ムニタラス、

○綱之八 人材

○目ノ一 大意、復命密議復撰人材ノ条下、急時務第四条、

○目ノ二 敬老尚齒、急時務第五条、

○目ノ三 尊賢、才智學問文章巧芸、品行実直篤徳

○目ノ四 知人、小人君子ノ弁、不孝第、不忠信、讒佞、驕逸、
邪慝、媚疾、愚痴、姦巧、淫奢、右等ノ品類、

ハ公論自ラ存ス、私心ヲ去ツテ試用スルヲ要
トス、民選ヲ頼ムニ至ツテハ君權地ニ墜ツ

○綱之九 強兵

○目ノ一 当今ノ弊、在匹夫之勇以争功名、苟欲矯

此弊、在「和一」和字、今有「兩士」、有「少不平」、則

按劍疾視、失和徳之甚也、豈得「以大勇御」万衆

以鎮撫「天下」乎、其要在「以」大勇之徳養「天下」之

強、不「可」恃「一劍之銳利」以誇「小勇」矣、不「可」

逞「一臂之力」以求「一勝之利」矣、以「大炮代」

劍「以」巨艦「易」堅甲「則可也」、然陸軍必以「田獵」練

兵、海軍必以「捕鯨」水練、警視巡邏、必取「諸兵隊」、

伍長隊將、必採「諸學校」（大學中必宜、有兵學寮）、苟欲「拳」一將

必試「之」以「孫呉」船略、未「能」以「議」孫呉之一書卷、

豈能堪「其任」乎、

○目ノ二 將師隊長タル者ヲ試験スル、西洋兵法書等

ハ云ニ不「及」、更ニ孫呉二書ヲ以テシ、是ヲ上等ト

ス、他ノ四書六経ヲ試験シテ通曉ナル者ハ、真是開

化進歩之極、上々等ノ將師ナルヘシ、然シテ尤大英

豪ニ至ツテハ何ソ試験ヲ煩ハスベキ、又大海軍ノ総

管大都督等ニ至ツテ八十万石已上ノ旧知事ニ命スル
コトナレトモ、一騎前ノ采配ヲ取ル丈ケノ人材、文
武鍛練、出将入相、学識徳望粗具ハレル人物ニ非ル
ヨリハ、其任ニ当ルヘカラス、尤此人物何処ニ在ツ
テ養出シ来ラント欲セバ、乃大会館ヲ大学校トシテ
専ラ旧華士族ノ俊秀ヲ精撰シテ、大学中ニテ鍛練シ
出スベシ、

○目ノ三 復明密議ノ第三条下ノ封建郡県ノ説、并
改正兵賦ニヲ以省冗兵ノ条下ニ別具ス、

○目ノ四 兵艦ヲ運漕等ニ活用スヘキ事、復明密議ノ第
三条、

○目ノ五 世禄ノ群士族ヲ兵籍ニ編スル方法、急時務
草案第
九条別
具ス

○目ノ六 防火必兵卒ヲ用、同第八条下別具ス、

○目ノ七 御親兵、説別ニ具ス、謀野草議中ニ具ス、

○目ノ八 常備兵陸軍海軍鎮台兵、

右大略復明密議ノ封建、郡県説及急時務草案ノ第九

条、同後編、兵力財力富強条下、皆同シ、

但大海軍、御親兵ノ兵制、大略謀野草議中ニ具スト
イヘトモ、尤諸藩現存中ノ制ナレバ今ヤ郡県ノ制ニ
引直シテ、諸県ヲ旧一大藩ト見做シテ新旧斟酌シテ
適宜ノ良法ヲ議定シ玉フ可シ、

○目ノ九 育士撰秀復明三編ノ第七及振興ノ兵氣ノ第
一、武芸復古一条別具ス、

○綱之十 外交

○目ノ一 大意復明第五回目ノ第一別具ス、

○目ノ二 隣好ノ事、時變密議一卷、別ニ具ス、

定国是之大基本、建廟算之大秘策、以宜維持皇国事、
極機密建白、此一条別具ス、

○目ノ三 大合従、曾テ御一新ノ初二熙三大事ノ説ア
リ、三大事トハ曰ク、大学校也説上ニ粗具ス、其詳ナル
議等数卷、別ニ具ス、曰ク、大海軍也、曰、大合従也、三大不
具則治乱トモニ神州ヲ保全スルコト難カルベシ、此

三大若其一ヲ欠ハ万事瓦解セン、況ヤ其二ヲ欠キ、或ハ其三大ニ全ク失フニ於テオヤ、今ヤ不幸ニシテ此言頗ル相当ルニ近シ、読者深ク心ヲ潜メヨ、仍曰、大合従、曰、外清国ト朝鮮米魯ト合シテ専ラ隣交ヲ修ルニアリ、尤清・朝鮮トハ唇齒輔車之情好尤深カラシムベシ、是更ニ西洋諸国ノ窃カニ忌憚スル所也、極テ其嫌ヲ避クヘシ、到底只一全国保護ノ目的ニアリ、近者悦則遠者来ル、又曰ク、遠ヲ寧ズルハ近キヲ能セヨトアル聖旨二本ツキ、且又天地自然ノ常道ニシテ古今ノ異アルコトナシ、

○目ノ四 交誼ハ万国公法ヲ講究シテ、外洋人ト妄リニ親交ヲ結び、私カニ通約スルコトヲ嚴禁セシムベシ、況ヤ宗門ニ入ツテ師弟父子ノ親ヲ契納スルニ於テオヤ、

○綱之十一 法律

○目ノ一 夫レ法律ハ霸者專要ノ治具ニシテ、王政ノ

先キトスル所以ニアラサル也リ、ソハ尚書呂刑ノ篇、及左氏伝、晋ノ叔向ガ鄭ノ子産ガ刑書ヲ鑄タルヲ論ズル等ニ、已ニ說破余蘊ナシ、平心ニ熟慮スベシ、トカク法ハ死物ニシテ活用其人ニ非レハ、反テ弊害ノミアツテ、迎モ永続スルコト覺東ナシ、何ントナレバ君父ノ為ニ復讐スル者アランニ、本ヨリ相殺スノ法律ヲ犯シテハ、又刑戮ニ陥ルトヲ孝子忠臣ノ情実、豈法綱ニカ、ルヲ恐レテ、手ヲ束ネ、共ニ天ヲ戴クニ忍ベケンヤ、大石良雄カ如キ、本ヨリ一人ヲ斃シテ四十余人ノ身ヲ殺スコトヲ惜マンヤ、然ラハカ、ル死法、果シテ何ノ益カアル、法律ノ死物スルコト、是ニテ可知、故ニ和漢トモ、古ハ礼樂ヲ先ニシテ、刑政ハ第二着也、是ハ王霸ノ因テ分ル、所以也、治術中第一ノ奥旨、迎モ我輩淺陋ノ及所ニアラズ、七十子ノ賢哲トイヘトモ、礼樂ノ如キハ、后ノ君子ヲ俟トモ云ル、処ニシテ、聖凡ト其位判然タル、迎モ一場ノ議論ニ尽スヘキニ非ズ、況ヤ王者一代ノ

礼ヲ制シ、楽ヲ作りテ法ヲ千載ニ垂ル、ニ於テオヤ、
乍去共ニ不及トシテ、是ヲ概廢センニハ菅晏ノ奴隸、
五霸ノ罪人タルコト必セリ、

○目ノ二 復明密議ノ第十一、

○目ノ三 地獄夜鷹等ハ、貧賤之小民飢渴ニ難忍事故、
窃盜等ニハ勝レリ、暫寛大ニ捨置テモサセル大害ナ
シ、別テ風教ニ關係スル程ノ事モナシ、責ハ君子ニ
在リ、万民ヲシテ其所ヲ得セシメンニハ、自然ト
カ、ル弊風毛薄ラグベシ、只官員等ノ游蕩等ハ其弊
本ヨリ十倍セリ、大ニ風化ヲ破リ朝威ヲ汚シ、其弊
害不可勝言、兵卒^{ソウ}ノ無賴ニ準シテ官員游蕩等ノ法律
ヲハ第一ニ嚴明タルベキ事、

○綱之十二 政体

○目ノ一 監察彈台等ノ事ハ立国ノ紀綱、廉恥羞惡ヲ
以テ、世態ヲ糾正ス、尤嚴明ニシテ罪綱ニ陷ラサル
様ニ是ヲ微隱ニ拒クヲ侶トス 復明第二条、立国本、
張紀綱条下別具ス、

○目ノ二 制度典章等ノ文物ハ、国体ヲ建テ、富強ノ

実ヲ盛大ナラシムル所以也、先第一ニ自国ノ産物ヲ
不用、他ノ遠物ヲ貴、自国ノ布帛ヲ不着シテ、他ノ
氈裘ヲ用、自国ノ米麦ヲ不食シテ異域ノ珍品ヲ求ル
ノ類、カ、ル制度ヲ立テ、是ヲ天下ニ通用シ、永世
ノ国典トセムニハ民ヲ誣ルノ甚シキ、是ヨリ大ナル
ハ無シ、ソハ寒国ニ生スル、獸ノ皮ハ天生厚ク生シ
付タルヲ、剝去ツテ更ニ暖国ニ生シタル、皮ノ薄キ
ヲ衣セカヘ、上戸ニ砂糖餅ヲス、メ、下戸ニ酒ヲ強
ルガ如シ、民情不通ノ甚シキ、是ヲ經世者用ノ道ト
セバ、菅晏ノ徒トイヘトモ、舌ヲ吐テ冷笑セン、教
道モ又然リ、水国ノ者ニハ水練操舟ヲ習ハセ、山村
ノ者ニハ木昇リ木挽キヲ慣ラハスハ情実ニモ適スヘ
キヲ、水国ノ者ニ木昇リヲ教ヘ、山中ノ者ヘ水練ヲ
仕込ハ、是又學問ノ師道立ツコトナシ、是先我國ニ
名産ノ物品ヲ捨テ、遠外ノ物品ヲ求ルハ、其弊害無
算ニ至ツテ、且我至宝ノ金銀ハ皆海外ニ堆積シテ、

彼二求ル珍珠異物ハ我地ニ入ツテ、全ク塵芥糞土ニ化スルノミ、カクテハ乍チニ、貧弱ノ弊ヲ我ニ成シ、衰廢ノ基ヲ啓ク也、海外万国未開化ノ民トイヘトモ、カ、ル迂遠ノ制令アルヨキカズ、汝ノ田ニ耕シテ、汝ノ山野江海ニ漁獵シテ衣食セヨト云ハ、億兆皆安堵シテ各其所ヲ得、専ラ服膺勉強ヲモスベシ、是ヲ富強ノ本トハ云ン、是ヲ天ノ時ヲ用、地ノ利ニ就トモ云也、孝孫庶人ノ孝ニ全此一兩句ヲ説クノ妙、今日初テ發明スベシ、庶人ノ教ニ叶フヤフニシテ、其父母妻子ヲ養ハシム、是ヲ政事トモ制度トモ云ナリ、假令粲然タル礼服ヲ着テ、洋々タル雲門咸池等ノ美ヲ尽ストモ、億兆睚眦トシテ飢渴怨怒ヲナサバ何ノ礼樂ト云カアラン、去ハ無政事則財用不足ト云モ、是等ノ政道行届カヌコソ云ナレ、然ルニ他ノ珍品ヲ供スルモ、平常ノ衣服富祐ニシテ、財用有余ハ外國ノ名品ト交易シテ衣食セシムルモ、亦民情ニ適スベシ、然ルヲ内外本末顛倒シテ民心ニ適セザル、何

ヲ以テ國家ヲ保全シ、億兆ヲ安堵セシムベキヤ、今ヤ都鄙遍ク開鋪丘堆セル、蛮貨蘭品ヲ目撃スルニ富貴ノ人ハ兔モ角モ、寒鄉僻邑ノ細民、億兆ノ窮民等ニ至ツテハ皆拾ノ八九ハ無用ノ玩好物ニシテ、是ヲ用ルモノ至テ少ナキヲ見テモ、永世ニ通用、上下ノ便利ナラザルハ可知也、又祭祀婚葬等ノ大礼式ニ用ルコトモ少ナキヲ、只廟堂上富貴ノ家等ニノミ珍重シテ、日々太牢ニ飽キ錦裘ヲ纏フヲモテハヤストモ、最モ解シ難キコト共ナラズヤ、ソハ牛ヲ宰シテ洋酒ニアクハ天子ノ飲食トモ言可キニ、今ヤ人力車夫モ^(ママ)道理ニ狼藉シテ腹ニ充ルコトヲ得ルモ開化ノ便利、小民迄モ太牢ニアカシムルト思フハ、僅カニ四里内ノ万分一ヲ見テ、四里以外ノ郊野、千里里ノ億兆アルコトヲ知ラザル、坎蛙トモ云ベキノミ、其極只恐ラクハ富強ノ国典ヲ概廢シテ、一向ラ貧弱ノ下策ニ陷ンノミ、速カニ改正セズンバアルベカラズ、右必竟ハ和漢ノ長所ノミヲ拳テ、洋俗等ノ弊害ノミヲ拳

ルニ似タリトイヘトモ、其実ハ当今皇漢神聖ノ大経
 済大作用、過化存神ノ微妙広大ヲ極メタル、大賢材
 ニ乏キヲ憂フルノミ、苟モ今舜禹ヲシテ当今ノ開化
 ヲ目撃セシメバ、何ソ徒ラニ九州九区ノ中ノミニ
 区々經營シテ止ンヤ、汽船・伝線・鉄道等ノ外ニモ
 必大ニ取ル所アラン、又大砲巨艦等モ必干戈騎射等
 ノ上ニ大ニ巧妙ナル器械等ヲ製シテ、武徳ヲ海表ニ
 宣ルヲ見ン、苟モ今孫呉ヲシテ、当今ノ遠略ヲ目撃
 セシメバ、何ソ唯一時ノ呉争越戰等ニノミ身ヲ終ン
 ヤ、巨艦大炮風船等ノ外ニモ必大ニ發揮スル所アツ
 テ、兵威ヲ万国ニ耀スヲ見ン乎、西教ノ孔孟ニ逢ハ
 ズシテ、今ニ紛然甲仆乙蹶其道ニ迷溺スル、洋学ノ
 神聖ノ後ニ起ツテ、世ニ其長処ヲ知ラザル、豈洋人
 ノ為ニ又惜マザルヘケンヤ、悞之ノ深キハ、大ニ洋
 説ヲ開張シテ、真理ヲ通明セシメント欲スルノミリ
 而此ニ書ノ条列スル所事ニ先後アリ、施スニ緩急アリ、苟モ是ヲ
 實際ニ行フ、取舍斟酌スルノ活機妙用ニ至ツテハ、一書ノ尽ス所
 ニ非ズ、必其人、
 ニ存スルノミ

右賤臣幸ニシテ、聖運興隆ノ際会ニ當ツテ、四十
 年前、專経世ノ學術ヲ(安)会沢・藤田両氏ニ受ケ、時
 事ノ日々ニ非ナルヲ憂テ、中年已後専ラ交リヲ四
 方ノ豪傑ニ求メ、終ニ幕政ノ殷鑑ヲ目撃シテ、軍
 務官ニ在ツテ兵備ヲ試ミ、漢学所・大学校ノ盛挙
 ニ与カツテ文事ヲ試シ、又終ニ教道神官ノ間ニ参
 シテ神典皇教ノ大意ヲ管闡シ、実ニ盛世ニ遭遇、
 寸功微績ナキヲ愧ルノミトイヘトモ、頗ル国家治
 乱ノ形勢ヲ體驗親炙スルコト又少シトセズ、人或
 ハ時論ニ悖リ時務ニ反シテ、徒ラニ不平ヲ鳴スナ
 ド疑ン者アランカ、乍併一事一変ニ遇フ毎ニ、患
 難備サニ嘗メ、特ニ神聖ノ大道確乎トシテ、天地
 日月ト共ニ窮リナキノ万一ヲ覺リ得タル所アラン
 カ、只天下億兆ト共ニ国家ノ休戚ヲ与ニシテ、神
 州皇国ヲ千万歳ニ維持セントスルノ寸忱微衷ノミ、
 声誉ヲ求ルニ非ズ、功名ヲ要スルニ非ズ、賤臣積
 年ノ苦心、粗此一書ニ具ス、伏シテ願クハ、

高明在レ上、垂照憐鑑アラセ賜ンコトヲ、

伏惟今也高明在レ上、非レ不レ求レ治、非レ不レ尽レ力、

唯恐クハ非常ノ際会、宇宙間ノ一大変局、或ハ

渴^ハニ本論、飢^ニ干策、群疑滴腹衆難塞^レ胸共極也、

甲仆乙起シテ、上下惑乱、嚮キニハ一官一省、時

ニ瓦解アルモ、万一此上百僚解体、滿朝瓦裂ノ禍

アランニハ、眼底ノ潰乱、千歳再ビ不^レ可^ニ收拾、

大変アラントス、痛哭流涕、長大息、深慮ナクン

バアラズ、然而当路諸賢ヨリシテ此ヲ視ル、定テ

時務ニ迂ニシテ時變ニ暗キ者ト為サンカ、今ヤ賤

臣局外ニ在ツテ、親敷億兆ノ疾苦ヲ視、且積年同

有志輩ノ公論ニ試ルニ、右十二綱六十七目、恐ラ

クハ大略三千万余衆ノ代議ナラントサハ決然憤慨

スル所也、狂妄不遜、恐レ入り候得共、求メテ忌

諱ニ触レ当路ニ悖リ、敢テ一家ノ私論ヲ皇張スル

ニ非ズ、唯仰

高明慈諒、云爾昧死百拜敬白、

明治八年七月中元日

加藤熙齋戒謹識

(文書題「加藤熙」ハ「加藤熙」ノ誤リカ)

冊子原寸 縦二四・五糎 横一六・五糎 二一枚

三五 酒田県治上ノ非難ト弁駁

合四冊

二六五二一

森藤右衛上言之儀ニ付陳述書

報知新聞第六百七十七号、当県管下酒田町平民森藤右衛

門、五月十二日付ヲ以本県ノ事情十事ヲ条列スル上書ヲ

記載ス、毎条参事以下県官ノ罪ヲ指摘シ、其極言スル処

暴戾威虐無所不至、目下億兆ノ困厄ヲ座視スルニ不忍趣

ヲ以テシ、終ニハ

朝廷県官ニ私シテ之ヲ曲庇スルノ状ニ及ヒ、之ヲ誠ルニ

積憤ノ余必竿ヲ掲テ起ル等ノ言ヲ以テス、其行文作意衆

ノ視ル処、藤右衛門カ才能ク弁スル処ニアラス、且ツハ

同人小野組負債償却ノ儀ニ付、大蔵省布令ニ依リ及督促

ノ処五十日間ノ猶予ヲ願、本年二月金索ノ為隣県へ罷越、

同処ヨリ直ニ出京候段届出、爾來數月ヲ歷テ右負債不及、償却上ハ汲々金索ノ外他事無之筈、何違カ右等ノ上言ニ及ンヤ、右ハ全ク好事ノ者、或ハ親懷等ニ私怨ヲ抱キ、窃ニ名ヲ藤右衛門ニ仮托シ、新聞社中ニ投書セル而已ト之ヲ度外ニ措テ不顧、其後右上書報アラサルヲ以屢催促セシ処ノ書面ヲ記載シ、且ハ藤右衛門上言ニ付、新聞紙上論議囂々、於是初テ疑ヲ發シ、実否伺ニ及ノ処、豈凶ンヤ、其事ノ果シテ真ナラントハ、且驚キ且恐ル、彼藤右衛門モ管下ノ一民斯無根認罔ノ言ヲ以、堂々タル貴院ヲ干シ、剩ヘ其虚称ヲ窃シカ為メ之ヲ新聞ニ投シテ天下ニ播布シ、三千余万人ヲ疑ヲ政府ニ容シムルコトヲ、管下如此者アルハ、是則親懷等不徳ノ致ス処、慙愧恐悚ノ至リニ不堪、假令右等ノ事實院ニ建言スル、其當ヲ得ルモ事ノ虚実判断断アラサルニ於テハ、豈啻該県而已ナラン、大ニ天下ノ人心ヲ惑シ、徒ニ奸民僥倖ノ風ヲ長スルニ不過、況ヤ其文意専ラ人罪ヲ告ルモノニシテ、大ニ尋常建白ノ体ニ異ナリ、若夫レ人罪ヲ誣告センカ、

律ニ明文アリ、交易スヘカラス、旁其筋ヲ以御料明可相成ハ勿論ノ筈、抑其言無根ノ証タル多言ヲ不須、三条・岩倉両公云々ノ如キ、果シテ二公ニ於テ如何可有之哉、此一事ヲ以其余条ヲノツカラ御洞察可有之筈、尤彼十事ノ中既ニ政府及内務省等ヘ明弁ニ及、即今過キ去リシケ条モ有之ト雖モ、遠県ノ事情瑣末ノ儀、猶御取調ノ御都合モ可有之哉ト条件ヲ逐、虚妄ノ次第左ニ陳述仕候、
 第一条出納曖昧不分明ノ趣、凡出納ノ儀ハ大藏省ニ於テ成規ノアルアリ、會計必其時ヲ以テス、若夫レ曖昧不明ナランカ、豈主務ノ省ニシテ、此ノ不明ノ帳簿ヲ請ンヤ、当県會計ノ如キ、果シテ如何ン、之ヲ知ルハ大藏省ニ在テ藤右衛門ニアラス、若夫レ従前浮役米ト称スル物ノ如キハ則県庁ノ賦米ニシテ、先県已來引続キ收入、新置県ノ後ニ始ルニアラス、素ヨリ雜稅及賦米金ノ如キハ^(旧體)貫ニヨリ各県不同ナルニ論ナシ、以テ先般雜稅廢除ノ令アル処、該県賦米ノ如キモ新県後伺ノ上壬申癸酉兩年ヨリ廢存種目確定、其存スル処ト費用

スル処ト固ヨリ向々指令ノ明文アルアリ、右賦米會計ノ帳簿八年々之ヲ製シ、明細証書取揃置、既ニ昨年松平内務少丞出張之節、右書類悉皆差出セシ通ニ付、賦米出納ノ如何ンハ内務省ニ明ニシテ、藤右衛門ノ了知セサル処、租稅收納該県必正米ヲ以テスルノ件ニ至テ、昨年春中管下ノ者、既ニ之ヲ内務ニ訴へ、実地ノ景況人民ノ便利ヲ計リ、当分取扱フ処ノ顛末委曲具狀ニ及、其後内務少丞臨時出張尋問調査事実明瞭、同人直ニ農民ヘモ申諭シ、猶協議ノ上、去戌年ヨリ悉皆仕法相改金穀上納勝手タラシムト雖モ、猶其後管下騷擾ノ節、口ヲ此事ニ籍ルモノ不少、今ニシテ之ヲ見レハ、蓋シ藤右衛門カ輩、教唆煽動スルモノニ似タリ、何トナレハ彼レ小人ノ腹ヲ以テ県官ヲ計リ、農民ヲシテ必米穀ヲ納シムルハ県官其私利ヲ管ムト疑フ、果シテ彼レ之ヲ疑ンカ、農ノ米ヲ引請金ヲ以テ納ル商人ノアルアリ、質問明了ナルヘキノ処事、遂ニ是レニ不及シテ猥リニ之ヲ訴フ、是ヨリ之見レハ彼真ニ之ヲ疑ニアラス、故

ニ認罔ノ言ヲ以テ上下ヲ惑ハスニアラスシテ何ソ、
第二条学校文部ノ規則ニ乖キ其教授スル処、四書五經ニ止ルト甚シ、認罔ノ此ニ至ルヤ該県人民ノ陋ナル、夫是事情有之、一昨酉年西瀉文部少丞巡回ノ節、始テ小学概則進達ニ及、爾来文部省委托金ナルモノヲモ被相渡ト雖モ、僻遠ノ地差向教師差罔、西瀉少丞心付ニヨリ士族ノ内東京師範学校ヘ見習トシテ差出、右ヲ以テ伝習為致、一時仮教師ナル者申付、始テ酒田町ヨリ開校、引続キ鄉村諸方ニ及ヒ期年ナラスシテ開校、百余ニ至ルモ教師ノ行届サルハ之レ有ン、未嘗テ規則ニヨラサルモノアラス、何ソ況ヤ四書五經ヲ以テ教授スルニ於テヲヤ、是皆三島県令赴任前ノ儀ニシテ当節校數(通稱)百二十三ニ至リ、本県一中学、二百十小学、校ノ事ニ兼テ規定セリ、逐日盛大ニ趣ク処ノ景況十目ノ視ル処、藤右衛門儀モ酒田町ノ一商学校ノ事親ク見聞スル処、仮令強顔不知モノトシ、遠隔不見ノ人ヲ欺ントスルモ、教師生徒ヲ始メ一タヒ管内ノ人民ニ質セハ明瞭不可掩ノ儀、猶且此ノ如キ言ヲ出

ス、其余何事カ詔ユヘカラサラン、従前私塾ノ如キハ必シモ之ヲ廢シ、或ハ急卒其規則ヲ変スルニ不及、漸々小学ノ規則ニ倣シムルヲ要スト西潟少丞ノ指示スルニヨリ、強テ之ヲ責ルニ規則ヲ以テセスト雖モ、近頃機会ヲ以テ一般閉塾生徒ヲシテ都テ公学ニ入校セシム、若シ夫レ穢多非人ヲ區別スルノ条ニ至テ、毫モ県庁ヨリ區別スルノ事ナシ、当県人民未開明ノ域ニ不至、従前ノ穢多ナルモノヲ嫌フ、殊ニ甚トス、学校ヲ設ルニ及テ一区一校生徒ヲシテ混淆従事セシメント欲シ、精々設論強テ區別セサラントスレハ口ニ辞スヘキナキモ、自然平民等退校シテ旧穢多ナル者ノミ存スヘキニ至リ、事実區別ノ筋一ナルニヨリ不得止、当分其校ヲ異ニシ、漸ヨ以教誘混同セシメントスルモノ県官注意セサルニアラス、抑該県人民ノ陋ナルニ出ツルハ藤右衛門ト雖モ豈其情ヲ知ラサランヤ、土族云々ノ如キハ雀ヶ岡ニアル処ノ一校ヲ指スカ、右小学区中比屋土族ニシテ右子弟而已入学セルヨリ、管内只此一校其宜ヲ

計リ兼テ文部省へ開申許可ノ上、聊教科ノ書目ヲ変スルニ不過、之ヲ要スルニ学校ノ如キハ一タヒ臨テ真偽瞭然、仮令巧言飾辭強テ県庁ヲ陥ントスルモ何ソ弁解多言ヲ費スニ至ン、

第三条新任ノ区戸長旧藩士族卒、或ハ免職ノ戸長等ヲ再舉シ人民ヲ压制抑遏スト、管下騷擾ノ後、悉皆従前ノ戸長ヲ免シ、更ニ土族ヲ以テ撰挙スルモノ郡村數百年ノ弊習ヲ一洗スルニアルノミ、若夫レ撰挙人ヲ不得アリトセハ、格別何ソ土族ヲ用ユルヲ以テ人民ヲ压制ストセン、既ニ前条学校ノ事ニ付極テ士民ヲ區別スルノ非ナルヲ論シ、土族ヲ戸長ニ用ルニ及テ又其人ノ当否ヲ不問、概シテ其不可ナルヲ言モノ、是判然土族ヲ區別スルニアラスヤ、何ソ前条ト其言ノ矛盾ナル、且旧戸長ノ内用掛ニ用ルハ則有之、戸長ニ用ルハ一モ無之、亦何ソ其言ノ妄ナル、凡該県農民等ノ開明ナラサル村長ノ如キ、今般毎村投票シテ撰挙スル処ト雖モ、能ク布令布告ヲ了読スルモノ或ハ少シ、果シテ平民中学術

アリ、当今ノ時務ヲ識リ、事ニ幹タルニ堪ユル者斯ニ一人アラハ、豈啻戸長而已ナラン、之ヲ頭官ニ撰挙シテ可ナリ、況ヤ数十名ノ戸長奈何ソ如此人ヲ得ン、口唯其理ヲ言ンニ不可言モノナシ、何ソ論スルニ足ンヤ、但昨年冬中三島県令新ニ該官ニ任シ、本県騷擾ノ事一切負荷ノ命ヲ蒙リ、旧戸長村吏等ノ処分一々伺ヲ歴テ之ヲ処断シ、今更論弁ヲ不待処ナリ、

第四条 県会ノ事一般ノ儀ニシテ特リ、当県ノ事ニ関スルニアラサレハ論セス、

第五条 本県ノ田畝ヲ檢スル経界ヲ正サス、一二旧帳簿ニヨルト、右ハ最前各地処有テ定ル趣意ヲ以テ地券發行ノ令アル時ヲ言フカ、果シテ然ラハ其節專ラ旧帳簿ニヨリ調査スルハ勿論ニテ、敢テ税額ニ関スルニアラス、其後地租改正ノ令出ルニ及テ租税寮内達ノ次第モ有之、則地券發行見合せ置、直ニ地租改正ノ運ニ可至ノ処、右ハ至重至難ノ取調ニシテ、殊ニ昨年管下農民共不穩旁遷延未調査ニ至リ兼ルノ処、藩制改革ノ時ニ当リ親

懷以下姦吏公田ヲ私有セシヨリ経界ヲ正サス、田制一ニ旧貫ニヨルト、此条ニ至テ確然明徴アルニアラスハ豈此上言ニ及ンヤ、果シテ明徴有テ親懷等一畝ノ公田ヲ私有スルアラハ、其罪死ヲ以テ贖ニ不足、若シ夫レ無根ノ言ヲ以テ誣告センニ、其罪如何ン、敢テ多言セス、俯シテ明裁ヲ請フ、

第六条 新聞局ヲ開クト、蓋シ各地ノ新聞人民結社開設スル処、若シ藤右衛門主トシテ此社ヲ開キ新聞ヲ發行セント欲セハ直ニ管庁ニ願出ヘシ、何ソ故ラニ建言ヲ用ン、姦吏罪惡ノ暴白スルヲ懼レ、暴戾威虐今日ノ甚シキカ如キニ不至ト、是亦何ノ指斥スル処ソ、凡官吏ニシテ暴戾威虐ノ已甚ナル者必 朝裁ノアル有テ、新聞之ヲ誡ルノ日ヲ待ツニ不至、若シ或ハ新聞之ヲ風スルニアラス、嚴然誣罔ノ言ヲ以テ上告センニハ、是亦律ニ明文アリ、其罪ヲ釀スヲ如何トモスルコトナキナリ、第七条 芸娼妓解放ノ令、本県之ヲ奉セス、三島県令來ルニ及テ始テ其令ヲ下スト虚妄殊ニ甚シ、始メ解放ノ令

布達セル後、右營業ノ者從前年季抱ヘ約定ノ書類悉皆
 県庁ヘ引上ル処、数百千通殆ト堆ヲナスニ至ル、更ニ
 貸座敷及芸娼妓營業情願ノ者ハ出願セムト雖モ、取締
 方法ノ如キハ東京府下ヘ照準スヘキノ令アルニヨリ、
 則同府ヘ問合セ、爾來遷延月ヲ重ルノ後、確定ノ報知
 有之ニ付右ヘ照準規則取調、昨年七月内務省ヘ相伺、
 十二月ニ至テ悉皆聞届済ノ上、右規則施行セルノミ、
 解放ノ令豈三島県令來ルノ後始テ之ヲ下スナランヤ、
 詎罔ノ甚シキ一ニ斯ニ至ルカ、

第八條 県官士族ノ私田ヲ開墾セントシテ農民ヲ使役シ、
 威虐迫脅馬牛ノ如シト、抑該県士族ノ開墾タルヤ到底
 各々食力ノ道ニ帰スハ論ナシト雖トモ、其志ヲ立ル、
 専ラ荒蕪ヲ開テ皇國ノ物産ヲ広ルニ始ル、依テハ数百
 千人同心協力、唯其功業ノ大ナランコトヲ期シテ、必
 シモ其利ノ速ニ已レニ帰スルヲ不欲、此レ外間或ハ束
 縛苦役ノ唱アル処ニシテ、素ヨリ其事ニ不馴士族輩
 風雨ヲ不避、寒暑ヲ不厭憤発勉勵スルニ感シ、其始メ

農民等時ニ出テ、其力ヲ助ケ、其勞ヲ分チ、有財者ハ
 或ハ物品ヲ出シテ窃ニ其費ヲ助ル等ノ事アルモ、是皆
 人民ノ厚意ニ出テ、敢テ県官ノ預リ知ル処ニアラス、
 其著明ナルモノニ至テ、既ニ小野組支店出張ノ者ヨリ
 桑樹ノ苗木ヲ出シテ銀盃ノ賞アルノ類、是レ豈官能
 クセシムル処ナラン、何ゾ人民ヲ威虐迫脅使役スト言
 フヤ、

第九條 本県軍伍ヲ不解士族ヲ束縛スト、蓋シ旧大泉藩ニ
 於テ戊辰年一旦方向ヲ誤ルノ後、殊ニ寛大ノ典ニ被処
 人々死ヲ以テ実効ヲ奏センコトヲ願フ、當時草創ノ際
 兵隊ヲ練磨シ、必スヤ万分ノ一二報スルアランコトヲ、
 一旦解隊ノ命ヲ蒙リ大ニ其望(符之)ヲ失、更ニ時勢ノ宜ヲ
 計リ、私カニ誓テ開墾ニ従事シ、上ハ 皇國ノ物産ヲ
 増加シ、聊報國ノ初志ニ酬ヒ、下ハ着実食力ノ道ヲ尽
 シ各素餐ノ請ヲ免レンコトヲ、素ヨリ旧藩兵隊ノ如キ
 ハ士族ニアラサルモノナク、解隊シテ外ニ散スヘキニ
 アラス、右開墾ニ従事セルモ亦必之ノ兵隊ニ限ルニア

ラス、一般ノ士族強壯ノ者多クハ此事ニ従事シ、多数ノ人員ヲノツカラ組ヲ分ケ扱ヲ立スハ、徒ニ紛乱ヲ生シテ事業大ナルヲ不得、此レ其開墾士族組ニ部分スル処、亦其組ノ部分人員ノ出入、毫モ県庁ノ指揮スル処ニアラス、且前条明ニ士族ノ私田ト称スルニアラスヤ、畢竟其私田ヲ開墾センカ為メ、只其組ヲ分チ、簑笠ヲ蒙リ鋤鎌ヲ携ルノ外、兵制ノ形跡一モアルコトナシ、何ヲカ軍伍ヲ不解、士族ヲ束縛スト言フヤ、

第十条 姦吏ヲ黜ク親懷已下朋党比周罪状勝テ言フヘカラスト、抑親懷等罪アラハ豈管之ヲ廢黜スルノミナラン、之ヲ死ニ致スモ可ナリ、之ヲ四裔ニ投スルモ亦可ナリ、唯其 朝裁ノアル処甘シテ顯戮ヲ受ン、若シ夫レ朋党比周ノ事ニ至テハ決シテ服セス、何トナレハ朋党比周ナルモノ、仮令ハ在朝ノ群臣互ニ相比附シテ、以テ君寵ヲ固クシ威福ヲ弄スルニアラスハ、則小人群居朋ヲ援キ党ヲ樹、上ヲ無シ私ヲ計ルノ類是而已、親懷苟モ參事ノ職ニ任シテ嘗テ長官ノ事ヲ撰シ、判任已下ノ官

吏ハ皆其僚屬ノミ、進退黜陟其権限内ニアリ、凡親懷カ可トスル処之ヲ進メ之ヲ用ユ、此レ其職當ニ然ルヘキ処ノモノ何ノ党カアラン、人ヲ知ルハ古人ノ難ンスル処、其知ル処ヲ挙テ其職ニ任シ、不明ニシテ人ヲ失シ、其職ノ治ラサル、是レ其責特リ親懷ニ在テ敢テ他ニ不讓、是レヲ以テ廢黜セララル、素ヨリ其処ナリ、若夫レ未廢黜セラレ乃苟モ其官ニ居テ其責ヲ尽サス、一日其職ヲ曠クスルハ親懷ノ敢テ所不為、彼僚屬ノ如キハ固ヨリ長官ノ指令ヲ奉シテ進退スルノミ、苟モ長官タルモノ其指令スル処ノ僚屬ト朋党比周スルノ義ハ未前聞セサル処、抑本県士族金井質直・本多久釐ノ輩皆犯ス処アツテ官其罪ヲ処断ス、然ルヲ藤右衛門公然兩名ヲ挙テ之ヲ口ニシ、忌憚スル処ナキハ之ヲ私論ヲ以テ公義ヲ黜クト云フ、所謂朋党比周二アラスシテ、何ソ則条列スル処ノ十事皆党スル処有テ強テ臬官ヲ認之ヲ罪セント欲スルモノ昭々乎トシテ明ナルカナ、是レ其十事ノ中只此一条、尤主トスル処以ノモノナルヲ

知ルナリ、

右ハ御含込条々概略ヲ陳述セルノミ、抑親懷等果シテ罪アラハ人ノ之ヲ訴ル、固ヨリ当レリ、何ノ怨ル処アラシ、若夫レ事ノ虚妄ナランカ、千百讒惡ヲ構ト雖モ政府ノ上ニ明ナル、亦何ノ害アラシ、苟モ管下小民等ト囂々啾々争テ黑白ヲ訴ルカ如キハ親懷ノ職ニ於テ平生誓テ所不為、仍テハ前条筆ヲ執テ屢躊躇スト雖モ、今般藤右衛門建言ノ如キ、豈菅県官ノミナラン、再ニ至リ三ニ至リ其指斥スル処專ラ政府ニ在テ、而モ之ヲ天下ニ公ニシ、大ニ人心ヲ惑ハスモノ嚴重糾弾アラスハ、其害不可言モノアリ、此レ其義不得止、断シテ上申ニ及フ処、猶公議ヲ被為、速ニ御審判相成候様致シ度、親懷幸ニ地方官會議之為出京、右御用ハ相済候得共、猶滞京奉待御沙汰候条、急速何分之御裁断相請申度、此段奉庶幾処ニ候也、

明治八年七月廿五日

酒田県参事松平親懷

元老院

御中

管下森藤右エ門元老院へ建言之儀ニ付、弁駁書差出候儀ニ付上申

管下平民森藤右エ門ナル者先般元老院へ建言書差出候儀ニ付、別紙写之通本日弁駁書同院へ差出申候、就テハ會議御用相済候得共、猶滞京致シ居候ニ付、速ニ公平至当ノ御所分有之候様何分可然御詮議被成下度、此段上申仕候也、

明治八年七月二十五日 酒田県参事松平親懷

内務卿大久保利通殿

森藤右エ門建言ニ付、進呈之陳述書

御留置相成度儀ニ付上申

県下森藤右エ門建言ノ儀ニ付、先般美否相伺候処、御取調中ノ趣ニテ治定ノ御指令ハ無御座候ヘトモ、何レニモ書面差出候儀ハ相違無之次第ト相心得、右ヶ条果シテ新

聞紙上記載ノ通ニ候ハ、何レモ相違虚妄ノ事件ニ付御
舎ノ為条々陳述書取調、本月二十四日附ヲ以致進達候儀
ニ御座候処、右文言中不都合ノ廉々御談示ニ有之、右ハ
全ク書取方不宜ヨリノ儀ニテ、事実御舎迄陳述候段相違
無之候条、其俣御留置御参考相成候様致シ度、此段猶上
申仕候也、

明治八年七月廿八日 酒田県参事松平親懷

元老院

御中

冊子原寸 縦二七・五糎 横一九・五糎 一四枚

二六五一〇二

浮役之義ニ付願

一種夫食三割利足之事

右種夫食貸米之儀ハ悉皆旧慣ニ依リ取扱、利米ハ開産
資本之内相充度段、去ル癸酉年大蔵省何濟ニ有之、尤
米返済之義ハ旧藩之節ハ子細有之、不聞届規則ニ候得

共、一般貸米之名義ニ付テハ、今般詮議之上勝手ニ任
セ候条、右之米一時返済切情願之者有之ニ於テハ、戸
長奥印ヲ以可申出、尤年賦返済之義ハ御聞届難被為成
旨、本年一月十九日御指令相成候ニ付猶亦申上候、開
産トハ何等之事ニ可有御座候哉、私共從來農業仕居候
者ニテ別ニ営候職業モ無之、又特伝之田畑ノミ作植仕
候義ニテ新夕ニ耕牧等相開候地処モ無御座候、若又後
田林開墾之義ニモ可有御座候哉、士族食力ノ為ニ開墾
仕候ヲ私共入費ニ可相立筋有御座間敷被存候、然ルニ
又右開墾ニ付テハ別ニ人足御仕立、或ハ米金等御取立
ニ相成候ハ兼々落意難仕罷在候間、此段御示諭被成下
度、且種夫食米儀ハ享保年間山形県管下村山郡両所村
和田玄左衛門ト申者貸附ものゝ趣承居候へ共、睨ト仕
候証書ハ何レモ覚候者無御座、明治六年太政官第八十
一号御布達

第一条

凡旧藩ヨリ貸出シタル一切貸附金穀ハ向後都テ無利足ト

定メ、各種類ニ因リ年賦ヲ以テ可取立事、

第三条

嘉永六癸丑以來藩列ニ被加、又ハ一旦滅亡更ニ新立ノ藩ヨリ貸附ノ分、右列以後ノ分ノミ可取立事、

第十一条

貧民江救助夫食種粃農具代トシテ貸附ノ分、明治戊辰年以前ノ分ハ都テ棄捐、以後ノ分ハ半高葉、半高十ヶ年賦可取立事、

右御布達ニ因レハ、利足ハ勿論之米トモ御棄捐ノ筋ニ奉存候間、自今旧習ヒ無御泥御規則之通御取扱被下度奉願候、尤是迄三割利足御取立、將又今般一時上納ハ格別年賦上納御聞届難被為成旨、御指令之程落意難仕奉存候ニ付、是又御示諭被成下度奉願上候、

一入作与内米之事

右入作与内米之義、明治六年伺済ノ上県庁賦米相立置、救助筋等江指向候品ニ付申上候趣御聞届難被為成旨、

本年二月八日御指令相成候ニ付、尚又申上候県庁賦米

トハ馬車人力車等ノ増税ニ御なぞらへ被成候義可有御座候哉、道路橋梁修繕等ハ既郷普請米御取立ニ相成、又ハ貧民救助等ハ全ク民費ノ筋ニ有御座間敷奉存候、且貧民救恤御取扱私共一向聞及不申候、若又済貧恤窮ハ人民共儀ニ因リ候義ニモ御座候ヲ、如何ニモ其方法ヲ可設筋ト奉存候、自今与内米ノ如キハ出ス者其用ヲ知ラス、若受ル者有ルモ亦其出ル処ヲ知ラス、施ヲモ知ラス、受者茂知ラス、名実曖昧ニ有之候、果シテ済貧恤窮ハ人民共義ニ出候ハ、自今与内米御廃シ更一区一村ノ協議ヲ以其方法ヲ相設申度奉存候、

第四大区四小区
百姓惣代町屋村

明治八年八月五日

高橋利助

同 大川渡村

成沢伊之助

戸長

安倍親名

酒田県令三島通庸殿

二六五ノ三

熱暑難凌御座候処無御障益御機嫌能御出庁奉雀躍候、陳
ハ私儀黒森村差入ニテ大山村江至リ、浜通温海村嶺ケ関
ヲ経、小国村江廻リ、田川湯村ヨリ（龜）窪ケ岡江出、夫ヨリ
第三大区一小区上山添、同二小区本郷村江至リ、本黒川
組猪俣新田村江止宿、清川村迄罷越、昨八日横山村泊宿
ニテ本日余目江駈村、是迄右通巡回無緩怠事務勉勵罷在
候間、乍憚御降慮奉仰候、諸所村方動靜探索仕候所、一
体昨年騷擾ニ首立候村々入費償金一件ニ奔走之者有之由
相聞候、既二第一大区一小区戸沢村市右衛門等騷立ニ無
關係、温海湯村勘左衛門江入費一件ニ罷越候段相聞、市
右衛門招呼訊問ニ及候処、勘左衛門江入費之義談判ニ及
候得共、領掌之向無之ニ付引取、爾来右様之相談決テ不
致趣申立候ニ付説諭ヲ加ヘ差戻シ、淀川清水之者共騷乱
ニ付調達費用金三万円程ニ相及、内式万円位ハ飲食料等

万円計ヲ以上京等諸入費ニ遣払候由承り候、然二各村之
為メ右通莫大之失費ニ及候付、村々江右割合穩ニ相頼候
テハ如何可有之候哉、尋ニ参り候者有之候付、右様之許
可可致権利素ヨリ無之、然二民費課出ハ不容易訊ニ付、
県庁ニ於テモ無故課出ハ出来間敷、敢テ人費ヲ促シ金ヲ
取候得ハ強談ニテ法律ニ背ク故、決テ不可為事之旨懇篤
相諭シ置、各村ニ於テモ入費之事ヨリ不穩ニ相聞ヘ、実
ニ村方之大重病ト存、加フルニ非常水損二人気沈鬱ノ向
ニ相聞ヘ、学資献金之為メニ旁大二障碍ト監定罷在候、
一第三大区三小区東岩本村外三ヶ村村長等種夫食米之事
ニ付、森藤右衛門江上京之上願筋依頼置候付、証書改
方之義同人帰県迄猶予戸長方江願出候由承及候ニ付、
如何心得ニテ何様之向願筋相頼候哉、其訳相料ス含ニ
テ右村長共江御用申遣シ置候付、追テ何分之義上申可
仕候、
一巡回先之各村通路筋諸所、田島痛損心ヲ寄セ見聞罷在、
然二往還筋其他大小之川々水満溢之形ニ相見ヘ、然共

酒田表之大水ニ比準シ勘考スルニ存外水損薄候、乍然
村ニ寄、皆無同様之場所モ有之向ニ承候得共、管内平
均ニ并シ候八十二一ツ之痛ニモ可有之歟、独リ目撃ス
ル所ニ御座候、

一 明十日第五大区一小区江巡回、同二小区欵三小区ノ内

ニ泊シ、不日帰庁之旨罷在候、

右本日迄巡回先之概略上申候、敬白、

第四大区四小区奥屋村

明治八年八月九日

松本幸方

冊子原寸 縦二七・五釐 横一九・五釐 三枚

二六五ノ四

森藤右衛門建言御取調之義、猶又上申

管下森藤右工門元老院へ建言之義ニ付、去月中陳述書進
達ノ次第、其節委曲及上申候通御座候、然ル処県地ヨリ
追々申越候処ニテハ、昨年騒擾ノ末、当節管下平靜ニ属
スト雖トモ、猶鄉村ニヨリ人氣不穩、動モスレハ今般藤

右工門建言御採用相成、県官ノ転変ニ論ナク、随テ是迄
収納物ノ内多分下ケ戻シ可相成品出来可致杯申唱、素ヨ
リ愚昧ノ農民共何等ノ弁モ無之、偏ニ利慾ニノミ惑溺致
シ候ハ無止事情態ニテ、是ヨリ官吏ノ申論ヲ次ニシ、専
ラ藤右工門カ左右ヲノミ相待居候事情ニ相聞、且昨年騒
擾ニ付右村々諸入費莫大相掛リ、其上藤右工門輩農民等
ノ為メニ周旋スルヲ名トシテ、当春以来数月滞京、一切
ノ諸入費悉皆鄉村ヨリ弁償スルニ論ナク、一体藤右工門
建言ノ儀ニ付テハ、新聞誌上屢種々ノ評論ヲモ併セ記載
致シ置キ、右等ニ乗シ管下狡猾ノ者共、猶又愚民等ハ品
能申聞セ候次第モ可有之哉ニ付、自然県官ヲ輕侮シ、
追々無謂次第申立ニ及、或ハ浮説ヲ唱米金ヲ課出スル等
ノ作略モ相聞、畢竟昨年騒擾ノ事件ヲ連綿致シ候事柄ニ
テ、右建言ノ条々御取調向一日モ遷延罷成候テハ、夫レ
丈ケ民心疑惑モ長シ大ニ県治ニ差支候ノミナラス、到底
管下ノ疲弊ヲ招キ、人民困難ノ基ニ候条、右等ノ事情深
ク御汲察ノ上、一刻モ早ク御取調何分明瞭ノ御裁判相請

申度、此段御省ヨリ猶又可然御取扱之程偏ニ奉懇願候也、

明治八年八月二十二日 酒田県参事松平親懷

内務卿大久保利通殿

冊子原寸 縦二七・五糎 横一九・五糎 二枚

三三三 鹿兒島側室村ヨリ久光公ニ上ル 旧六月十二日 同十八日

ノ筮則ニ通 合三通

(包紙ウツ書)
「此封のまゝ」
御前御側上り むら

旧七月二日
新八月二日

二六五二ノ一

筮則

長坤乾離兌坤
一…一…一…

遇晋之益

判曰、明夷ヨリ来リテ日地下ニ入タル象ナルニ、今日ニ至テハ日地上ニ出テ進ミ昇ル象也、九五ノ君位ニ居テ我

ヨリ言ヘハ、彼進ミ我進メハ彼肯スル象ニテ、大象謂

明出_レ地上_ニ晋_ト者是也、離ハ火トス、勢熾ニシテ消滅ス

ルコト速ニ事急ナルヲ利トスルニ、老陰震ノ長男ニ譲ル

ノ意、至極謹慎ヲ事トシテ文明ナル時ハ、九四ノ姦変シ

テ巽ノ入ト成、初爻動ク時ハ九四ノ陽横ル權臣失徳シテ

変シ去リ、姦威嚴ヲ逞シテ不中、正ノ行ヒヨ以テ下三陰

ヲ抑沮コトアタワス、且其謀意六五ニ通セス摧如タルヘ

シ、是ニ依テ貞固英邁ヲ以テ嚴々タル忠誠ヲ報フ時ハ、

不日成功アルノ意象也、

六月十二日 謹卜

文書原寸 縦二八・五糎 横四〇・五糎

二六五二ノ二

筮則

乾坎乾坎震兌
一…一…一…

遇姤之井

判曰、此卦ハ消長ヲ以云ヘハ何モ坤ノ大地ト崩レテ、又一陽下ヨリ上リ臨トナリテ、上ヨリ依頼アルノ象アリテ

泰トナリ、上ヘコト／＼ク從ヒ、大壯トナリテ夫トナリ、

夫ヨリ乾トナリ、乾ヨリ姤トナリタル象ニテ、一陰五陽

ニ遇フユヘニ姤ト名ク、何ナリニテハ上主人坎ノ耳ニテ

正ク聞キ通ルノ意ニテ、終ニ思フ所ヲ成就ナサル、コト

決定スルノ卦象ナリ、上ニ姤アリテ陰ニ事ヲ謀ルモノア

リトイヘトモ、全卦大巽ニテ風ナレハ地上ヨリ上ルモノ、

故ニ吹破リテ姤コト／＼ク散乱スルノ勢アル、故ニ此上

ヘハイヨ／＼貞固ニシテ謙遜ノ情モ含ミテ実意ヲ貫キ、

事ヲ取行ヒ玉フ時ハ五陽一陰ニ皆依ルノ意ユヘニ意ノ

マ、ナルヘキ卦也、

六月十八日 謹卜

文書原寸 縦二八・五糎 包紙原寸 縦二六・五糎

横四〇・五糎 横四〇・五糎

二六五二ノ三

(包紙ウラ書)

此御書付二

御方様色々御力ヲ

御つくし被給候との事ニ御座候」

本卦姤變卦井中卦乾ヲ以考フ

勢低ク頭少長ク目ハツキリシテ、ハヤクチニテ声ノ大キ、

方エクホアリ、子共二人アリ、女子ナラン、兄弟三人ア

リト見ヘタリ、腹マロク、歳五十一歳ナラン、

文書原寸 縦二八・五糎 包紙原寸 縦二六・五糎

横 八糎 横四〇・五糎

二六五 壬生基修秋月種樹等六名ヨリ左府公ヘノ密

白

華族会館ノ件

(表紙)

密白

会館設立ノ旨趣タルヤ華族一般ヘ関スル所以ニシテ、固

ヨリ一人一家ノ名譽利益ノ為ニ非ス、故ニ会館創立ノ始

ニ当リ普ク之ヲ同族ニ謀ル、同族中或ハ從ヒ或ハ否ラス、

或ハ始メニ從ヒ後背ク、到底背キ且未タ同盟セサルモノ
別ニ一大事業ヲ樹立シテ、華族ノ本分ヲ尽スヲ聞カス、
然レハ彼ノ辛未

勅諭ヲ奉体シ、華族ノ面目ヲ一洗セントスルモノ此挙ニ
越ユルモノ無シ、今ヤ元老院章程ヲ見ルニ、皇華族ヲ撰
フノ文アリ、華族ノ国家ニ尽スノ権理益彰然タリ、而シ
テ未タ志ヲ合シ、力ヲ一ニスルコト少シ、下拙等之ヲ熟
考スルニ、之ヲ一致スルハ

君命ヲ得スンハ不可ナリ、何トナレハ會館タルモノ元來
私立ノ一社ナレハ、同族ヲ董督率從セシムルノ權ナシ、
故ニ一旦背クモノ、及ヒ未タ同盟セサルモノ之ヲ協同ス
ルコト能ハス、該館振ハスシテ

君命ヲ仰クハ重々恐悚ノ至リト雖トモ、彼ノ海外帝國ニ
於テモ亦皆貴族ノ責任重シ、況ヤ我カ堂堂帝國固ヨリ華
族義務ノ帰スル所無ンハアル可カラス、若シ

君命ヲ仰テ同族一体ヲ會館ニ轉合シ、他日其寸微ヲ奏ス
ルニ至ラハ、即チ皇國ノ為ニシテ自家ノ為ニ非ス、仰キ

願クハ一紙ノ

勅諭ヲ下サレ、華族一体協力奮勵ノ基本ヲ勸奨セラレン
コトヲ、下拙等協議此段申上候、何卒非常ノ御奮勵ヲ以
テ御周旋被下候様伏テ奉密願候也、

明治八年八月三日

竹腰 正美

山内 豐誠

武者小路実世

万里小路通房

秋月 種樹

壬生 基修

左大臣殿

冊子原寸 縦二八糎 横二〇糎 五枚

云々 柳原前光卿ヨリ島津左府公へ

華族會館役員來訪ノ件

〔封紙ウラ書〕
左大臣殿下

柳原前光

封

時下弥御清安奉賀候、然ハ華族会館役員より同族振起目途太政大臣へ内回致候二付、右事件閣下及右府へ申上度二付同道參館仕度、就而ハ今日午後四時頃より御閑暇二被為在候得ハ拜趨可致候間、乍御面倒御差支有無御一筆御答奉伏願候、敬白、

八月三日

副啓、參觀仕候会館人名如左、

会館副長 壬 生(基修) 議官

会館書籍局長 秋 月(種樹) 議官

会館幹事 万里小路(通房) 從四位

同 上 武者小路(実世) 從五位

同 上山内(豊誠) 從五位

文書原寸 統一九・五種 横九〇・三種

三三 松田道之ヨリ琉球藩へノ制度改革申渡

八月五日

今日分宮并律書稽古学事修業等之件々、御請書并御願意之書付差上候為、摂政・三司官那覇江罷下御出張所江参上仕候処、松田殿(道之)・伊地知殿(貞徳)其外官員衆御出席、伊江王子より都而之書付松田殿江差上候御覧之上、今帰仁王子茂被罷下候哉と御尋付不罷下段申上候処、此節之御用は藩王直二御下り御談判被仕筈候得共、御病氣付今帰仁王子名代被仕事候得は、表向談判之砌はいつれ不被罷下候而不叶段有之候付、此所は氣相附不申恐入候段申上候処、今日丈は可相済先被差出候書面之ヶ条荒増可申上と左之通被申聞候、

一分當代御遠慮之一件は御尤之御申立至極致感心候、然は租税上納被仰付事候得は、藩王より地主共江代価渡方被仰付候儀条理二不相叶、乍去格別成御所存拙者迄二而難押置候間、此儀は別紙を以可被願出、左候ハ、持登及言上候上、於政府何分御吟味可相成段、且兵隊共取締向人数減少等之儀茂是又御尤之御申立、然

共一隊二隊各人数之定有之、夫より差分ケ減少杯之方
二は難被仰付候得共、於政府茂手輕之分隊可差遣御心
得二候段、

附分營より敷地之儀御見分被成候得共、所柄無之由

候得は、最初陸軍省官員衆御検査之場所御請之段

申上候処、此儀御気毒之事付御挨拶、左候而分營

は段々規則有之段為被申事候、

一唐取合同一件当藩申立之趣は、是迄五百年余進貢仕候
付、差離候儀難黙止と之訳合二而藩中苦情迄之事、当
分通曖昧有之候而は、

天王陛下之疵二可被為成、当藩支那ト之続年来之苦情
茂能御察なから、不得已拙者を是ノ遠洋之所江使節被
申付、苦情之訳二而可相済程之御用候ハ、在勤親方
江書付を以被御達候而茂可相済候得共、右等之訳合有
之所より態々被差遣候、当藩は全支那江茂属せず全日
本江茂属せず、当分通二而は外国より乗り取之企杯相
出来可申、勿論当時

御親政之世ト相成候付、旁以条理名文相立候様御処置
無之候而不叶、奥之所迄委任被仰付置事二而幾重申立
候而茂御取揚被仰付間敷、当藩地脈・人種・言語・風
俗等

皇国二因り候付而は、万国公法之吟味二入候得はおの
つから御管轄之所明二可相成、尤進貢差出候迎支那往
来致商売候儀迄差留候筋二而は無之事二而、此儀二付
而國中難立行訳合は無之、支那よりは封冊を給ひ候迄
二而、其外何之管理茂無之故、支那は聘礼属国、真之
属国は

皇国二候得は、いつれ
皇国江属し候様無之候而不叶、此上難御付候ハ、支那
二属し候共、いつれ一管轄之方不相成候而不相済事候、
支那ト之談判向は台湾征伐之儀二付大久保殿江償金差
出候砌、拾万ナルハ難民江可相与と有之、支那之管轄
二而候ハ、直二琉球江可相渡候を
皇国江相渡置候付而は彼ノ管轄二而は無之、

皇国御管轄之所分明ニ相成可申、右歎願筋再度迄は不苦三度ニ押移候而は不相済、此節之御用奥事迄委任相成居候付而は東京江歎願等ニ付、王子方・貴君方、使者立等は拙者より不差免、政府より茂被差免問敷と被申候、

一職制改革之件、藩は藩之職制、県は県之職制を以御所置不相成候而不叶、当地藩ニ被封候上は従前より職制通ニ而は相当不致所より、御吟味之上御達相成居候、当藩難指行訳有之候ハ、幾重ニ茂可願出、拙者滋賀県令之時茂、たとひ太政官より之御達ニ而茂難行儀は押返願立為申事候、尤藩体は永々共相替間敷候得共、体裁等は時勢変遷ニ随ひ、漸々とは変革相成候茂難計事候、右旁委敷書取を以可相達、此儀は両三日隙取申事ニ而前条之趣は早々藩王江達上置候様被申聞候事、

同六日

一今日摂政・三司官罷下、中田殿相逢、昨日歎願筋申上候付松田殿より段々御達之趣、早速藩王并諸官江茂拜

承させ候処必至と致驚動居候、当藩情実之所は委細願書ニ相見得候通ニ而、何卒願立通被仰付度深願御座候間、幾重ニ茂宜様御心添被下度申上候処、支那之一件は松田殿被申候通、於政府御議定相成居候、此儀於政府眼目之事、当藩五百年余之苦情有之所を政府茂能御存なから、不得已して遠洋之所江大丞被差遣置候、苦情之訳を以相済候程之御用ニ而候ハ、在番親方書付を以御達相成候而可相済、右通之次第ニ而強而願通と申事候ハ、支那江相附候共、一方之管轄相成候様申達ニ可相成、琉球日本相離候而は難立行、勿論右談判筋ニ付而は、支那は大国、日本は小国ながら合戦ニ及候所迄茂政府は御吟味相成居候付、幾重願立候而茂詮立申間敷、且職制之件は於當藩難指行賦と存、所存之程松田殿江茂相通申候処被汲取候模様ニ而、申立之訳ニ依而は吟味相附申答候、乍去時勢変遷付而は先寄当分通ニ而は不罷成、漸々とは可被召替候得共、此儀は不容易事ニ而親切之人被差遣、四五年又は拾年程茂相還

り不申は難成段被申候事、

一松田殿御宿参上前条之趣を以御頼申上候処、昨日御達之趣を以段々被仰聞、此儀苦情之申立内分、逆茂致承知候儀不罷成、且職制之件は難指行廉有之候ハ、申立之訳ニ依り、吟味相付可申候得共、今書付ニ相見得候訳合ニ而は条理相立申間敷、拙者県令之時茂難行事は、仮令太政官より之御達ニ而茂押返シ願立為被成段被申聞、此方情実之所申上候得共、御汲取之体相見得不申候事、

一伊地知殿相逢松田殿江申上候趣、且支那は五百年余之交情有之分ト相離候儀不罷成、貴文ニは当藩之情実能御案内之通候得は御評議之砌、道ぞ宜様ニと申上候処、此節之御用は松田殿委任之事ニ而、此段は同人江相談可被致と被申、何ぞ聞取之体相見得不申、且種子島殿・河原田殿、其外定式方御銘々相逢御頼仕候処致承知候段、一ト通之御返答有之候事、

冊子原寸 縦二七・三種 横二〇・五種 六枚

云々 京都市外中路六郎延年ヨリ東京内田政風へ

久光公御病氣其他正邪判別ニ付金光明神へ祈願ノ件 合五通

二六五六ノ一

(封筒)

東京 京橋ノサキ

五郎兵衛町貳十番地

鹿兒島土族

内田政風殿

西京

等持院村

中路六郎

至急要詞

(封筒ウラ) 亥八月八日午後発ス

本文之運ニ付大井川通曙ドコロでは無之、御同人も方今手元差向候ハ、難用、取片附申度とて今四日横浜丸之便より帰国、八月上旬ニハ必可被罷登御約条候間、是又御舍何も御尽力被下候、斯迄神慮被尽候次第御洞察、八月之機会ニハ必成功行届候様呉々も祈上候、頓首、

岩下君在坂之事被致承知、必面会致度旨、金光明神被申聞候付此段申通辭候処、兼而馴染之事故早速上京、二日御肌着御祈禱拜見、且御病之動き云々ト申、御様体等伝聞深被相悅候付而は時勢切迫ニ付、神慮之次第等追々御談有之候処、岩下氏見込夫是返答被致候処、一了簡ニ而

ハ何とも難申旨ニ而二日夕より貴地へ被差越、神々之思召窺之上決答可申トテ發行、三日午後歸西いたし云々之儀ハ八月二入候半而ハ実功難望旨等返答有之候処、岩下

氏も終ニ神慮ニ伏し被申候而、時節到来候ハ、必出世死力を尽し可申との契約治定相成申候、右神ト人ト之手詰之談判ニ寄、岩下君之淵底篤と相窺候処、旧恩ノ重キト

朝廷之責キトヲ一荷ニ負て、今日之憂苦ヲ堪被忍候胸中能ク相知レ、いよ／＼末頼母敷奉存候、素より尊兄ニハ

右等之事御承知故、過日も御書通等有之候御事ト察上候、併時不至して芳敷御返事も無之哉之処、今日神明之御力

ニ寄、左様治定いたし、

老公御吟方一人出世之時ヲ得候事御同慶之至ニ付、不御

取敢右成行御報知申上候、乍去好機會ニ望ミ候、確証手ニ取迄ハ御他言御無用ニ可被成下候、当今ハ別而寸善尺魔之世体、却而毛ヲ吹疵ヲ求る事も有之候半哉ト恐察仕候、穴賢、

文書原寸 縦一五・四種 封筒原寸 縦一六・五種
横五九・八種 横 六種

二六五六ノ二
八日午前、至急呼使參候付不取敢飛行候処、金光明神御下リニ付幽界之事情、且人事御物語之上、最早死地ニ立

至候付今日ハ暇乞之為歸西セリ、仍之至急ニ呼テ此事ヲ談スル也、此辺の事件、おとにきく楠公さくら井のおも

むき思ひ出られて殊ニ涙トメかたし、路程大かゝりなは、即日飛行して御末事も申上度存候也、死後ノ事ハ委曲松

侯ニ申含タリ、必 老公御病氣ノギハ幼少ナガラ金光が秘伝ヲ守ツテ松侯が御全快ヲ遂ヘシ、安心致スヤウト被

示、不思落涙之次第御察被下候、乍去之印ハ升々襄運ナ

リ、今日人ノ眼ニよく見ルハ晄かたの灯火の油尽ントシテパツマタと光ヲ放カ如し、心配スベカラス、此光失フ時ハ夜ルヲ昼トシテ横行之者、日光のマハユキニ恐レテ逃ケ隠ル、事目前ナリ、化物ノ逃ル勢ひニナス業ノ毒氣ヲ慎ムヘシ、大事也、

右之次第二付而ハ何欽人事之上も兼而思召やう之手順ニハ難運して、思ひ之外之儀出来また 神々の御心もへつゝにして神俄可定ならず、前後左右程能トハ難參二付、彼 大神の思食のまゝに券^(巻)属の神々死地に入ツテ、今一際御尽力被遊候之御事と察しられたり、必ス死し給ふ事とも決かたし、実ハ死シ給ふ御事と窺て愚存申述、其実ヲ得たり、乍去必至ヲ定め玉ふ御事なれハ、よの常の御尽力ニはあらず、いと老たりき、

八月八日 二字過帰宅シテ認

「^(付紙)三日、病の御うこぎに付、今日ハ御氣分をたやかならず、御胸のあたりもやゝとして御氣むつかしく可有

之候との事、御病は昨二日より催して動き候よし也、」

文書原寸 縦二八種 付紙原寸 縦三五・六種

横二〇種 横四・二種

二六五六〇三

拝呈、当夏ハ晩立も少々田面水乏敷、既雨乞之炎暑実ニ難堪候処、益御清昌奉遠賀候、去月廿九日得貴意申上候事々御承知被成下候御儀ト奉存候、一ト七日御祈禱相濟候付、此御肌着返上可仕本意ニ御座候へとも、明日より御祈禱可被申上御本体無之候付無余儀、此俟止置引続キ修行候条被申聞候、実は七日相濟候御品御肌二被為觸候ハ、自ラ御全快之御都合も宜敷由と伺候へとも、何分右之訳故不任心底可然御取計可申候、二日御祈禱之節別紙之様相伺候付心覚ニ記置候、御序ニ御伺可申候、積年之凝りかたまりヲ讒之日数ニ而動スト申事は、不容易事ト外神様之御噂も御座候へハ、乍序伺申上候、右御祈禱且御さた之節岩下氏も同座ニ而、事実被相伺動カされは

治しかたし、難有御事と感涙被催候、尊君へも御同前可申候、早々謹言、

八月五日

文書原寸 縦一五・四釐 横五〇釐

二六五六ノ四

別封呈上仕ント欲スル処、三日附之責報相届拜見、其後之御成行逐一敬承、早速神前二捧、猶行末御祈稔仕候条御放慮被下候、世人拳而憎ム事云々ト御認之御文意ト外々裏運云々ト有之儀御比較被下、是一事二而毛頭幽合_付体之勝末頼母敷思召可申候、枝葉之儀変化ハ少しも御心配不被遊候様奉存候以来之こと御參 朝二さへ成候得ハ自然ト御運ひ二成可申儀、兼而 神慮ヲ同居候へハ、是迄之所御樂ニ奉尽_付処、此末ハ神々之御扱ひ被遊候儀ト奉存候、乍去幽界之儀も禰伴日ノ神謀ありて、則別紙之様ニ成立候へハ猥ニ安眠も難成、折角奸謀御探索申候、正ノ奸ニ倒サるも古今珍らしからず候へとも、よし倒る

とも後世ニ恥辱ハ残し不申、是ノミヲ我身ノ本体ト覚悟仕、唯 神明之冥助ノミ歎願罷在候、別封之御見込ニ而は神も必至ニ御ハマリ被下候儀ト朝暮難有被申候、過日岩下君暴論之始末等申上度候へとも、一兩日咳氣ニ当リ平臥中難届御察可被下候事、併当世たる故御放慮可被下候、一生懸命之場ニ立至候事故、胸中之潜藏一吞ノ掛引目覺敷事とも二御座候、右等二寄幽議も切迫致候半哉、愚察之次第も御座候、穴賢々々、

八月九日

延年

拜

内田君

尚々秋暑御自愛折角御尽力祈上候、昨日午後より風起り雨氣催候へとも一向降不申、直晴之勢ひ実ニ堪兼申候、海江田君御逢之節宜御風声勸申上候、以上、

〔付紙〕

北野天神前西へ入紙屋川町

等持院門前辺ハ幸便次第届候嘗故遅延無極候也

池田久兵衛殿方ニ而 中路延年

自今御書状之節、上封面右体御認被下候へハ早速相達

申候、為念申上候、

文書原寸 縦一五・四糎 付紙原寸 縦一五・四糎

横五二・五糎 横 三・七糎

二六五六ノ五

尊兄御痛所之儀も 御殿へ御上り之序有之、必御立越二
而御見舞可被成旨兼而承居候得共、何分積年之御病故速
ニ格別之功驗も御覺不被遊哉ト深心配仕候、過日御差向
之管封ハ無遠慮御受被成候付、必御世話可被申上儀ト存
候へとも、今日之御加減無御遠慮申越可被下候、早速其
段申上、猶御都合能取計可申候、此度発足之節被成下候
御細事ヲ以、當時之御元氣相伺候処、何分ニも御苦心厚
キ故、内心ノ草臥強クミゆれハ斯御苦勞不被成様可申旨
被申聞候、時之不至節ハ何程尽しても十分ニハ無之もの
故、唯無油断心懸テ余り氣を遣ふまじきやうニと被仰候、
且

尊兄ニハ氣を遣ふくらひの事にてはなく、氣ヲ操なりと

被仰候よし、何卒今暫御ゆるめ遊し候様、くれぐれも申

上候様被申は左様御承知被下候、不具、

文書原寸 縦一五・四糎 横二二・六糎

云々 斎藤簡ヨリ左府公へ人材推薦

浅田宗伯等十人小伝添

(表紙)
上

牛込横寺町住宅
静岡県土族

元和宮様御附医

浅田宗伯

此人信濃国郷土之二男ニ而幼ヨリ聖賢ノ学ニ志シ、医
学モ仕、壮年ニシテ療蹟有之、門前市ヲ成候程ニ而、
今猶益盛ニ候処、一体之人物徳川之節ヨリ大ニ国家ヲ
憂候得共宰相其人ニ無之、商只々医而已ト人ハ存候得
共、中々王佐之器局御座候人ニ而、学文モ正敷、詩文
モ自由ニテ遠謀才略ニ至リテハ人意表ニ出候而、必医

員杯ニ可被差置人ニ無之、大官ニ可被任ト申内參議ニ被仰付候得ハ三公ノ股肱トナリ、万機ノ大政ヲ羽翼シ、各国ノ仮冒ヲ受ス、凜然ト廟堂ニ立、天下ヲ掌ニ統御スルノ賛參必無疑ト奉存候、此人ヲ除キ外ニハ先可鮮ト奉存候、尤言行ハ勿論家事内外聊間言無之、家産モ優ニ立居候間、塾生月俸之賤少ハ勿論、課学医按等之恙懃勸進森々然トシテ可觀ニ御座候、江戸東京之人物ニ数十年間相交リ候モ数百ヲ以テ数ヒ候得共、大官ニ可任人ハ有之候而モ參議可擢人ハ不見当、畢竟聞見之狭少故トハ奉存候得共、出羽之竹雲如キ德行ノ君子ト可称程ニテモ、參議ニハ遠謀才略人意表ノ場ニ至リ、如何ト心中ニ疑惑ヲ生シ申上候程ニ六ヶ敷撰拳ト奉存候、夫故ニ候欵、漢土ニテモ歴世宰相ハ一人ニ任候儀ニテ其下參知政事輔翼ニ候儀之處、皇邦ニモ大臣ハ一人ニテ左右二人ニ候得共、当今ハ參議政權御座候故三四人乃至五六人ノコトモ御座候ハ、乍恐純一二無之少々御失体之様ニモ被伺申候処、簡愚眼力之及兼候所

ニ御座候間、御英明ヲ以多人数ニモ可被仰付候諸省之卿太輔ハ大切ニ御座候得共、參議程策要ハ無之ト奉存候、參議ニサイ一人ヲ被得候得ハ大ニ天下ハ統御シ安シト奉存候、無為ニシテ治ル者夫舜欵ト申モ賢良ヲ被為得候故ニ御座候、ケ様ニ人物ヲ申上候テモ愚昧未熟之簡愚ニ御座候間、眼力相違難計御座候間、其人物ヲ御呼出シ御面接之上、尤御腹心之向御列席ニテ御題目ヲ御設ケ、種々ニ御尋問被為有、徹底御叩敲之上、尊慮可然思召候ハ、御擢用可被為有候、是国家御尽忠第一之三公股肱ニ付、最第一等之御精撰ト乍憚奉存候、

出羽国山形県下
結城氏ト申

豪農家方ニ寄留

本間竹雲
俗稱八郎候由

此人ハ一体同県下長谷堂村一向宗寺之弟ニ候処、弱冠ニシテ聖賢之学ニ無之候而ハ人道無之ト憤發シ、程朱ノ実学ニ深ク困勉シ、卒ニ還俗シ天性無慾ニテ私心一

毫毛無之、事々聖賢ノ規矩ニ循由シ一言一行過失無之、平居或併日食フノ至貧ノ時ト雖モ優々然トシテ、聊心ニ関セズ、其善行多端枚挙シ難ク候、詩文モ相応ニ出来、書モ可也ニテ、惣ジテ言行一致聊モ間然無之、真ニ德行ノ君子トハ如此人ヲ申候半欵ト奉存候人物ニ御座候、戦後ニ付八年間不相見居所不分、文通モ不仕候間、人物変リ候モ難計候得共、如此君子立之人ニ付變化ハ必有之間敷ト奉存候、

主上御学文之大師ニ被為命候ハ、御訓導、御師表ト為ニ堪タリト奉存候、海陸二省ノ外諸省ノ卿大輔、且ハ大臬之令杯ニ候ハ、近臬必来リテ法ヲ取ト申程之治蹟無疑ト奉存候、只參議ニハ遠謀才略人意表ニ出候処、如何哉ト愚案之及兼候所ニ御座候、是又当人御面接御腹心之向御列席、同前種々要領御尋問可被為有候也、

小椋中ノ鄉村二十四番地
庚申塚向側邸住宅

大橋燾治(次カ)

此人ハ元徳川旗下某ノ弟ニ而幼年大橋順藏(訥庵)養子ニ相成、家学ヲ継キ純々ト謹守孝順実子ノ如ク、父没後モ学風并行状共父順藏ノ道ヲ少クモ政動ナク、家塾生徒モ矢張盛嚴ニシテ洋風洋器等一毫毛不用不取、生徒ニモ嚴禁シテ嚴然タル真儒ニ御座候、尤家産ハ僅ニ立居候間是又先父之通ニ而、一体行状ト申、學術ト申、詩文ト申、間然スル無之上等ノ人物ト奉存候、

主上御学文之少師ニ被為命候ハ、必御訓導筋御裨益森々然ト奉存候、尤參議外人撰考試官并諸省之卿・大輔其他何官ニテモ、必謹勉奉職治蹟奏功必然ト奉存候、於御面接御列席御尋問向ハ御同様可然奉存候、

元前橋藩ニ御座候間、矢張前橋県實屬
カト奉存候、下谷山伏町六十番地住居

城井寿章

此人幼年ヨリ学ニ就キ専程朱ノ実学を勉強シ、壯歲憂国ノ志深ク初小官ニ奉シ候得共、平人ト合和仕兼、卒ニ免職間居仕、專杞憂之忠情所々建言等仕、学正敷詩

文モ可也ニテ一体ノ人物剛直寡慾、廉正仁恕ニシテ婢僕ヲ慈愛シ、平居甚貧ト雖モ聊貧ヲ説カズ、尤言行忠信間然無之上等ノ人物ト奉存候、人撰考試官并

主上之侍従・左右史官等ニハ剛直骨髄ニ付優然ニ御座候得共、但左右史官ハ剛直格正而已ニテ足り候儀ニ付、諸省ノ大丞以上大県ノ令等有有用ノ方江御召遣ノ方ト奉存候、

牛込山伏町住宅
大蔵省八等出仕

中島行孝

此人性来学業ニ乏敷御座候得共天性慈仁惠恕之心深く、親戚朋友等ノ貧究ヲ救賑シ、困厄ヲ諭解シ候ヲ官暇ノ勤勉トシ、從來廉正寡慾ノ好質ニ付憂国忠誠之志深く、人之為ニ産ヲ破リ候程之思ヒヤリ厚ク上等ノ人物ニ候ト奉存候処、学業之敷候得共一方ノ大任被仰付、篤実勤学ノ士ヲ屬吏ニ被成下候由、諸省ノ大丞以上、大県ノ令ニ被為命候ハ、大治蹟無疑ト奉存候、朋友共蔭ニ

而無学ノ学者ト大ニ愛敬イタシ候行状、一々聖賢ノ規矩ニ合兼候所有、子弟ノ訓導等如何ト奉存候得共、諸

国家農等ニ服慕之者不少由ニ付、此大層ノ国債ヲ一手ニ被仰付候ハ、不残民債ニ振換、外国ノ御深愛ヲ消滅シ尽忠可申上トノ持論毎々申聞、甚可貴可愛大困忠ト盛賞罷在候、此人ヲ猶高級ニ被相登、外国債振換掛被仰付候ハ、数月之間ニ必定成功可仕簡愚等兼々大患之外国債安々ト民債ニ振換リ候ハ、一廉之大勲功ト奉存候、

築摩県實屬士族
当時警視局十二三等出仕ニ候歿
向柳原一丁目十四番地
堅堀邸ニ住居

石沢謹吾

此人性来厚重沈静純忠ニシテ、元飯田侯家宰之節一藩ノ人心服従シ、右旧主尤畏愛仕候程之人ニテ、学文詩文モ可也出来、士民ヲ推恕惠撫シテ言行一致、小藩ニハ珍敷人ト申唱候上等ノ人物ト奉存候間、人撰考試官

又ハ諸省卿・大輔或ハ大県ノ令ニ被為命候ハ、必治蹟奏功無疑ト奉存候、当時小官ニ罷居ノ人ニ無之候得共、旧主ノ為ニ東京ニ住シ旧主ノ究迫ヲ不贅ヲ欲シ、自力ヲ以テ永留官瞻、旧主ヲ輔翼ノ忠事ニテ言長ケレハ不贅候、

静岡県士族
牛込私方町住宅

本多成功

此人學術左而已ニモ無之、詩文ハ不出来候得共、元福島城主板倉家ノ弟ニテ本多ノ嗣子トナリ、徳川家大監察ヲ司リ、性来強宜廉正寡慾ニテ憂國ノ志ニ於テハ飯食ヲモ忘レ、好賢重士ノ儀大得意ニテ左相公ノ御動靜毎ニ東西奔走シテ憂意ヲ述ベ、憤情ヲ訟、煩悶焦心仕候儀、自身ノ疾病ノ如ク実ニ忠魂ニ於テハ人ニ不讓、上等ノ人物ニ御座候得共強直廉正ト申大長致御座候間、主上御学文附ノ侍従左右史官ニ被仰付候ハ、一心不覽ニ剛忠ヲ尽シ、必他人ノ企及カタキ実蹟御座候半ト奉

存候、

北海道開拓使實屬
胆振國有珠郡住宅ノ所
當時東京寄留

萱場元賢

此人程朱ノ実学ニ多年勤勉仕、性来国家有用ノ志深ク廉正開豁寡慾ニシテ言行間然ハ勿論ニテ、一旦開拓使小官ヲ拝シ候得共、志大ニ学力強ク衆小吏ノ交和ヲ厭ヒ、辭職シテ東京ニ寄留仕、經業修行致シ居候上等ノ人物ニ御座候間、此人撰考試官諸省ノ卿・大輔・大丞又大県ノ令ナリ共被為命候得ハ、県ハ大ニ民ノ心ヲ得愛養心服無疑、近県有志ノ吏人必来リ、法ヲ取候程ノ治蹟決然ト奉存候、諸省モ必政蹟奏功可仕奉存候、

北海道同使實屬
有珠郡在住
當時同使十二等出仕奉職

田村顯允

此人工程朱実学ニ潜心、多年旧幕ノ節、昇平学斎長トナリ、御維新之節北海道エ初テ開拓ヲ願數百人自費ヲ

以移住シ、追々数千人ニ及開墾隆盛ニ付テ、北海道開拓第一ノ賞ヲ賜リ候モ此人卜前ノ萱場両方ニテ、性来寡慾廉正、亦酒色ヲ不好、真ニ上等ノ人物ト奉存候、此地江被差置候ハ国家ノ御為可惜儀ニテ、東京清要ノ官ニ御登庸、尤其所ト奉存候、治蹟功業前ノ萱場氏ト大同小異ハ御座候共、何レモ東京ニテモ容易ニハ難得人物ト奉存候、諸省ノ卿・大輔・大県ノ令、其外何方江被召遣候テモ必奏功無疑ト奉存候、

右九人ノ人ニハ簡愚何レモ数年之交際ニ而、言行ハ固ヨリ學術素心真知仕居御登用相成候ハ、必奏功可仕人々而已ニ御座候間、必定大政ヲ賛參シ廟堂ニ^(案)整正トシテ、各国ノ佞譽輕瞞ノ干犯ヲ一毫不被為蒙ノ有用真材ニ御座候間、如此ニ乍恐大凡御用ヒ場迄奉申上候、右書中申上候儀万一相違仕、私慾贓罪ヲ犯候ハ勿論、奸謀邪曲国害ヲ生シ候如キ不屈御座候ハ、唐ノ太宗・宋ノ大祖兩賢帝被為立候拳主連坐ノ法ノ通り、其犯人ト同罪ヲ甘受可仕印紙証文可奉

差上候、此外及見及聞有名ノ人モ猶数々御座候得共、居家行狀素心迄ハ真知不仕候間、右同罪可奉甘受証文差上兼候間不申上候、尤簡愚ハ当今ハ別シテ人々ノ本色顕露仕候ニ付交友至而乏敷、左右史官ノ人等不足ニテ恐入候得共、是ハ無慾廉正剛忠三昧ノ人ニテ足リ申候儀ニ付任ハ至テ重ク御座候得共、其人ヲ求メ安候間、右ノ面々御登用ノ上ハ、其人々ノ薦メ候中ニ左右史官ニ堪候人才必少ナル間敷ト奉存候、汝カ知所ヲ拳ヨ、汝知ラサル所ハ人夫レ捨シ乎トノ聖語ニ隨ヒ不申上候、人数少ク恐入候得共、若尊慮ニ被為叶不殘位御登用ノ不足ハ鮮マト奉存候、尤浅知愚昧ノ簡愚申上候儀、定而不都合ノ廉モ数々可有御座候得共、愚意性一盃大丈夫ノ向而已奉申上候赤心ニ御座候、謹恐謹言、

明治八年乙亥八月九日

斎藤簡再拜

外ニ奉申上候、

佐倉県下
上総国河辺郡片目村農

布治帰一郎

此人学業詩文何レモ明達ニシテ、才略モ亦遠謀奇略人意外出候俊傑ニ御座候、先頃台湾御出兵ノ節、清朝江大久保殿御使ノ節、單身波濤ノ外江沅海シ、支那官人江(利通)兩國戦否ノ利害ヲ演、日本ノ引ケニ決シテ不相成候様遊説仕度旨左院江建言仕候由之草稿、追而一覽仕候処、既ニ戦ハントスル敵地江入、單身ノ遊説ハ中々身命ヲ抛候心得ニ無之候而ハ踏込兼候次第ニ而、学力才量蘇張ニ彷彿不仕候而ハ落得カタキ儀ニテ、其断然タル氣込可盛ノ至ニ御座候、惜哉、大久保殿御接待中ニ無之候而ハ遊説ノ真味無之ト申処江議員不被思召付候哉、只々大久保殿ヨリノ消息ヲ被成御待候御様子ニテ、卒ニ御採用ニ不相成、和親ニハ相成候得共、十分ノ和親ニ無之トテ当人甚遺憾之至ニ心得候由、斯人ノ拳動勁賜本文宗伯ニ可匹敵最上等ノ人物カト奉存候得共、交情浅クシテ居家素行素心、熟知不仕候間申上兼候得共、

可惜之奇士ニ御座候間人撰法ニテ隱密使江被仰付、其郷里江被遣、彼数ヶ条之可否法ノ通り極精密御探索相成候上、聊間然之儀無之候ハ、必參議迄ニモ御登用ノ器局ト奉存候、

冊子原寸 縦二六・五釐 横一九・五釐 九枚

三六 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

朝鮮江華島事件會議期日

(封筒)
島津左府殿 実美

(封筒ウラ)
封

御安泰奉賀候、然ハ明朝朝鮮事件評議可仕申上置候処、明朝ハ拙者

皇居江參上仕候二付、右會議ハ来十二日八字ニ仕候間、此段申上度如此御座候、草々拝具、

八月九日

島津殿

実美

文書原寸 縦一七・八釐 封筒原寸 縦二二・五釐

横 四九釐 横 七・五釐

云々 京都府中沼清蔵ヨリ元老院ヘノ建言

金貨濫出ノ防遏策ニ就テ

(表紙)
「宝貨泄失ヲ防遏スルノ建議」

臣嚮ニ自ラ揆ラス、敢テ狂瞽ノ言ヲ陳シ、以テ国家ノ太政ヲ議ス、草野ノ鄙人忌諱ヲ識ラズ、猥ニ不測ノ禍機ヲ踏ム、有司包容措テ問ハズ、直ニ取テ之ヲ上申セリ、嗚呼迂腐ノ言何ゾ神補スル所アラン、罪責ニ道ル亦至幸ト謂フベシ、臣ガ如キ者田間ニ伏在シ力メテ爾ノ田ヲ耕シ、以テ恩波ニ浴シ再ビ天下ノ事ヲ言ハザルベキナリ、然リ而シテ天下陵遲ノ禍烈焰覆舟ノ中ニ坐シテ言笑自若タルニ埒シキ者アルニ似タリ、狂愚ノ性自ラ止ム能ハズ、隱黙スルニ忍ビズ、敢テ復鄙言ヲ陳ス、語ニ云ク、愚者千慮必有一得ト、伏シテ惟ミルニ当路ノ君子人ヲ以テ言ヲ

棄テズンバ、未ダ必シモ小補ナクンバアラザルナリ、臣謹テ按ズルニ、国家多故以來天下ノ大計ヲ論スル者紛々一ナラズト雖モ、之ヲ要スルニ富強ノ二字ニ出デズ、而シテ政府注目スル所モ亦恐ラクハ此二字ニ出デザルベシ、然レトモ形勢常ニ相背馳シ、名実一トシテ矛盾セザルハナク、駁々然日ニ貧弱ニ陥ル者、其故何ゾヤ、臣愚竊ニ以為ク、是レ皆本ヲ忘レ、末ニ趨ルノ致ス所ニシテ、近時開化ノ説ノ如キハ其尤モ甚シキ者ナリ、今之ヲ前古ニ徴スルニ暇アラズ、姑ク目前ノ近似ナル者ヲ借り、之ヲ論ゼン、一農夫アリ、固ク世業ヲ守リ以テ生活ヲナス、一日街市ニ游ビ歎羨シテ曰ク、彼レ其居室ヲ高壯ニシ、其衣食ヲ美麗ニシ、其器什ヲ便利ニス、此レ蓋他ニアラズ、工業以テ巨大ノ利ヲ興シ、商法以テ倍蓰ノ益ヲ取ムルナリ、開化ノ至ト謂フベシ、農夫ノ入ヲ度リ出ヲ制シ、粗衣糲食辛勤以テ歳ヲ終フルノ比ニ非ズ、我豈開化セザルベケンヤト、是ニ於テ田園ヲ典売シ若干ノ金ヲ獲、以テ石室ヲ營シ洋服ヲ着シ、百般ノ洋器ニ至ルマデ悉皆之

ヲ購得シ、既ニ其金ノ一半ヲ費シ、尚其一半ヲ以テ或ハ
工人ヲ雇ヒ新器ヲ創造セントシ、或ハ珍品奇貨ヲ居キ、
以テ倍徒ノ益ヲ謀ラントセシニ、元是レ農夫機智短淺、
彼ノ百貨ノ低昂ヲ瞬息ニ制シ、贏輸ノ分ヲ毫釐ニ争フ者
ノ比ニ非レバ拳グル所一トシテ蹉跌セザルハナク、新器
創造セシモ得ル所失フ所ヲ償フ能ハズ、珍品奇貨ヲ居ク
モ毎二人ニ先ダツ能ハズシテ陳腐售レズ、加之姦商隙ニ
抵レ百万之ヲ騙シ、余金殆ンド尽クルニ至ル、且ツ儉ヲ
去リ奢ニ習フ、既ニ久シケレバ百般ノ費用頓ニ節約スル
能ハズ、生理遂ニ窮シ、居室ヲ估リ衣服什器ヲ典シ、資
産蕩尽竟ニ赤裸トナルニ至レリ、嗚呼本務ヲ忘レ末利ヲ
逐ヘバ古今其敗轍ヲ同フス、豈惟一農夫ノミナランヤ、
家國天下皆然リ、今日ノ所謂開化其レ殆ンド之ニ類スル
有ル歟、窃ニ惟ミルニ

皇朝從來ノ國勢獨立体ヲナス、百物充衍給ヲ外國ニ仰グ
ナシ、交際ハ本止ムヲ得ザルノ余謀ニシテ國ヲ立ツルノ
本体ニ非ルベシ、蓋有無相通シ有余ヲ以テ不足ヲ補フ、

經國ノ道ニ於テ固ヨリ利益ナキニ非ズ、然レトモ利ノ在
ル所害必之ニ随フハ理勢ノ必然ニシテ、出入ノ際嚴ニ之
ガ章程ヲ立テザレハ、其弊害言フニ勝ユベカラザルモノ
アリ、而シテ其患ノ最大ニシテ且ツ防ギ難キハ、寶貨ノ
泄失スルヨリ甚シキハナシ、臣書生國計ノ贏縮如何ヲ知
ラズト雖モ之ヲ道路ノ言ニ聞ク、數年以來寶貨ノ海外ニ
泄失スル者年々増加シ、去年來ノ如キハ既ニ二千万ニ及
ブト、現今ノ事勢ヲ以テ之ヲ推考スルニ兩三年ヲ出デズ
シテ、匱且ツ乏ニ至ラザルヲ得ンヤ、而シテ又聞ク、外
債ノ數既ニ三千万ニ過グト、一旦償却ノ日ニ至テ公藏既
ニ竭クレバ、其勢必民間ノ私貯ヲ括セザルヲ得ズ、私貯
既ニ括シテ足ラザレバ、必刀劍ノ裝飾、婦女ノ首飾、其
他僅々ノ器物ニ褫スル者ニ至ルマデ、皆括シテ之ヲ銷鎔
スルニ至ルベシ、然レトモ尚足ラザレバ、遂ニ國土ヲ典
売スルニ至ラザルヲ得ズ、事勢此ニ至レバ楮幣ノ流通頓
ニ塞リ、膏ニ空楮ヲ抱テ悲歎スルノミナラズ、内訌反噬
ノ禍發セザルヲ得ズ、是ノ時ニ至テ神算鬼計ナル者百群

輩出スト雖モ、其將タ何ヲ以テ之ヲ濟ハンヤ、臣所謂烈
 焰覆舟ノ中ニ坐シテ言笑自若タルニ埒シキ者はナリ、以
 テ寒心セザルベケンヤ、且夫レ宝貨ノ外國ニ泄失スルヤ、
 真ニ國家ノ永患ニシテ其始マル所ヲ知ルナシ、建武ノ時
 僧兼好ナル者既ニ論シテ之ヲ警ム、徳川六代將軍ノ時ニ
 至リ深ク其害ヲ察シ、痛ク之ヲ防クノ方ヲ設ケリ、其卓
 識遠見千古不磨ノ論ト謂フベシ、白面書生治体ニ憐キ者
 ト雖モ、尚能ク誦シテ之ヲ知レリ、今ヤ群賢位ニ在リ銳
 意治ヲ図ル、豈之ヲ度外ニ措カンヤ、特ニ海外ノ形勢復
 昔日ノ如キニ非ルヲ以テ内ヲ洞觀シ時宜ヲ斟酌シ、以テ
 富強ノ術ヲ謀リ、以テ對峙ノ勢ヲ張ラント欲シテ其流禍
 ノ慘ナル、遂ニ今日ニ至ルヲ覺ヘザルノミ、所謂差若毫
 釐、則謬以千里トハ此ノ類是ナリ、然リト雖モ今日ニ在
 テハ其弊害既ニ顯然識者ヲ俟タズシテ皆能ク之ヲ知レリ、
 政府豈独之ヲ恤ヘザランヤ、臣意フニ之ヲ防遏スルノ方
 法如何ト顧ルノミ、臣以為ク、苟クモ其本ヲ塞ガズシテ
 徒ラニ其末ニ就テ之ヲ防遏セント欲セバ、紛々擾々亦竟

二事ニ益ナキノミ、今夫レ敗壞漏卮之レガ釁ヲ塞ガザレ
 バ、河海ヲ以テ沃クト雖モ其盈ルヲ見ザルヤ必セリ、財
 ノ泄失スルモ亦何ヲ以テ之ニ異ナラン、之ガ釁ヲ塞ガザ
 レバ宝貨山積スト雖モ、亦終ニ尽クルニ到ルヲ見ノミ、
 然リト雖モ開港互市固ヨリ廢スルヲ得ベキニ非ズ、且ツ
 礼度既ニ壞レ貴賤ノ分明カナラス、天下滔々奢ヲ以テ榮
 トナシ、儉ヲ以テ恥トナシ、權利ト云ヒ自主ト云ヒ自由
 ト云ヒ、苟クモ財以テ具フベケレハ求メテ得ザルナシ、
 然ラバ則民ノ外品ヲ慕フモ亦一令ノ能ク禁ズルヲ得
 ベキニ非レバ、之レガ釁ヲ塞ガント欲スル、之ヲ如何シ
 テ則可ナルヤ、臣以為ク、苟クモ四海ノ沈溺ヲ救ハント
 欲スル者小利ヲ顧ミズ、小害ヲ恤ヘズ決然非常ノ斷ヲ用
 ヒ一世ノ觀ヲ移スニ非レバ、則不可ナリ、況ンヤ四海ノ
 広キ億兆ノ衆キ人ゴトニ喩シ、戸ゴトニ説クベカラズ、
 人君天下ヲ陶鎔スルノ道他ナシ、躬親ヲ行フテ之ヲ示ス
 ニ在ルノミ、語ニ云ク、以言教不如以身率ト、今ヤ幡然
 懲創ノ意ヲ表シ、供御ノ物石室ヤ、衣服ヤ、百般ノ什器

ヤ、給ヲ外国ニ仰ク所ノモノ一切之ヲ廢シ、而シテ官府用ユル所モ亦已ムヲ得ザルノ具ニ非レバ、一切洋品ヲ用ユルヲ禁ジ、大ニ勤儉ノ風ヲ興シ以テ百司ヲ率勵セバ、則天下ノ耳目一朝忽移ラン、耳目移レバ、則習尚モ亦隨テ変ゼン、果シテ斯ノ如クナレバ則豐全ク塞ガズト雖モ、財ノ泄失スル、既二十ノ七八ヲ減ズルニ至ルベシ、然ル後古今ヲ斟酌シ制度ヲ改正シ以テ貴賤ノ分ヲ明カニシ、奢靡ノ風ヲ抑ヘ、而シテ又互市ノ法ヲ改メ出入ノ度ヲ制シ、歳生スベク力作スベキノ物ヲ以テ必需ノ具ニ換ヘバ、至宝長ク泄失ノ患ナクシテ通関互市、或ハ久ヲ保ツニ足ルベシ、周ノ詩ニ云ク、迨天之未陰雨徹彼桑土綢繆牖戶ト、吁今陰雨既ニ至ルト謂フベシ、豈狂奔疾呼早く綢繆ノ術ヲ施サ、ルベケンヤ、若シ制度既ニ定ル一朝能ク變ズベキニ非ズト曰テ、遂ニ姑息ノ計ニ出デ、僅ニ目前ヲ弥縫スルニ過ギザレバ、臣恐ラクハ無欠ノ金匱、竟ニ完存シ難カラシコトヲ、臣新政ヲ歴詆シ、苟クモ異論ヲナスニ非ズ、国事ヲ思念スルゴトニ悲憤臆ニ填ツ一己ノ禍

ヲ憂疑スルニ暇アラズ、直ニ所見ヲ陳スルノミ、狂忘ノ誅固ヨリ顧ミザル所ナリ、当路ノ君子幸ニ擯棄セズ、姑ク其狂愚ヲ恕シ再思ヲ煩ハシ、之ヲ廟謨ノ端ニ加ヘ、若シ或ハ採ルベシトセバ、願クハ清閑一朝ノ宴ヲ悒マズ、面陳スルヲ容レ以テ余蘊ヲ傾尽スルヲ得セシメヨ、誠惶誠懼昧死謹言、

明治八年八月十二日

京都府管下山城国愛宕郡浄土寺村

農 中村清蔵印

元老院

御中

冊子原寸 縦二五糎 横一七糎 八枚

云々 宮内大少丞より島津左府公へ

御陪食ノ件

(封筒) 島津左大臣殿 宮内大少丞

二六六〇ノ一

〔鹿兒島県ノ割印アリ〕

明十四日午十二時御陪食之節、御參有無御受書御差越相

成度此段申進候也、

八年八月十三日

宮内大少丞

島津左大臣殿

文書原寸 縦二七・八種 横四〇種

二六六〇ノ二

明十四日午十二時

御陪食被

仰付候段承知仕奉畏候、御受申上候也、

八月十三日

久光

宮内卿殿

文書原寸 縦一七・七種 封筒原寸 縦二三種

横 四二種

横八・五種

三六二 岩手県土族奈良真令ヨリ久光公へノ建白

征韓ノ議。時弊改善策

〔表紙〕

岩手県土族

奈良真令

極密建言書

微臣奈良真令敬テ白ス、臣僻遠ノ地ニ居リ世間ノ形勢ヲ見ルコトナク、只新聞紙上ヲ以テ東京ノ景況ヲ見聞スルノミ、而テ以為ラク、輦下ハ必ラス県政ノ如キ地方ノ適宜ト号シ、私見ヲ以テ行フ者ニ非ラサルヘシト、仍テ心ニ不絶出京ヲ願ヘリ、今日其志願ヲ達セリ、廿年ノ昔ニ比スレハ、東京ノ景趣実ニ以テ別世界ヲ成、宛モ蓬萊山ニ登リタル心地セリ、学士君子ト往来シ、又大小在官ノ門ニ奔走シ、明言確論ヲ聞キ驚感自失ス、只憾ミラクハ、其言フ所論スル所一モ利欲ニ出サルハナシ、今日ノ活計タル官途モ亦一商法ノミ、幾等ハ何百円何等ハ幾十円ト、ミナ月給ヲ目的トシテ奉職ノ力ヲ是レ量ル、国ノ為メ君ノ為メニスルノ言ニ及フモノヲ聞カス、偶慷慨

有志ノ者アレハ、因循ト云固陋ト云、マタ愚妄ト為シテ
一モカヘリ見ル者ナシ、中ニ真ノ憂國ノ輩アリテ相對交
談スルモ、ツマリ唯此 御政体ハ如何長カラシカ久シカ
ランカト言ヲ、結局ニシテ一大歎息シテ別ル、ノミ、臣
家ヲ離レ十余日ヲ經テ東京ニ着セリ、其長途ノ旅人知ト
不知トノ論ナリ、相逢ハ必ラス民事ノ煩雜諸税ノ猥繁ヲ
惣フ、臣ノ県ハ僻遠ニ在カ為ニ適宜ノ法ヲ行フ、故ヲ以
テ 朝政漸被シ難キカト存シタル所、路上ノ語話、亦臣
ノ県ニ同シ地方ノ適宜トハ申ナカラ、鹿兒島県ノ如キハ
ソノ政令諸県ト異ナリト聞ク、何ノ故ナルヲ知ラス、在
官人中ニハ私邪利欲ヲ事トシ、マタ諂諛スルヲ悦ブ者モ
アリト聞ク、推スルニ全国往々如此ノ形勢ナランカ、実
ニ浩歎スヘシ、民情ヲ審カニシ世態ヲ当路ノ能ク察スト
云ヒ、唱ルナリト云トモ一モ其実ナク、帰スル所ハ規則
法律ニ在ルナリ、人心何レノ日カ安スルノ秋アラシヤ、
然ルニ暫ラク太平ノ姿ヲ為スモノハ、天下向ニ徳川ノ弊
政ヲ厭ヒ、 王政復古ト云フノ聖語ヲ聞テ、人民感戴ノ

余リ、枕ヲ高フシテ復古 御政体ノ美事ヲ企望シタレハ
ナリ、不日一變シテ事々西洋ヲ模擬ス、天下殆ト失望セ
リ、其上新税ノ命繁クシテ、民実ニ手足ヲ措クノ地ナキ
ニ至ル西洋法御採用モ至極ヨロシ、然レトモ採用ノ法方モアルヘシ、
如此ニ善モ惡モ利不利ヲ不考、御採用ハ夫レ如何ナルソヤ
此姿ヲ追フテ愈々以テ昌平ニ進マシメント欲スルハ、諺
曰、手ヲ以テ大河ヲ支ルカ如シ、万々一四方ノ人民動搖
スルニ至ル時ハ、幾万ノ兵隊アルトモ、戈ヲ倒ニスルノ
患ナキニシモアラサラン、加之、今世ノ冗費タル者ハ士
族ノ禄ナリ、今之レヲ廢スルトキハ、騷亂ヲ誘醸スルニ
至ルヘシト云トモ、天下ノ長物、実ニ之レニ勝レルナシ、
一日モ早く廢止サレ度キハ御本意ナランカ、今日ノ勢ヲ
以テ見ルトキハ、此儘々ニテ過行カハ幾百年ヲ經過スル
トモ廢止スヘキノ秋ナカラン、且賢人野ニ隠レ君子山ニ
入り、天下何レノ所カ不平ノ心ヲ抱カサル者ナキヤ、故
ニ其機ニ先キ立テ其心ヲシテ憤發セシメ、 皇國ノ元氣
ヲ挽回シ、外国ヲシテ畏懼恐縮セシメ、 皇國万歳ノ長
安域ニ上リ、一挙万網締ルト云ハ天下ノ士族ヲ以テ征韓

スルノ事件ナリ、此論世ニ亦唱ル者アリト聞ケリ、此項新聞紙上ニ於テ朝鮮ノ景況ヲ見ル、兩条ニ及ヘリ、於是愚察スルニ 朝廷陽ニハ嫌フニ似テ、陰ニハ懇ニ彼地ヲ探謀セルナラント、然則臣ノ妄議モ敢テ御嫌疑ニ触ル、ト云ニモ非ラサラントス、

征韓ハ古ハ降服和親貢ヲ容ル、ノミナレトモ、今日ノ事屠拳ノ上ニハ一家ノ華族トス、 釐下ニ永住セシムルヲ好トス、琉球モ亦随テ永住セシムノ事ニ至ルヘシ、然則清国ニテハ我ヲ輕視スルコト不能ノミナラス、和親ヲ我ニ厚クスヘキニ至ラン、若ク日清唇齒ノ和アラハ、横文各國ハ随テ我ヲ呑ムノ念初テ止ムヘシ、凱婦ノ機会ヲ以テ能ク御詮議ノ上、天下ノ繁稅ヲ免シ、猥雜ノ冗煩ヲ除キ、官人ヲ撰挙シテ任レル者ヲ措クトキハ、横目ノ民何レノ地トシテ帰化セサルヘケン、或人云、賢ヲ挙ルハ第一ナレトモ、能モ亦撰ハスンハアルヘカラスト、賢能ニツナカラ撰ミ挙ルハ元ヨリナリ、然レトモ能アリト雖トモ、私欲深キ者ヤ姦黠ノ深キ者ハ 朝廷諸省ニハ撰任シ

難シ、事ノ破レハ是レヨリ起、此辺ハ實際上ニ於テ举措アルヘキコトナリ、

凱旋ノ所ニテ、軍功トシテ天下ノ士族ヲハ永世トス、平均祿ニ致シ定備兵隊ニ編入シ、賜祿一家一人口タケ軍資米ヲ取立、外ノ入費ハ是迄ノ通ニテ然ルヘキカ、士族ニ三男ノ撰挙セラレ、奇功アルトモ永世祿ニ不可致、其親元ニテ主祭タルヘク分地分家ハ其主ノ勝手タルヘクコトナリ、賞典ハ何程モ厚キヲ好トス、藩々従前組ノ者、陪臣又者ト号スル者士族ニ屬シテ 朝廷ニ奉還セリ、是レ今日 朝廷ノ冗煩ナリ、凱婦ノ後ハ彼レヲハ終身祿カ年限祿ニ御所置アルヘシ、征韓ノ役ニ編入スルコトハ決シテ成サルヘカラス、永世ノ士族堂々タル時ハ陪臣トモ沸騰スルトモ聊カモ恐ル、ニ足ラス、出征ヲ願フ者アルトモ不可許、賢能アラハ官ニハ用ユヘシ、奉還ノ士族タリトモ征韓ノ役ニ不可許容、征韓ノ役ニハ三府六十県ノ知事令ヲシテ其士族ヲ率ヒ、隊長トシテ海陸省ヨリ総督參謀及武官指揮ノ為メ差添ラレヘシ、嚴密ニ指揮シヘキ

コトナリ、今日ノ近衛兵及諸鎮台兵少シモ不可揺、是迄ノ通り内地ヲ警備シヘシ、華族ハ如何様ノ出願アルトモ征韓ニハ加ラレヘカラス、官員ハ別段其他ハ決シテ不可加、近衛ノ兵隊ニ編入

主上御親征ノ勢ヲ張ルハ必要ナリ、

或人曰、今事ヲ好ミ、故ナキニ征韓ノコトヲ企起スルトキハ、第一ハ人命ヲ毀傷、巨万ノ米金ヲ費ス、朝廷幾層ノ煩惱ヲ添ヒ、天下人民随テ動揺シ農事廢棄スルニ至ル、皇國ノ損害枚拳スルニ違アラス、其困窮ノ際ニ當リ、好シ征韓ハ見込ミノ如ク屠拳凱旋スルトモ、追統シテ内乱一揆等起ルハ必然ナリ、王政存外ニ早く鎮定、天下大平ノ象ヲナセリ、然ルヲ天下ヨ一年ノ外征之為ニ數十年ノ内乱ヲ醸シ、復割拠ノ勢ニ至ラハ如何センヤ、臣答曰、主上ト云ナク、共和ヲ以テ外征シ參議・大臣・輔相ナク、烏合ノ者ナラハ子ノ見ノ如キニモ至ルアランカ、赫々タル

明天子・左右大臣・輔相・參議ノ雄豪アラハ何ソ如此ノ

恐レアラシヤ、始計廟算五角ナラハ、權勢以テ外ヲ助クルコトナレハ不足怪、其故如何トナレハ、天下人民今日何人カ不平ノ心氣ヲ抱カサル者ナシ、其氣ヲ洩ラサシメ、随テ天下人民ノ氣ヲ振起スルニ至ルヘシ、天下今日マテノ万般ノ不平ノ氣ヲ外征ニ洩ラス、傾ケ依セテ、而後天下ノ政体其間ニ改革スルトキハ何ソ内乱ヲ誘醸スルノ理アラシヤ、此儘タニテ過キ行キナハ臣ノ知ル所ニアラス、戊辰ノ王政復古ヲ以テ天下ノ氣ヲ振起シ、徳川ノ弊政ヲ屠棄シ、義心ヲ挽回スルト同一轍ナリ、皇國ノ所謂大和魂ヲ挽回スルノ一大策トスル所以ナリ、天下ノ士族今日明化ノ世ニ至ルト雖トモ、依然トシテ三民ノ上ニ立チ、尙顔スル容体ヲナスナカラ、征韓屠拳スルニ至リ兼ルト云ハ、士タルノ主意ナシ、速カニ廢棄スヘシ、且戊辰以來、西洋各国エ幾百人ノ遊學諸生二年々巨万金幣ヲ費タルハ何ノ為ソヤ、海陸ノ警備、外征ノ用途ニ備ヒ、外方ヲシテ畏服セシメ、内地ヲ開富ナラシムルノ所以ナランカ、其事其實拳ラスンハ、主上天下ノ人民ニ対シ

何ノ詔カアラン、若此事挙ラサル程ノコトナラハ内乱起ルト雖トモ鎮定セシ得ルモノニ非ラス、先キンスルトキハ人ヲ制スル、今人々長カラスト騒乱ヲ待ノ心アル、其機ニ先キ立、鬱閉ノ心ヲ征韓ニ洩ラサシメ、振起スルノ氣ヲ御仁政ノ改革ヲ以テ鎮制スルニ非ラス、下ノ起ルヲ待チニ至ラハ下ヨリ制セラル、ニ至リテ、朝廷ノ御制令行ル、モノニ非ラス、或曰、今日第一ニ愁患スル所ハ會計ナリ、今日日用ニモ窮スル程ノコトナリ、既ニ征台ノコトニテ六七百万円ノ散費ニ至ル、征韓又幾層ノ散財ナルヘシ、兵事ハ輕々シク不可議、臣答曰、今天下ノ士族、外征ノ為ニ三年外ニ在ルト雖トモ、米金ノ欠乏ハ恐ル、ニ足ラス、故ニ臣三府六十県ノ知事令、其士族ヲ引卒シテ出征セシム所以ナリ、朝廷大決断ヲ以テ各府県ニ達シ、其手々々ノ兵士凱歸スルマテノ際、米金ヲ取続ケサセルヤウ、其所ノ富有ノ者ニ權威ト恩恵トヲ以テ諭解ヲ致シ、用金ヲ申付ラレ、何ソ違背スルコトアラシヤ、御維新後ハ用金ヲ御申付ナキ御規定ノ由ナレトモ、征韓

ノ事故ハ方外ノ義ニテ全国合一ノカラヲ以テ、神功皇
后及豊臣ノ遺烈ヲ継キ、効勞其上ニ出ルヘキ今日ナレハ、
三府六十県ノ三民、其旨ヲ体認セシムルヲ要トス、若シ
征韓ノコトモナク、此儘ニ維持シ、人心ヲ改革シ、天下
安寧ニ進マシメント欲ス、甚タ難シ、然レトモ医ノ術ナ
キニ非ラス、人事ヲ尽シテ天命ヲ待チ、止ムコトヲ得サ
ルトキハ、其策別ニ論アリ、

海陸ノ二省ニ於テ擊、劍柔術ヲハ兵士ノ余暇ニ研究致サ
セハシ、警視庁ニ於テモ專ラ此ノ柔劍ノ間ヨリ任撰ナサ
レタシ、今日脱刀ノ開化ニ趣キタルハ至極ノ美事ニテ、
古ハ事アルニ帯ヒ事定リテ脱ス、大平ノ象ヲ示スナリ、
然レトモ常ニ之レヲ学ハサレハ胆氣壯ナルナシ、胆ヲ養
フノ一助ナレハ其暇日ヲ以テ研究致タサセタシ、
凱歸ノ後ハ節儉ヲ嚴ニスルニ非レハ改政スルノ主意ナシ、
勤儉ヲ以テ天下ノ人心ヲ采ルノコトニテ、一張一弛寬猛
相救フノ術ナリ、第一主上ヲ御始トシテ外国物ヲ一切
用ユルナク、皇國中ニ産スル物ヲ用ユルヲ限リトスヘ

シ、藥品・武器・諸器械等 皇國緊要ノ品ニ外國ヨリ入
レサルハ叶ハサル品物アリ、詮議ノ上決スヘシ、舶來物
ニ無用ノ品多シ、評決ノ上、入税百倍ノ増ヲ以テ取ルヘ
シ、勤儉之道何事ニヨラス理屈ヲ附ケヘカラス、自分ノ
不自由ヲ旨トシテ備フルヲ不可願、人ハ貌ノ改ルヲ以テ
心ノ新ナルノ手始トナルモノナレハ、衣服ノ制專ラニ改
メラレヘシ、何事モ 主上ノ御英斷ト云ニ任スルトキハ、
後チニハ如何様ノ事物モ皆 御英斷ト云ニ至ル、其極ニ
ハ都テ我儘ト云ニ落ルナラン、古今ノ治乱興廢此間ニ起
ル、然ルトキハ今日ニシテ文明開化ノ世ト稱スルトモ天
下治安ノ秋トナス難シ、故上下交々道理信義ヲ以テ中行
ヲ得ルヲ以テ大平トモ昌平トモ云フヘキカ、衣服ハ文官
武官ノ間別チアルヘシ、武官ハ指令言下ニ出兵スルト云
ハ主務ナリ、洋戎服ハ
皇國ノ鉄衣ニ換テ便利トス、礼服トモニ是迄ノ所ヲ好ト
スヘシ、是又其省ノ詮議ノ上ニ決スヘシ、文官ハ平生
服・礼服トモ 皇國從來ノ礼式ニ依テ用ユヘシ、武官ト

雖トモ成ルヘキタケハ 皇國ノ産スル物ヲ以テ用ヲ弁ス
ヘシ、

御維新以來今日ニ至ルト雖トモ冠婚葬祭ノ礼上下尊卑ノ
差等ノ御布告ノアルヲ聞カス、何等ノ思食ナルヤ、 鞞
穀ノ下ハイサシラス、遠僻ノ地ニ於テハ金錢富有ノ者ハ
奢リヲ極メ美ヲ尽シ、自主自由ノ權ト号シ、我儘勝手ノ
奢ナルモノナリ、如此我マ、ニ過行ナハ後ニハ 主上大
臣ノマネヲスルニ至ルモ計リ難シ、凱婦ノ後ハ速カニ冠
婚葬祭ノ礼、上下尊卑ノ差等ノ御布告アルヘシ、四民ノ
際ニ衣服ノ制及ヒ礼服モ亦隨テ定マルヘシ、西洋形ヲ以
テ礼服ハ御布告アレトモ

皇國元ヨリ西洋ト異ナル所以ヲ以テ、昔代ノ礼服ヲ増減
シテ、 皇國一定ノ風貌ヲ定メラレタシ、帽ハ 皇國古
ノ冠ナリ、今日上下一同ニ用ユル西洋ノ風トナル、是モ
古制ヲ増補シテ、 皇國ノ一風儀ヲ立タキモノナリ、
節儉ノ事ハ、西洋ハイサシラス、支那 皇國共ニ古ヨリ
帝王之レ勤メテ起リ、之レヲ破リテ亡ヒタリ、然ラハ

皇国ニ於テハ明開ノ世ト雖トモ、勤ムヘキハ務メスンハ有ルヘカラス、吝モ亦奢リト同格ナレハ勤儉ノ人注意スヘキコトナリ、正院ハ 皇国中ノ大泉源ナレハ、源濁ルトキハ下モ随テ濁リ、清メルトキハ下亦清メリ、其総括根源ナレハ是レヲ知テ彼レヲ知ラスト云ヘカラス、諸省府県藩ハ其一方ノ主務アルノミニテ、大決議ヲ取ルハ正院ニ限り関スル所ナレハ確乎タル、他ニ讓ルコト有ルヘカラス、手数煩多ヲ除キ簡易ニ行ハル、ヲ主トシテ、事ヲ省クハ第一ノ工夫注意スル所也、事省ケサレハ簡易ニ至ルヘカラス、事ヲ省クハ人ニアリ、故二人ハ不可不撰、先ツ正院総括ノ地ニテハ議官ト別チヘカラス、別チニ依テ事必ラス行ハレサルハ顯然タリ、元老院ノ議官ハ皆參議ニシテ 主上臨坐セラレ、国事ヲ評議スルノ院トナス、此院ノ官員ハ廢止スヘキナリ、外務アルヲ以テ内務之号ヲ設ケラレタルカ、今日ノ事、万般諸省府県藩ノ義ハ内務ニ非ラサルハナカルヘシ、内務省ヲ廢シ、正院及ヒ諸省ニ附寮ト為テ事ヲ行ハセスムヘシ、文部・教部ト元何

ノ為メニ別チタルヤ、文ハ教ノ種、教ハ文ノ本ナリ、二ツナカラ行ハル、ヲ以テ文旨ノ者ナク、道理ヲ不弁者モナキニ至ル、即チ文明開化ノ世ト称シヘキナリ、文教両輪ヲ備テ行ハル、ニ依テ、 皇国中文学教行並ヒ行ハル、則チ文教合併シテ一方ヲ廢止スヘシ、司法省中ニ大審院ヲ設ケラル、ハ如何ソヤ、卿輔ノ職務ヲ以テ御手届カセラレヌ為メニ設ケラレタルヤ、新聞紙上ヲ以テ愚考スルトキハ司法ノ一附寮ニ似タリ、然則大審院ハ廢止セラレ一寮トナシテ用ヲ弁スヘシ、警視庁ハ東京府中今日大緊要ノ主務ナリ、人民ノ際ニ於テハ、左右大臣・參議・輔相ノ任ヨリモ忝ナク見エタリ、然レトモ人民ヲ取扱フ所之趣キハ、即チ司法ノ支庁裁判所ト同等ノ主務ニ似タリ、然則警視庁ヲ廢止シ司法ノ附寮ト為ス、其省ニ於テ尚實際上支庁裁判所ヲ設ケルノ義詮議ヲ以テ決スヘシ、司法省ヨリ三府六十県工裁判所ヲ設ケラレ、警視兼務サスヘシ、其地方官人ト抵抗シテ事ヲ行フトキハ互ニ職務ニ怠リナク、人民安堵ノ域ニ上ルヘシ、代言人等ハ

嚴禁アルヘシ、然ラサレハ御政体ヲ一洗スル不能ノミナ
ラス、風儀ヲ挽回スル難シ、禁法刑律ヲ以テ嚴禁アルヘ
シ、贖刑ハ古意ト違フニ似タリ、廢止シテ可ナリ、元
老・大審・内務・教部・警視ノ廢止セラレタル迄モ、官
員余程省ケヘシ、官ノ事ハ兼タリト雖トモ、其事ヲ省カ
スハ一ツ穴ノ杭ヲ動シト同様ナレハ、勤儉ノ法行ハル、
二非ス、其名義ヲ廢セント欲スルトキハ、先ツ其事ヲ省
クニ厚ク注意シテ、事省ケテ自ラ名ヲ廢スルニ至ルヘシ、
事ヲ省クヲ第一トス、事ヲ省キ兼務ニ坐ルトキハ、月給
ハ今日ノ定額ヨリハ倍増スヘシ、是賢能ノ者ヲ撰任シ人
ヲ減スル節儉ノ緊要ナリ、
和漢洋トモニ、立国施政ノ体ハ元ヨリ異ナリト雖トモ、
其婦スル所ハ国民ヲシテ安堵セシムルニ在ルノミ、然レ
ハ法則規律ヲ嚴肅ニスル、其元ハ簡易ニ至ランヲ欲ス、
簡易ハ則無為ニシテ、手数繁多ヲ省キ、民ノ善ニ遷ラシ
メン為メナルヘキニ今日ノ法律ヲ設クルヤ、其設クルノ
密ナル程イヨク煩雜ニ度リ、犯罪人モ亦隨テ多キハ其

レ何ノ故ツヤ、其由必ラスアルアラシカ、
事ヲ省クニハ先地方ヨリ始ムヘシ、而テ合併寮兼官ニシ
ヘキコト、及ヒ万般ノ細目ノ商略ハ当路ノ拘係スル所ナ
リ、
三府六十県ノ大小官人ハ三年ヲ限リトスヘシ、其人物ノ
善惡人ノ向背曲直ヲ見テ他県府ニ転任セシムヘシ、米國
棟領四年ニ限ルト同意ナラン、實際上ニ於テ試ミ登用ス
ルノ一策ナリ、司法出張ハ瓜期ノ交代ニスルヲ好トス、
其人ノ正邪曲直ヲ試ミテ亦又用ユヘシ、官途ノ人撰任拔
擢スルニハ三年々々ヲ經テ試ミ来リ、功用挙リテ後ニ正
院八省ニ入ルヘシ、府県ハ転任セシムルノ用方モアルヘ
シ、復古ノ始メ之御誓文ノ内ニ、人心ヲシテ倦サラセス
ムト云、是レ今日当路ノ人之体認スヘキコトノ聖言ナリ、
外国ノ教法 皇國中ニ於テ害ナシトセス、然レトモ今日
ノ勢止ムヘキニ非ラサレハ、是等ノ事ハ念トスヘカ
ラス、
朝廷政体確立スルニ至リテハ仏蘇ノ雜教自ラ消滅スヘシ、

是レラハ自然ヲ待テ政体ヲ養フヲ第一トス、邪教ハ患トスルニ足ラス、

去年討台ノ時ニ諸省及諸府県共ニ暫ノ間、營繕等見合シヘキノ御布告アルカニ覚ユ、是至当ノ義ナレハ、凱帰ノ後ハ如何カノ御所置アルヘキト存タルニ、跡ハ何ノコトモナク依然タリ、我県ナトハ諸普請等少モ替リナカリキ、勤儉ノ時ニ当リテハ諸省府県トモ年限ヲ定メ、風雨寒暑ヲ凌クタケノミニテ、正院・宮内及諸官宅タリトモ一切造営向敵ニ御見合アリタス、下民ノ硝子戸ヤ練化家作等ハ令セスシテ自ラ止ムニ至ルヘシ、只大小官人以上ノ勤儉ニテ事足ルヘシ、開拓長官黒田君カ開拓地ニ於テ西洋形ノ帽ヲ天鷲ヲ以テ製サシメ、一同二用サセ外國物ヲ一切ニ禁セラレシニ、毛織物ト違ヒ雨中ニハ迷惑ノ由ヲ申出タルニ、其凌キ等ヲ教戒セラレタル由ヲ聞ケリ、又大蔵大輔松方君ハ參議以上敵ニ申合セ、外國物ヲ用ヒサル様致シヨリ外ナシト歎セラレシト云ヲ聞ケリ、風説ナレハ其虚実ハ不知、実ノコトナラハ此両君ノ憂國ノ衷情、

実ニ言外ニ顯ル覺ユルナリ、此他雲上ニハ聡明睿智ノ諸君子方幾ハクモアルヘシ、臣只耳ニスル所ヲ書シテ以テ同心情ナルヲ表スルノミ、

戦争ノ後ハ凶歳ナルモノトカ古語ニ聞及ヘリ、非命ノ死アリ、大国一朝ニ廢亡スルアリ、壮者ハ離散、老幼ハ途ニ仆ルト云コト、故ニ豊歳ナルトモ凶歳ノ如クナル景況ナルヲ以テ云ナランカ、然ラハ 主上ヲ御始トシテ、当路ノ者茲ニ注意ヲ加ヒテ、凱帰ノ後ハ宮室ヲ卑シテ衣服ヲ惡シ、飲食ヲ菲スル古人ノ如クニ國事ニ専ラニセスメタクモノナリ、故ニ三年ヲ限リトシテ、諸營繕向一切ニ御見合遊ハセラレタキコトナリ、水府公ノ言カニ、農ヲ本トスル國ト商ヲ以テ建タル國ト、風ヲ異ニスルノ論アレハ今更云フニ及ハス、其意ヲ以テコ、ニ陳スルノミ、外國ヨリハ何分金銀ノ内地ニ入ル、ノ策アリタキモノナリ、航海スル者・出店スル者、内地ニテ物ヲ製造シ、器械ヲ作為シテ外ヨリ入レス、緑茶ヲ始トシテ輸出スル等ノコトヲ三千三百三萬ノ人民一和、各其才ヲ尽サハ三年

ヲ経テ一段ノ奇効アラシカ、或人曰、外国ニ金銀ノ拔越シトモ、別ニ又金銀ノ品ハ舶来アレハ、乃チ金銀ハ輸入シアルト同様ナリ、何ソ患トスルニ足ラン、臣答曰、其金銀ノ品ハ何タル物カ、

皇国ノ益ヲナステ入り来リアルヤ、数ヒテ聞タシ、是レ物ニ理屈ヲ付ケルノ一ケ条ナリ、故ニ彼佞者ヲ惡ム、微臣区々タル因循愚妄ノ論說ヲ以テ尊貴ヲ汚シト云ハ、実ニ以テ其分ヲ知ラス、多罪恐懼ヲ顧ミサルノ重罪、言葉ナシト雖トモ亀蟹ハ甲ニ依テ穴ヲ堀リ、鵬雀ハ其分ニ応シテ籟声ヲ發ス、聊カ微々タル赤心ヲ吐露シト云ハ、年々 皇国ヨリ諸外国ニ拔越スルノ金銀貨幣少カラスト聞ク、譬ハ一ケ年纔カ五万円ト凡ニ積リテモ其五万円ハ再ヒ帰 朝スルノ金ニ非ラス、国内ノ融通ナレハ彼レニ在リ、又是レニ移リ富有ト云者ヒハ、暫ク宿ヲ借ル、カ如キモノナリ、外国ニ出ルノ金ハ決シテ帰ルノ理ナキニ似タリ、然ラハ五万円ツ、トシテモ年々ニ 皇国ノ元氣ハ損耗シテ、自然ト内虚ノ症ノ如クニ至ル、不知々々ニ

疲弊シテアルナリ、倉卒ニ驚悸暴喘ヲ發スルノ時ニ臨ミタル医師ノ罪トナルコトアルモ難計、古人ノ語ニ、金銀ハ骨ノ骨ナリト、其骨髓ナル者年々損耗スルニ至ラハ何ソ天然ノ寿域ニ安スルコトヲ得ンヤ、其骨髓ヲ養育スルニ、一人ノ工夫ノ及フ所ニアラス、医ヲ始トシテ看病者一家打揃フテ親睦シテ保護スルニ非ラサレハ、平安ノ地、治安ノ域ニ上ルコトヲ得ス、全国ノ力ヲ尽シテ外国ニ心ヲ用ヒ、金銀ヲ拔越セス、彼レヨリ取ルノ法方ヲ立ルヲ致シタキコトナリ、故ニ征韓ヲ以テ人心ヲ改革シ、簡易勤儉ヲ以テ兵力ヲ養ヒ、国内富強ナランコトヲ欲スル所以ナリ、今日此ノ開化ノ時世ニ当リ、勤儉ノコトヲ云ハ賢者ハ笑テ過キ、智者ハ嘲弄シ、愚者ハ怒リ、行者ハ誹リ、来ル者ハ議センカ、然レトモ内煩多ニシテ心焉ニ在ラサレハ、何ヲ以テカ遠キニ心ノ及フコトアラシヤ、故ニ内事ハ何分ニモ事少ナニシテ、一家和親シテ、外事ニ 皇国中之人民上下共ニ心ヲ尽シ、其才智ヲ尽シ謀ラハ、イカテカ其赤心ノ誠ノ徹セサルノ理アラシヤ、此儘

二何事モ外国ノ外貌ヲマネスルトキハ、後チニハ口吻ノ
吮ルモ好クマネルニ至ルヘシ、結局ハ却テ紙幣屑富士山
ノ如ク積リ残リ、醜人ノ心曠シテ里人見サルカ如クニ至
ラントモ計リ難シ、故ニ千眼一致ノ因循至極ノ区々タル
陋誠ヲ陳述シテ、以テ昧死シテ敬テ白ス、誠恐々々、謹
テ白ス、

明治八乙亥年八月十五日

芝山内天神谷奥住誠兵衛寄留
陸中国岩手県土族

奈良真令



島津従二位公

殿下

冊子原寸 縦二五種 横一七種 一四枚

三三 山階宮晃親王より島津左府公へ

残暑御見舞

(封筒) 左大臣様
侍史中 晃

(封筒ウラ)(欠損)
□
(封紙ウラ書) 左大臣様
侍史中 晃

残炎難凌御座候処、益御勇健御奉職奉大賀候、老拙無事、
乍恐御放念可被下候、抑此一折、龕末乍赤面時令御見舞
申上候験迄二進上仕度御笑納被下候ハ、深々畏入奉存
候、尚期参拝候也、 敬白、

亥

八月廿九日

二白、入夜秋冷催候、併日午炎氣甚折角御用心く
奉折入候、内外多事之秋、嗚く御苦心卜奉恐察候、
恐々、

文書原寸 縦一六・二種 封筒原寸 縦一八・五種

横四六・五種

横 五・三種

三三 琉球藩摂政廃止受諾ノ件

当藩常ニ摂政ノ官アルハ最モ謂ハレ無キ儀ニ付、此等ノ如キ改正ノ要件トスト之御説明承知いたし候、藩事多端ニ付立通置申候処、御示諭之趣御尤之儀ニ而、此節引取候様可仕候、此旨申上候也、

明治八年八月廿一日 琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

文書原寸 縦二七種 横一九・五種

三六 鳥取県士族池頼彦ヨリ左府公ヘノ建言

人材ノ登庸国基確立ニ就テ

(包紙ウラ書)
「奉封事」

鳥取県士族
池 頼彦

臣頼彦再拜謹而上書

左府公閣下、夫御維新以来万国ノ御交際益盛隆ニシテ、

専ラ開化進歩ノ御趣意ニ有之ト雖トモ、只一トシテ洋風ニ泥マサルコトナシ、況ンヤ今日ノ御政体廟堂ノ議一ナラサルカ朝令暮改、故ニ人民疑惑ヲ生シ儘不平ヲ醸スルニ至ラン、且海外欧米ノ強国アリ、稍モスレハ其勢我ヲ輕蔑シ、魯國ノ如キハ日々ニ我土地ヲ蚕食ス、如此内憂外患、逐日切迫ス、豈歎セサルヘケンヤ、実ニ 皇国今日ノ形勢、鷄卵ノ石上ニ有ルカ如ク、安危存亡ノ際、容易ナラサルノ秋也、臣聞、閣下ハ天下ノ衆ニ先ンシテ御憂慮被為在ト、因テ四方ノ有志輩、閣下ヲ渴望ス、時ニ頃日 閣下御參 朝被為在ト、是天下ノ幸ナリ、臣熟古賢ノ政体ヲ愚按スルニ、万民王化ニ順服シ、數百年ノ基業ヲ開キ、四夷來王スルハ賢能各其任ニ当ルニ因テ也、抑方今人材御挙用ノ御趣意ト雖トモ、恐ラクハ有名無実、故ニ下ニ貫徹セサルモノナランカ、仰冀クハ新ニ人撰場ヲ開建シ、人民ヲシテ貴賤ヲ不論、有志ノ輩ハ参場ヲ許シテ議事セシメ、其材能ヲ試ミ、其言行ヲ考見、而後其器ノ長スル所ニ由テ其任ニ勝ヘタル者ヲ擢挙シ、進

賢者アレハ必賞之、拳不能者ハ必黜之、如是ナレハ則人材上ニ位シ野ニ遺賢ナク、万民各其所ヲ得ン、冀クハ

閣下大ニ御尽力有テ先ツ広ク求賢ノ御趣向專一二有之度、然ルトキハ未タ人材山野ニ屈居セシ者ナキニシモアラス、以テ其ノ人材ヲ御登用有テ、皇国不朽ノ御基礎ヲ被為建、皇威海外ニ輝ヤカンコトヲ、然ラスンハ内ハ益人心離背シ、外ハ万国ニ蔑視セラレ、終ニ彼カ術中ニ陥ラシ、実ニ慨歎ノ至リニ堪ヘス、聊愚意ヲ上言ス、暴言不敬ヲ省ミス

閣下ノ尊慮ヲ瀆冒ス、右御採用伏而奉懇願、臣誠恐誠惶頓首敬白、

鳥取県 池 頼彦百拜

奉

島津左府公閣下

冊子原寸 縦二四・七極

包紙原寸 縦二七極

横 一七極 三枚

横四〇極

三六五 小河一敏ヨリ左府公ヘノ書翰

聖上ノ政体御相談役推薦ノ件其他

(包紙ウツ書)
左府公御親展奉願候

○ 小河一敏

過日は過分過激之義申上恐入候、猶老婆心難黙止、左之三件奉言上候、
一過日も申上候通

聖上御政体、御相談之御方不被為在ハ一大欠典と奉存候、有栖川親王議官御拜任は皇族をも議官ニ可被為任と之御主意にて、他ニ因故は無之哉ニ内々相伺候、然候ハ、議官と御兼任ニ而

聖上之顧問ニ被為備候様被為在度奉存候、是以政府ニ而御好は被為在間敷候へ共、貶黜にても被行候とは違候故、右御運びだけ之処は 左府公之御力を以、可然

様ニ被為尽度奉存候、

一高崎内史會計上之義ニ付、件々建白至当之事哉ニ承候、
其中ニ華族士族之禄半額、年限を以御借上ニて、工業
之資本として全国之工業を大ニ振起盛大ニすへき一条
有之由ニ承及、於此義ハ甚不同意ニ奉存候、工業之資
本ニて数年を不出、其利を可得見込確定之上は、一時
紙幣増造ニて資本とし、其利を得に随ひ紙幣焼却仕候
ても可然欵、但禄を不被減して不叶候ハ、夫ニ付方法
可有之候、多少を問ハす半額等之事ハ甚不可然候、小
給のものハ手をつけられず、高禄之人ほど強く御借上
に相成可然候、其都合にも可至候ハ、奏任官已上之
月給も高等程強く御借上可然奉存候、其割合等ハ曾て
熟考も御坐候間、御都合によりては鄙衷言上仕度奉存
候、

一前日も一応申上候通り、近日ニ至候ても諸新聞ニ民選
議院公選云々の条件、喧敷記載有之候、今度一旦は区
戸長を以県区会を被興候共、此まゝにては遂ニ入札

と相成、其末ハ諸官員も公選と相成、種々の弊害可有
之候、区戸長の如きも官選民選ニかゝはらず、其区其
村其町之第一等之人材を被用候義肝要ニ御坐候、其辺
ニ付ては堺県在職中経験之義も有之、猶其後追々熟考
仕置候事件も御坐候間御都合次第、是亦鄙衷言上仕度
候、

誠恐誠懼頓首謹言、

乙亥

八月

小河一敏

文書原寸 縦 一六糎 包紙原寸 縦二四・七糎

横七五・八糎 横 三三糎

三六 白川県士族富永瓢ヨリ三大臣へノ建白

時弊匡救策十七条

建言

白川県士族富永瓢

謹呈書三公、夫春草之茁出、天帝為之也、秋虫之発声、
天帝為之也、人感物而詠歌、亦天帝為之也、然而天帝之

為焉也、非指揮之、非鼓舞之、非以口誘、非以耳提、各授其性而令尽其分、嗚呼造物主之意、其至乎、然則春草之不出者、秋虫之不發聲者、人心之不感動者、未嘗有也矣、頑頑愚固陋、最化工之賦与微少、而更無大声詠歌之力、唯倥倥而生日本國、聊稟陽剛之氣、愛國之情一日切乎、一日勤王之念、朝暮溢於身体、故見聞諸事、而有不合意者、一月之間鬱々不寢數夜、一歲之中怏々不樂多日、是則頑頑愚固陋之所為也、或觀樂而欲散、其念而不能、或飲酒而欲忘、其事而不能、何其然乎、唯一愛國之情溢胸之故也矣、謹按玉輦之下、整々多士、豈吾輩何由憂國体乎、不任不職、唯老母在孝養之、則人道足矣、然則果而狂乎、未自覺狂、固陋頑愚之所為可知也、以如此固陋頑愚之慮、叨欲建言者、則又狂可知也、雖然思而不言、鬱胸不遂發見而不告、將至不忠、故陳所思、以不顧罪、願以卑文拙語、莫覩視焉、古人曰、言至情而不諱人之所惡也、実如此語、庸人必憎賢者、則否恭惟

今上觀聖、以堯舜德、愛撫下民、三公大賢、以良亮才輔

佐

天皇、故言路斯通、善說交至、加之滿堂君子謹愿忠直、大政日新而旧弊漸改、開闢以來之良辰、三千万人之幸福也、誰不興起乎、愚亦來輦下、敢言至情而不拘、古人之語者是也、而政機貴密、取捨在公、故踰越而上謹仰高察、誠惶頓首頓首、

明治八年八月

第一条

一官員可通下情事

神武天皇勅曰、大人立制義、必隨時苟有利民何妨聖造ト、又仁德天皇勅曰、君以民為本ト、誠二兩帝ノ勅至レリ尽セリ、民八國ノ本ナルコト、万国ノ論モ亦同ジ、然ルニ今日大政ヲ僭考スルニ西洋ノ風ヲ移シテ皇國固有ノ俗ヲ替ント為玉フ如シ、仍之下民ノ苦情多端ナリ、愚見聞スル所ヲ以テ聊下情ヲ述ントス、夫武家ノ治世嚴ヲ以ス、然トモ慣習ノ久、下民

苛政トセズ、今ヤ自主自由ノ權ヲ授玉ヘリ、実ニ旧政ニ比スレバ莫大ノ皇恩ナリ、然トイヘトモ其害少カラズ、如何トナレバ無学無識ノ小人、善惡ノ別ヲシラズ、吾儘ニテ宜モノト心得、全国人氣甚悪クナレリ、譬ハ人ノ物ヲ掠メテモ盜律ニ入ラザレバ是ヲ智トシ、人ノ害ト成テモ更ニ氣ノ毒トモ思ハズ、是ガ為ニ三民大ニ困窮セリ、是他ナシ、自主自由ノ權利ヲ誤解セル故也、古人曰、女子ト小人難養、近則不遜遠則恨ト、実ニ下情ヲシルモノト謂フベシ、压制スレバ恨ヲナス、自主自由ヲ授クレバ無際ニ增長スルコト下民ノ常也、何ゾ其然ルヤ、譬ハ三民千人アリ、先祖相続ノ貯アリテ世ヲ渡ルモノノ讒百人ニミタズ、余ハ皆終歲勤勞辛シテ父母妻子ヲ養ヘリ、故ニ小災ニ逢テモ飢渴ニセマルモノノ勢カラズ、何ノ時カ書ヲ読、智識ヲ拓ルノ暇アラシヤ、実ニ憫憐スベキモノナリ、其上百代ノ昔ヨリ語り継タル事ヲ固執シテ、今日他事ヲシラザルモノ、俄ニ風ヲ移スコト

ヲ得ンヤ、将又、国風善ナルヤ、洋風善ナルヤ、洋僻輩ハ西洋ヲ無上至尊ト仰トモ他ハ則シカラズ、試ニ言ハ、今農学アリ、其論ハ委キ如クナレトモ、其地ニ古来熟煉シタル農夫、地味相応ノモノヲ作ニハシカズ、彼ノクサキパンヲ喰ンヨリ皇国固有ノ干菓子ヲ食フベク、然シハ強テナサバナシツベシ、紅毛鮫眼ノ如キハ如何ニ羨トモ得ベカラズ、然レバ法ヲ以テ人ヲ扱時ハ束縛スルノ論アリトイヘトモ、是ヲ花ヲ植ルニ譬フ、培養手ヲ尽セバ美英開發清香馥郁タルコト疑ナシ、又己カ儘ニ捨置バ、風雨ニ磨セラレ、螻蟻ニ害セラレ、曲折スルコト又疑ナシ、教化ノ周カラザル間ハ法ヲ以テスルモ、又教ノ一二テ其性ヲ誤ラシメザル、良策ト謂フベシ、然ルヲ官吏未熟ニシテ開化ヲ唱ルモノ、豕ヲ畜フコトヲ誘ヒ、桑ヲ植ルコトヲス、メ、又ハ新渡来ノリンネルノ類ヲ植シメ、是カ為ニ家ヲ破リシモノヲ挙テ數フベカラズ、又富者ヲ誘ヒ、奮発ト唱へ、交易其他種々ノコ

トヲナサシメ、從來ノ家産ヲ失ハシメタルモ亦少カラズ、是皆無學無識ノ下民、官吏ノ誘ヒ、善不善ヲ弁セズ、其令ニ随フモノハ固ヨリ皇國古來上ヲ重スルノ厚風儀ニシテ、実ニ賞スベキ道アル故也、然レバ官吏下情ニ通ゼザルハ其罪果シテ大ナラン、

第二条

一 文部可兼教部事

文部九省ノ一二居リ、一切ノ學問ヲ管理スル、誠ニ文明開化期シテ可待ナリ、教部モ又九省ノ一二居教導ヲ管轄スル、是外國教導ノ設ニ比シタルモノナルベシ、然トイヘトモ論アリ、夫皇國ノ皇國タルヤ、赫々神教皇典ニカ、ヤキ、神勅天壤無窮、皇統一系、万古不易ノ國體、地球万国更ニ比類ナシ、方今三条教憲ヲ以テ、神道八宗ヲシテ説教セシムルハ、人ヲシテ其方向ヲ定メシムルノ設ニシテ、却テ人ヲシテ方向ヲ失ハシムルモノナリ、如何トナレバ、同ジ仏派モ宗ヲ異ニスレバ其説所腹背ナリ、況ヤ神道ヲヤ、

又仏ハ人倫ニ背クモノ也、豈天理人道ヲ講ズベケンヤ、徒ニ数万金ヲ費シテ教部省ヲ置ンヨリ、是ヲ廢シ教導モ又文部是ヲ兼ンコトヲ欲ス、其故ハ神官僧侶ノ説教ヲ廢セザレバ其害少カラズ、道不同、互ニ吾方ニ説付ントスルヨリ聞者一度ハ右ト思ヒ、一度ハ左ト思ヒ、愚ナルモノノ方向朦昧タルベシ、又聊カ才智アルモノハ共ニ信ゼズ、又説処ヲ聞ニ私ナキノミナラズ、人ノ群集センコトヲ勤、人耳ヲ悅バシメントノミハカル、イカンゾ人ヲ善ニ導コトヲ得ンヤ、今則大小ノ學校全国ニ周ク、是ヨリ成長スルモノハ必方向定ルベシ、然レトモ文部ノ教、人魂帰着ナケレバ、愚昧ノ民安心セザルノミナラズ、耶穌其他ニ流レンコトヲ恐ル、依之皇國神伝ノ正典ニ徴シ、天地泉ノ幽界ヲ帰着所ト定メ、一小學ノ管理スル村町限、毎月學校カ又ハ社寺カ、適宜ノ場所へ老若男女一切呼集、三則ノ俗解ヲ一定シ、全国一般説聞セ、加之ニ法律ノ書ヲ以テシ、人民ノ方向ヲ一二シ、敬

神ノ情ヲ專ニセシメン、其説教ノ時、官ヨリ指令、

衆人進退礼讓、謹テ教師ノ講義ヲ聴シムベシ、如此
教一端ニ出ル時ハ、万民他ヲ羨ノ念慮ナク、天壤無
窮、皇上奉戴、朝旨遵守ノ心意堅固ナランコトヲ希
望ス、

第三条

一 神祇官再興ノ事

日月地星ヲ初メ、宇宙ニアルモノ皆造化主神ノ所為
ナルコト、我古伝ノミナラズ、万国ノ議論モ既ニ定
レリ、然リトイヘトモ愚者尚イマダ神ノ在ヲシラザ
ルガ如シ故、ヤ、モスレバ神祭ヲ無用ト論スルモノ
ヲ見ル、実ニ抱腹スル也、此奇々妙々ナル世界ヲ鑑
造シ主宰スル神明、其靈妙ナルコト人智ノ計リ尽ス
所アランヤ、皇國ハ神祖ノ教顕然トシテ、世界無比
ノ樂境ニ皇統連綿安居シ玉フハ、実ニ神國神孫ナル
故ナラズヤ、然ルヲ先年神祇官ヲ廢セラレ神祇省ト
ナシ、又廢シテ教部省トナシ玉ヒシコト歎息スルモ

余リアリ、故情其根元ヲ考ルニ、洋僻ノ徒、唯洋ノ
ミヲシリ、神孫ナド唱ルハ野蠻未開化ノ國ナリト、
憚リナク書ニモカキ口ニモ迷ル、其狂言ニ狂惑セラ
レタモフナラズヤ、神孫ナルモノヲ神孫ナリト云ハ、
則正直ナルコトナリ、天照太神ノ正統ヲ以テ漢ヨリ
来リシモノトカ、朝鮮ヨリ渡リシ者ノ子孫トカ言ハ、
則偽也、イカニ神孫ト云コト、又皇統一系万古一日
ノ如ク、更ニ革命ナキハ可恥コトニモセヨ、相違ナ
キヨイカニセム、且又神祭ハ神祖ノ遺勅ニシテ皇上
ノ御職務也、然ルヲ諸省ノ最下ニ列スル教部省ニ管
轄セシメ玉フノミナラズ、神祇ノ名サヘ成果タルハ
余リニ歎カハシキコトナラズヤ、式部寮ニシテ取扱
セ玉フモ同ジ、其名義ヲ立玉ハヌハ外國ニ類ナキヲ
以テナルベシ、外國ハ其ナキコソ理リナレ、皇國ハ
アルゾ実ナル國体ノ大事件、外國ニ聊斟酌シ玉フコ
トナク、洋僻者ノ説ニ惑ハサレ玉フコトナク、速ニ
神祇官ヲ再興シ、天神地祇八神、且列皇神靈ヲ祭ラ

セ玉ヒ、其官ヲシテ神祇一切ノ事ヲ司ラシメ玉シコトヲ願フ、誠ニ無比ノ皇統ニアラセラレナガラ、専ラ洋夷ノ風ヲ学ヒ玉ヘバ、自ラ賤トシ玉フ如クニテ、皇祖神明如何ニ見玉ハン、外国ノ長枝ヲ取テ、皇猷ヲ潤色スルハ可也、外国ノ風ヲ移シテ我国体ヲ失フハ不可ト云モ浅間敷、心アルモノ誰カ切齒セザランヤ、官国幣社祭典嚴ナリ、何ゾ汝ガ如ク數ズルコトアラシヤト云人アリ、是又洋狐ニ狂ハサレタルモノニテ、更ニ論ズルニ足ラズ、名義立ズシテ如何ゾ可ナラン、人ハ人ト云ヒ、畜ハ畜ト云ヒ、木ハ木ト云ヒ、草ハ草ト云ベシ、

第四条

一武備ノ事

方今武備ノ盛ナル、実ニ可悦也、然トイヘトモ、尚イマダ尽サ、ル所アルガ如シ、其故ハ皇国ハ万国ノ広ニクラブレバ誠ニ狭シ、近年万国公法ノ論ヲ立、叨ニ戦争ヲナサズ、大小並立ノ議ヲ計ル、実ニ宜シ、

然トイヘトモ自然議論ヲ不用、暴発スル国アラハ武

ヲ以テ制セズンバ他ノ術ナシ、故考ルニ、男子十六歳ニ至ラバ四民ノ別ナク、悉ク銃術ヲ学バシメ、平年ハ本職ニ置、事アル時ハ全国悉ク武人トナリ、如何ナル大国モ一時ニ蹂躪セントス、カクイヘバ暴論ニ似タレトモ、更ニ瓢ガ新意ニアラズ、皇祖天照太神ハ女神ニマシナガラ武ヲ以テ制シ玉フ、則永年武ヲ表ト為玉フベキ模範ナリ、然レバ一小学ノ教ル所ニ、兵術先覚ナルモノヲ置、年数ヲ限武ヲ教テ非常ニ備ン、今ハ外夷ノ来ル親戚ノ如シ、一度異論アルニ至テハ国人ナラデハ頼ニ足ズ、アラカジメ調煉セザレバ、事有テ急ニ教ントスルトモ臆病心生シテ學術ナルモノニアラズ、男子一度銃術ヲ学ハ皇国ニ生ル、義務ト安心スル、風俗トナシ玉ハンコトヲ仰ク、

第五条

一改曆ノ事

方今西洋流ノ太陽曆ヲ頒布シ玉フ、細蜜ナルノミナ

ラズ、理モ又アリ、然トイヘトモ西洋ノ曆ヲ其僱用
ヒテハ彼ガ正朔ヲ奉スルニ似ノミナラズ、民間ノ苦
情夥シ、大陽曆ヲ用ントナラバ、皇國固ヨリ大陽曆
アリテ孟春ヲ以テ一月一日ト定リ、是則民間年分ノ
作物ヲ計テ立タルモノニテ、所謂大國主命治世ノ曆
也、然ルヲ神武天皇陰曆ニ改メ玉ヘルハ、万民月ヲ
望見テ一月ヲヨク弁スルノ安キニ随ヒ玉ヘルモノ也、
此事ハ学友三輪田元綱建言書出来タルヲ見ル、故其
論ニ至リテハ相ユヅリテ贅言セズ、

第六條

一 租稅ノ事

此度地券ヲ渡シ、代価百分ノ三ヲ以テ租金ト定メ玉
フ由、其仁政誠ニ感スルニ堪タリ、然トイヘトモ深
ク察セズンバアルベカラザルコトアリ、之ヲ与フレ
バ民悅ブ、然シ一度与フレバ二度取理ナシ、故ミダ
リニ与フベカラズ、国用余ナケレバ非常ノ備ナシ、
願ハ代価ノ定方嚴重細蜜ナラムコトヲ欲ス、今地租

高トイヘトモ、從來ノ慣習下民安シテ出セリ、諸稅
安シトイヘトモ新規ナルアリ、民苦情ヲ遂ルコト道
路ニ嚮シ、深ク察シテ其利ヲ失ヒ玉フベカラズ、

第七條

一 礼服ノ事

大礼服・通常礼服ヲ見ルニ洋服ヲ模シタルモノ也、
官ニ出ルモノ止ヲ得ス是ヲ着スルト見エテ、自宅ニ
テ暇日此ニ似タルモ着セズ、又官ヨリ帰レバ直ニ脱
ス、然ルヲ善ト称スルモノハ心ト言ト相違スルガ如
シ、其ハ兎モ角モ夏ハ暑ク冬ハ寒ク、其上高価ナル
實ニ歎スベシ、常服ノ上ニ襠高袴ヲ着シ、是ヲ通常
礼服トシ、直衣紗帽ヲ以テ大礼服トナシ玉バ、誠ニ
価廉ニシテ平服ノ上、唯一ツ有之バ用事足レリ、且
革履ヲ用ル、實ニ歎ズベシ、唯不弁ニシテ価高キノ
ミ、此履ノ流弊、下駄ニ軋シテ一足一円ヲ過ルモノ
ヲ今日漸ク世ヲ渡ル程ノモノモハケリ、如斯成行テ
八國傲ノ為ニ困窮ス、速ニ礼服ヲ改メ履ヲ廢シ、高

価ノ下駄ヲ禁止セラレンコトヲ願フ、

第八条

一 衣服制度ノ事

天子モ人ナリ、諸人モ人ナリト言ハ所謂上下ノ序ヲ
紊ル夷人ノ説、四支皆同トイヘトモ智愚ノ別アリ、
貴賤ノ種アリ、イカンゾ是ヲ同一ニ論センヤ、大政
維新、自主自由ヲ授玉ヘルヨリ衣服ノ制度ナク、下
民已カ分限ヲシラズ華美ヲ好ムニヨリ四民ノ困窮ト
ナレリ、皇華士平民ノ等定ルトイヘトモ其別ヲ見ズ、
願ハ衣服ノ品ヲ別チ、上下ノ分ヲ明ニシ、道路往返
ニテモ意ヲ用ヒ、礼讓ヲ專ニシ、所謂君子國ノ名ヲ
失セザランコトヲ欲ス、

第九条

一 土木興立ノ事

方今土木ノ事大ニ行レ、実ニ盛ナルコトナリ、然リ
トイヘトモ未ダサ、ル所アリ、其大略ヲ言フ、天地
産生之徳ハ片時モ止ナシ、然レバ間地アルハ造化ノ

神意ニアラズ、又國ノ宝ヲ棄ルニ似タリ、大道ニハ

必松杉ヲ植ルモノハ旅人其蔭ニ蓋レンコトヲ欲スル
カ、誠ニ無用ノモノナルノミナラス、傍ノ田畠ニ害
アリ、櫨楮又ハ柿ノ類、年々収納スルモノヲ植ベシ、
又琵琶湖・印幡沼ノ如キ水害時々アリ、川ヲ決テ水
ヲ減セバ新田ヲ開クコト多シテ、大小ノ節其害ヲ免
レンコト必セリ、又三府諸県肥饒ノ地ニ草ヲ生シタ
ルアリ、諸国山海可開墾良地アリ、速ニ化工ノ妙用
ヲ助ンコトヲ欲ス、不毛ノ惡地ヲ開拓スルヨリ其功
百倍ナラン、

第十条

一 神社仏寺ノ事

神社由緒アルモノ、官是ヲ營繕スル勿論ナリ、鄉村
社ニ至テハ一小区一社地ヲ撰ミ一所ニ合併スベシ、
如何トナレバ小村一社ヲ構ヘタルハ、社殿常ニクツ
レ庭前必穢レタリ、神慮ヲ恐ル、ノミナラズ、外国
人ノ見ニモ恥ベキ也、一小区ニ一社ト定ル時ハ祭奠

モ一同二成、飲食ノ費モ少ク神社ノ修覆モ輕シ、然シテ一祠官一祠掌ヲ置、民費課出シ給与スベシ、又仏寺モ一小区二一寺ヲ置、仏像一所ニ合併シ、余ハ皆取除ベシ、又社寺共地所ノ広狭、社殿ノ大小ヲ定メ、彫刻漆塗ヲ禁スベシ、因ニ曰、方今神名牒纂定ノ事アリテ別社ヲ撰ミ給フ、恐クハ其美ニ至リガタシ、如何トナレバ拵タル古伝少カラズ、又ハ今社殿ノ大ナルモノヲ以テス、神ノ尊卑ハ社殿ノ大小ニヨルベカラズ、方今新ニ定ル郷村社ニヨルベカラス、神ノ高下ヲ定ルコト最恐ルベキ也、然レハ官国幣ノ外ハ一社モ残リナク、府県区社ト名義ヲ立、神名牒ニ入玉ンコトヲ欲ス、

第十一条

一 神官僧侶ノ事

神官改正、神孫相承ノ旧家モ、一旦世襲ノ職ヲ解新任アリタルコト其理明ナリ、旧神官多ハ両部唯一ナド唱へ、世襲ノ久、神祭ノ主意モ不弁モノハ廢セザ

レバアラタマラズ、シカシテ又有徳人ハ二度新任セシコト、徳ヲ捨玉ハザル明ナリ、然トイヘトモ猶未旧弊改ラズ、神祭ハ式令其他古典ニ明徴アリテ、聊惑ナキヲ曖昧ノ手数ヲナシ、人ヲ狂惑スルノ所行ヲ見ル、是全ク旧神官伝習ノ弊去尽サズルノ所為也、依之旧神官ノ徳アルモノヲ用ントナラバ、古来附屬シタル社ヲ放チ、他区ニ移サバ可ナラン、然ラザレバ社伝トカ旧格トカ因循スルコト必セリ、又瓢茲ニ疑アリ、因ニ迷ントス、旧神官ハ多ク古家ニシテ久ク朝恩ヲ蒙リ、代々位階ニ進ミ、武家私權ヲ專ニシ、朝命ヲ蔑ニセシ折モ、独天朝ノ為丹誠ヲ尽シ、諸人ヲ誘ヒ、神社ヲ修覆シ来リタルハ功ナシト言ベカラス、然ルヲ今般廢セラル、ニ改業金モ給ハズ、放シ投ニ為玉フコト、皇恩周トイフベカラズ、是迄ノ家業ヲ廢セラレ、忽ニ衣食ニ苦ムモノ、豈恨ナシト言ベカラズ、上仁恩ノ設ナク、下怨恨飢渴ノ民有テ國太平ト言ベケンヤ、願ハ旧神官悉ク改業資金ヲ給リ

度、又僧侶モ一小区ニ一寺ヲ置、一寺ニ老僧二人ヲ置、説教勸化一切差留、其余ハ都テ還俗セシメ、産業ヲ營セ、国力ヲ強スベシ、是又神官資金ノ類ヲ推シ改業元手金ヲ給フベシ、神官僧侶本手銭ヲ給フノ法ハ旧氏子旧檀家ヲシテ民費課出ノ類ニ準シ、大小社寺ノ分ニ応シテ然ルベシ、国内数万ノ旧神官僧侶手ヲ空シテ食スルハ実ニ国害ナリ、速ニ産業ニツカシムベシ、

第十二条

一 医術ノ事

医ハ人命ヲ扱フモノナレバ固ヨリ大任也、遠国辺陬ニ至ル迄周ク非命ニ死スルモノナカラシムコトヲ願フ、府県医学館ヲ設、其術ヲ試ミ、成業ノモノハ等級ヲ与へ、月俸ヲ給ヒ、村町ノ弁利適宜ノ場所ヘ診察治療所ヲ建、四民ヲ救フコトヲ欲ス、方今世上ノ医ヲ見ルニ、口腹ヲ養ヒ兼タルモノ医トナリタルモアリテ、洋医洋書ヲシラズ、漢医漢籍ヲシラヌモノ挙テ

数フベカラズ、是等ノモノハ試験速ニ廃シ玉ハザレバ、下民ノ医ヲ撰ブノ力ナキモノ、医ノ為ニ命ヲ失フモノ又数フベカラズ、願ハ造化産生ノ徳ヲ考へ、天命ヲ保ノ道ヲ立玉ハンコトヲ願フ、

第十三条

一 華士族家禄ノ事

華士族何ヲ以テ家禄アルヤ、有功ニ報スルナルベシ、禄子孫ニ伝フ者ハ古ノ定ハ大上ノ二功ナリ、維新ノ功ニヨリテ禄ヲ食モノ誠ニ少ク、從來世襲ノ禄残ルモノ多シ、是ヲ僭考スルニ、悉皆取揚玉ハハ、内乱ヲ醸スノ患ヲ慮リ玉フカ、又ハ飢渴ニ迫ランコトヲ憫ミ玉フノニニイデズ、無功ノ華士族手ヲ空シテ官米ヲ食ノ理ヲシラズ、故愚慮スルニ華士族各三等ニ家禄ヲ平定シ、其禄ニ応ズル田畠ヲ給ランコトヲ欲ス、其上其地ヨリモ又租ヲ納ルコト本ノ如クスベシ、然レバ華士族モ永年禄ノ姿トナリ安心スベシ、田地ハ富農有余ノ地ヲ買上ハ足ルベシ、今地ヲ給ルトモ

直ニ自耕スルコトハ難ク、是迄耕作セシモノ其地ヲ耕シ、定ル所ノ恩米ヲ納ル時ハ華土族ニモ妨ナク農ニモ妨ナシ、而シテ官吏ノ手数大ニ減ズ、神武天皇創業ノ初、功臣ニ土地ヲ給ヒシ例アリ、然シ彼ハ大功ニ対シタマヘルニテ、無税ナルコト言モ更也、是ハ從來ノ弊ヲ転ズルニテ、則式ノ口分田ノ姿ニ擬スベシ、因ニ曰、皇國ノ土地ハ独天皇ノモノナルヲ、洋僻輩叨ニ彼説ヲ以テ論ズルヲ見ル、実ニ歎ズベキ也、皇國ハ造化ノ神勅ヲ以テ、大國主命・少彦名命經營シ玉シヲ条理嚴蜜ニシテ、皇祖讓ヲ請玉ヘリ、故ニ尺地モ其有ニアラザルハナシ、此事ハ論長ケレバ別冊ニ委細弁セントス、

第十四条

一 洋学ノ事

方今洋学ノ盛ナル、実ニ可喜也、然トイヘトモ其害モ又少カラズ、如何トナレバ官洋学ヲ開ノ主意ヲ考ルニ、彼ガ長ヲ取テ吾短ヲ補フ為ナラズヤ、然ルニ

洋学者流ヤ、モスレバ洋人トナリ、吾皇道ヲ滅セントス、如斯忘却スルノ学ヲ以テ全国ノ才子皆洋学セシメバ、三十年ノ中悉ク洋人而已ニ成行、天步艱難ニ至ンコト期テ可待也、仰願ハ和漢ノ學術成就シ、報國ノ志厚ク、且忠直ナル人ヲ撰ミ、彼学ニ入シメ給ヒ、彼学者ハ翻釈ヲ宗トスル学局ニ置、大政ヲ採ル重官ニ加フベカラズ、又皇上ノ近側ニ侍座セシムベカラズ、加藤弘之ガ国体新論ノ如キ如何ニ見玉フヤ、仰願ハ善惡静ニ賢察シ玉ハンコトヲ欲ス、是則廢帝系ノ魁首ナラズヤ、洋書速ニ去スンバ臍ヲ噬ノ悔アラン、忽ニスベカラズ、

第十五条

一 外国交易ノ事

外国ト交易スル、能意ヲ用ヒザル時ハ國ノ衰微トナル、彼ヨリ取ルモノ皆有用ノ品ニ限り、是ヨリ出スモノ年々繼出スル産物ヲ以テスル時ハ誠ニ國益ナリ、然ルヲ方今渡來ノ品ヲ見ルニ冗物多シ、商人ノ金銀

タリトモ別途ニアラズ、海外ニ出サ、ルヲ以テ旨ト
スベシ、願ハ官員其任ニアルモノ、ヨク意ヲ用ヒテ
商、又其利ニ通ゼンコトヲ欲ス、

第十六条

一士族帯刀ノ事

皇華士平民ノ四等二分モノハ尊卑ノ分限ヲ制スルコ
ト明也、サテ士ハ如何ナレバ士ノ分限正シキヤ、先
年ノ布告ヲ見ルニ、士ハ三民ノ上ニ居レバ云々ノ弁
アリ、実ニ農工商ノ上ニ居レバ、其徳ナクンバアル
ベカラズ、然レバ士ノ名義ヲ弁ゼザル程ノモノ、士
ニ居ルハ其罪去ルベカラズ、速ニ可悔悟也、又官ノ
失ナキニシモアラズ、其欲ハ官ニ居モノ皆脱刀、加
之脱刀勝手次第ノ布告アリテヨリ、刀ヲ帯ルモノハ
狂ノ如ク、刀ヲ帯ルモノハ頑愚ノ如ク、実ニ皇國ノ
風儀ヲ失ヘリ、神世以來刀ヲ帯タルコト正史ニ顯然
トシテ、高級ニ居ルモノ暫時モ刀ヲ脱スベキニアラ
ズ、刀ヲ脱シテ高人ノ体ニナレハ商人ノ心トナリ、

刀ヲ脱シテ農ノ姿トナレハ農ノ心トナルニヨリ、士
ノ廉恥ハ夢ノ覚タル如ク失果、唯利弁ニノミ走ル、
如斯シテ士ノ名義アランヨリ、是ヲ廢スルコト可ナ
ランカ、然シ皇國ハ武ヲ先トシ、文ヲ後トスルノ國
也、廢スベキニアラズ、唯実験其任ニ耐ザルモノ速
ニ之ヲ廢スベシ、仰願ハ士以上門ヲ出ルニ刀ヲ帯ベ
キノ命アランコトヲ、刀ヲ帯ザレバ心意自ラ軟弱ニ
落入、礼義隨テ崩ル、脱刀ハ外夷ノ風儀移リシモノ
ニテ皇國ノ國體ニ關係ス、イカンゾ是ヲ脱センヤ、
是聊ナル如クナリト雖モ士氣奮発ノ大本也、因ニ曰、
海陸軍兵ハ今モ洋刀ヲ帶リ、然レトモ國刀ト利鈍如
何ゾヤ、試テ其銳ヲ用ヒンコトヲ欲ス、

第十七条

一各地方戸長以下ノ事

戸長以下ノモノ役權ヲ以テ下民ヲ苦ルコト、実ニ歎
ズベキナリ、カクイハ官吏ヲ誹ニ似タリ、願ハ蜜
ニ其実ヲ檢シ給フベシ、地檢濟租稅定ラハ、速ニ戸

長以下ヲ廢シ、更ニ何小区代ト云フ名義トナシ、下民ノ雇人トナシ給ヒ、等級ヲ不給、所謂代言人ノ姿トシ、一小区ノ入札ヲ以テ適宜ニ撰出シ、相当ニ給与セシムベシ、是下情ヲ通スルノ第一ニテ仁政ノ階梯ナラン、

第十八条

火葬之事

先年火葬ヲ停止セララル、実ニ感服スル処也、今般又火葬ヲ許サレタル、甚タ迷フ所ナリ、是西洋ニアルヲ以ナルベシ、親子兄弟ノ情ヲ以テ生ヲ得シメン事ヲ思ヒ日夜看病、其甲斐ナク遂ニ死ニ至ル時ハ、親戚ノ疾痛慘怛、共ニ死ント欲スルノ悲ミアリ、然ルヲ直ニ火ヲ以テ是ヲ焼ク、実ニ忍ブベカラザル事ナリトイヘトモ、仏ニ迷フ心ヨリ魂ヲ助ント思ヒ是ヲナスナリ、サテ仏葬ハ水葬・火葬・土葬ノ三、共ニ忍ベカラザルコトノミ、中ニ水葬・土葬ハ今モ禁アリト見エテ吾イマダ行ヘルヲ聞ズ、皇道モ名教モ葬

ヲ厚クスルノ教ニシテ、仏ノ暴戾ナルガ如クナラズ、嘗テキク、墓地ノ費多カラシコトヲ憂ノ説アリト、モシ然ラバ誠ニ悲シムベキコト也、現今有ス処ノ墓所ヲ見玉フベシ、三百年ノ古墳ハ容易ニナシ、然レハ一家讒ノ地アレハ、古墓ニ新屍ヲ納メテ幾年ヲ経トモ、更ニ拡大ニハナルベカラズ、千二百年ノ悪風、今ノ時改ラスンバ何ノ時カ待ン、速ニ改正停止アラシコトヲ欲ス、

冊子原寸 縦二七糎 横二〇・五糎 二〇枚

三七 琉球ヨリ日支兩屬願書

当藩清国江隔年之進貢、或は清帝即位之節慶賀使差遣、且清国より冊封請來候得共、自今被差止、且藩内一般明治之年号を奉し、年中之儀礼等総而御布告之通遵行、且藩制改革被仰付候と之件々、太政大臣三条公御達書(実差)并貴様より藩王江御示諭之趣、具二拝承仕、乍恐我々歎願之趣、左条ニ申上候、

一 当藩之儀、往昔は

皇国・支那江茂交通迄二而何方江茂服屬無之、政体諸礼式等不相立候上、諸篇不自由為有之事候処、応安五年より支那之管轄相成、東南藩屏之邦と被称、夫より無断絶使者を遣、貢を進シ、支那代替之節は別段使節差立、慶賀之礼を述、支那より茂代々勅使を以、王爵冊封有之、明徳三年閩人三拾六姓被給、諸規模相定、柔遠駅と申旅館等被給、存留官詰通、且藩務之用品を茂致調弁、到清代は猶親切二被取扱、進貢之規則等明・清会典二記載相成、既二五百年余最通来、且又慶長拾四年より薩摩江茂相隨ひ、万端御指揮を蒙り、漸く政体宜敷、日用之物件等無支相違、飢饉等之節御救筋其外段々御手厚被仰付、到去申年

朝廷御直管相成、益蒙

御仁恤、誠二

皇国・支那之御高恩拳而難申尽、右通御両国之御蔭を以一藩之備相立、上下万民致安堵、実々御両国は弊藩

父母之國と奉仰、人心確乎として相固り罷在事二而

皇国御奉公、支那江進貢之儀は本藩重大之規模、万世万代不相替忠誠を勵し度志願御座候処、自今支那之進貢并慶賀、且彼ノ封冊を受候儀被差止分ト、支那相離候而は親子之通相絶候茂前、人心令迷乱候儀は勿論、累世之厚恩忘却信義を失、諸国二対し名分相廢、永代之恥辱無此上事二而藩王始拳藩一同、必至と驚痛仕居申次第御座候間、前件之情実被遊御賢察、支那江隔年進貢、代替之節慶賀且彼ノ封冊を受候儀共、是迄之通被仰付被下度

皇国御管轄之所は鹿兒島県江屬シ候砌より、支那二対し隱密仕来事御座候得共、其通二而は別而奉恐入事二而支那江申披明瞭之方二取計、御両国之御奉公永久不替致勤勉度御座候間、幾重二茂小邦之情実御憐察を以何卒願意御採用、是迄通御両国之御撫恤を蒙候様被仰付被下度奉懇願候、

一年号并儀礼等之儀、是迄

皇国江奉対候而は皇曆を用、支那江対シテハ彼曆を用、年中之儀礼茂御両国之御格式ニ準定置候付、於東京内務卿大久保利通殿より池城親方等江御内達之時茂奉願趣有之、藩内一般明治之年号を奉し候様ニと之趣意は被相除候付、新年・紀元節・天長節等之祝賀、御布告通遵奉可仕段申上置候次第御座候間、而屬之敵藩別段之御取訳を以何卒是迄之通被仰付被下度奉願候、

一当藩之儀、海外之孤土ニ候得共、開闢以來一国之名分相立

皇国・支那江屬し候而茂、難有王位冊封被為在、藩制茂国柄ニ応し民心ニ随ひ、体裁相立、數百年來無交易、四民各分ニ安し業を勵し平穩ニ相治來、殊ニ国体政体永久不相替、是迄通被仰付置度、去々年外務卿副島種臣殿江奉願其通被仰付、且去年当藩事務、於内務省御管理被仰付候段、林友幸殿より御書付御渡之砌、何篇是迄通ニ而、更ニ相替候儀は無之段、御同人御口達之趣を茂承知仕、彼是藩内一同令拝承難有安堵仕、渥々

御礼等申上置候次第御座候處、藩制改革被仰付候ハ、小邦丈人心迷乱、每物不行届、藩内之治何共相調申間敷と、別而心痛仕居申候間、素より一国之名分王号等有之、乍恐以前御内地諸藩茂相替候次第、特別之御取訳を以何卒藩制不相替、此中之通被仰付被下度奉願候、右は国家重大之条件ニ而従前通被仰付置度、挙藩一同深願罷在、夫々藩王より奉願事候得共、巨細之成行我々より茂申上候様被申付、右通奉願候間、幾重ニ茂御採用被下度偏ニ奉仰候、以上、

明治八年八月

富川親方

池城親方

浦添親方

伊江王子

内務大丞松田道之殿

冊子原寸 縦二六・五糎 横一九・五糎 五枚

三六 琉球藩制度改革ニ付見習トシテ琉使上京ノ

件

明治八年八月

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

冊子原寸 縦二八・三釐 横一九・五釐 二枚

一 当藩御保護之為分遣隊被置候旨、太政大臣三条公より之御達書、内務卿大久保利通殿より池城親方等上京之御御渡相成、此儀不容易事件ニ而帰帆之上、国評を以

三六 琉球藩制度改革ニ付朝官トノ往復文書二冊

申上候方ニ内願申上置候処、猶又賈下より御示諭之趣

二六六九ノ一

茂致承知、此上御断茂難申上奉畏候、然は当藩之者共

〔表紙〕朝官衆往反之書類 上

皇国之衆ニ対し、万端律儀可有之と之段は兼々申付置

候得共、猶以相慎候様分ケ而申渡事御座候間、兵隊共

今般御達書条件ノ貴答書ニ因リ、更ニ対弁書ヲ以テ左ニ

二 茂御締方被仰渡、人数茂成丈減少被仰付度、尤地価

説明ス、

一件茂致承知候得共、御保護之為被召立事ニ而代価相

〔末〕一 当藩御保護之為分遣隊被置候旨、太政大臣三条公ヨリ之

下候而は不本意候間、無代ニ被仰付度奉願候、

御達書、内務卿大久保利通殿ヨリ池城親方等在京之御御

一 刑法定律之通施行可致、因而右取調之為担当之者両三

〔脚〕渡相成、此儀不容易事件ニテ帰帆之上、国評ヲ以申上候

名上京可申付旨致承知、弥差登可申候、

方ニ内願申上置候処、猶又賈下ヨリ御示諭之趣モ致承知、

一 学事修業・時情通知之為人選之上、少壮之者十名程上

此上御断モ難申上奉畏候、然は当藩之者共、内地之衆ニ

京可為致旨致承知、是又上京申付候様可仕候、

对シ万端律儀可有之トノ段ハ兼々申付置候得共、猶以相

右之通御請申上候也、

慎候様分ケテ申渡事御座候間、兵隊共ニモ御締方被仰渡、

人数モ成丈減少被仰付度、尤地価一件モ致承知候得共、

御保護之為被召立事ニテ代価相下候テハ不本意候間、無

代ニ被仰付度奉願候、

一此件、兵隊入疏ノ上ハ、前途土人ト兵員トノ間ニ生スル紛紜、亦予防スヘキハ固ヨリ至要ノ事ニシテ貴論甚タ適セリ、故ニ拙者帰京ノ上ハ審カニ此貴論ノ旨趣ヲ具状シ、併ニ政府ニ於テ相当ノ取締法ヲ施立アラン事ヲ上陳スヘシ、而シテ此等ノ事ニ於テハ貴下藩王ノ職任ヲ以テ、当藩下實際ノ景況ニ応シ、如何ナル方法ヲ上請セラルモ、固ヨリ貴下ノ本分タレハ、顧慮ナク政府ニ向テ之ヲ具陳セラル、ヨ善シトス、且又地代金ヲ仰カサルトノ義、貴論ノ篤キ如此ニ至ル、実ニ感スヘシ、然リト雖モ抑モ兵營ヲ置テ国土ヲ保護スルハ政府ノ本分義務ニシテ、此等ノ費用ヲ弁スル為メ、常ニ人民ニ対シテ収税ヲ要スルナリ、即チ当藩ニ於ケル其税額多少ノ論ハ暫ク措キ、常ニ若干ノ税額ヲ収納セリ、此ヲ以テ政府保護ノ恩恵ニ奉答セラル、ノ義務ハ既ニ

尽セリ、然ルニ今又、此兵營ト地代金ヲ自弁セラル、

ハ甚タ厚キニ過ク、假令上請セラル、モ、蓋シ政府ニ

於テハ之ヲ聽許セサルヘシ、然レトモ貴論如此忠篤ノ

旨趣アルヲ、拙者之ヲ止メテ擁蔽スルハ、固ヨリ拙者

ノ本旨ニアラサレハ、審カニ政府ニ具状其裁決ニ任ス

ヘシ、故ニ分營ヲ被置ノ条件、政府ニ対シテノ遵奉書

ニ此旨趣上請ノ書面ヲ添ヘテ出サレ、地価取調書ハ別

ニ拙者ニ出サルヘシ、政府若シ貴論ノ上請ヲ聽許アレ

ハ、拙者ニ出サレタル地価取調書ハ不用物ニ附スヘク、

若シ聽許ナキトキハ、此地価取調書ヲ以テ地所買上ノ

手続ニ供スヘシ、

(朱) 一刑法定律之通施行可致、因テ右取調之為担当之者兩名、

上京可申付旨致承知、弥差登可申候、

此二件遵奉セラレタル以上ハ政府ニ対シテノ遵奉書ヲ出

サルヘシ、

(朱) 当藩清国へ隔年之進貢、或ハ清帝即位之節慶賀使差遣、

且清ヨリ冊封受來候得共自今被差止、且藩内一般明治之

年号ヲ奉シ、年中之儀礼等總テ御布告之通遵行、且藩制改革被仰付候トノ件々、大政大臣三条公御達書并貴下ヨリ之御示諭委曲致承知候、依之諸官ヘモ評議之上懇願之趣左ニ申上候、

一当藩之儀、往昔ハ政体諸礼式等不相立候上、諸篇不自由為有之事候処、

皇国・支那ハ屬シ、御両国之蒙御指揮、漸々政体宜敷罷成、藩用之物件モ御両国ニ便致調弁、其外段々蒙御仁恤、誠ニ

皇国・支那之御高恩拳テ難申尽、実々御両国ハ父母之國ト挙藩末々ニ至リ奉仰罷在、幾万世不相替忠誠ヲ勵度志願御座候処、自今支那ヘ之進貢・慶賀并彼ノ封冊ヲ請候儀被差止候テハ、親子之道相絶候モ同前、累世之厚恩忘却、信義ヲ失申事ニテ必至ト胸痛仕罷在仕合御座候間、前件之情実被遊御賢察、支那ヘ之進貢・慶賀并彼ノ封冊ヲ受候儀共、是迄通被仰付度皇国御管轄之所ハ鹿児島県ヘ屬シ候砌ヨリ、支那ニ対

シ隱密仕來候得共、支那ヘ申披明瞭之方ニ取計、幾重ニモ御両国之御奉公、永久勤勉致度御座候間、何卒願意御採用被下度奉懇願候、

此件従前ハ両属国ノ体タルヲ、我カ政府默許ニ附セラレタルモ時勢ニ因リ、幸ニシテ大障礙ナシト雖モ、今也皇政一新、万機親制ノ世トナリ、万国ト交際益密ナルニ當テハ、其独立国タルノ本旨ヲ達スルニハ、世界ノ条理、万国ノ公法等ニ照ラシテ、其權利ヲ全フセサレハ、国其國ヲ成サルナリ、然レハ当藩ノ如キ、我カ国ノ版図タルモノヲシテ、他邦ニ臣事セシメ、両属ノ体タラシムルハ國權ノ立サル最モ大ナルモノニシテ、速ニ之ヲ改メサレハ世界ノ輿論ニ対シ其答弁ノ条理ナシ、是独リ我カ政府ノ欠典ノミナラス、随テ当藩ノ存亡ニ関ス戒メサル可ケンヤ、是今般ノ御達書アル所以ノ一大眼目ナリ、今貴下ノ陳ヘラル、所ハ、更ニ此等ノ条理ヲ問ハス、只旧格ニ因襲シテ新規ニ就クヲ欲セス、畢竟自私ノ苦情ニ帰ス、且此琉球ハ地理・人種・風俗・言語、及ヒ我カ政府ノ保

護ヲ受クル等ノ諸件ニ就テ論スルトモ、固ヨリ我カ国ノ
版図ニシテ所謂地理上ノ管轄ナリ、之ヲ世界ノ公論ニ質
ストモ、誰カ之ヲ管轄ニアラス、版図ニアラスト言ハン
ヤ、其清国ニ於ケル地理・人種・風俗・言語等一ツモ縁
由ナク、只中古当国主自ラ明ノ招諭ニ応シテヨリ、彼ノ
冊封ヲ受ケシ者ニシテ、而シテ未タ曾テ彼ノ政府ノ保護
ヲ受ケス、所謂政令ノ管轄ニ似テ其実ナキモノナリ、之
ヲ世界ノ公論ニ質ストモ、誰カ之ヲ版図ト言ハンヤ、其
管轄モ実有リ、即チ権ノ全キモノトハ言ハサル必セリ、
故ニ清国ニ於テ琉球ハ己レノ管轄ナリト言フモ、独リ当
藩ニ対シテ之ヲ言フコトヲ得テ、我政府ニ対スルハ勿論、
世界ニ向テ能ク之ヲ言フコトヲ得ス、何トナレハ中古明
主ノ招諭スルヤ、明カニ我カ管轄ヲ絶タシメス、又明カ
ニ我レノ許諾ヲ得ス、只琉球国主ノ濫リニ応論スルヲ幸
ヒトシテ、之レト私義ヲ結ヒタルモノ、如クニシテ、世
界ノ条理ニ照ラシテ更ニ名分ノ取ルヘキナキヲ以テナリ、
宜ヘナル哉、我カ征蕃ノ役ヲ彼レ義拳ト視認メ、当藩下

会災人民ノ遺族ニ与フル若干金額ヲ我カ政府ニ向テ私ヒ
タルコト、若シ清国ニ於テ琉球ハ、必ス己レノ管轄ナリ
トシテ世界ニ向テ公唱スルコトヲ得ハ、何ソ自ラ牡丹社
ヲ処置シテ当藩下人民ヲ保護セサルヤ、何ソ当藩下会災
人民ノ遺族ニ与フル若干金額ヲ、我カ政府ニ向テ私ハス
シテ自ラ当藩ニ授ケサルヤ、何ソ我カ征蕃ノ役ヲ義拳ト
視認メタルヤ、即チ琉球ハ清国ノ管轄ヲ受クヘキ条理ナ
キノ明証歴々如此、且征蕃ノ役ニ当リ、我カ政府ト清国
トノ談判、結局ニ於テモ尚ホ能ク明カナリ、因此觀之、
清国ノ当藩ニ於ケルハ情義名分早既ニ廢絶シテ、当藩ノ
清国ニ於ケル其情義ト言フモ、即チ一己ノ私情耳、今清
国ニ臣事スル諸件ヲ絶ツト雖モ藩王ニ於テハ其任ノ重キ、
我カ藩屏ノ職分、其品位ノ貴キ一等ノ官華族ノ列ニ在リ、
藩内ニ於テハ其利用厚生ノ道ヲ達ル為メ、船舶ノ往来、
人民ノ交際、万貨ノ需用等、皆ナ其自主ノ權利ニ因テ隨
意ニ之ヲ行フコトヲ得、加之内地トノ往来、前途益盛ナ
ルモノアリ、然レハ藩制也、衣食也、居住也、交際也、

商法也、關藩因テ以テ成立安着スル所以ノモノニ於テ、毫モ欠耗スル所ヲ見ス、苦情果シテ何ノ苦情ナル乎、今我カ政府ノ当藩ニ於ケルハ清国ニ臣事スルノ諸件ヲ絶タシメサルトキハ、前ニ所謂地理上管轄ノ權利ヲ失ヒ、即チ

天皇陛下ノ權利ヲ欠損スルニ至ル、其義ノ關係、世界ニ對シテ重ク、且広シ、彼ノ当藩ノ清国ニ對スル情義、即チ一己ノ私情ト其輕重如何ソヤ、然ルヲ徒ラニ自私ノ苦情ヲ主張シテ、此条理ヲ問ハサルハ其見識亦謬レリ、就中自今我カ政府ニ屬スルコトヲ清国ニ向テ公告セン等ノ言ニ至テハ、最モ大ナル謬リニシテ敬ヲ我カ政府ニ失スルノ甚シキモノナリ、何トナレハ当藩ノ我カ版圖タルコト万国皆能ク知ル所ニシテ、清国ニ對シテハ猶ホ近ク征蕃役ノ始末ニ於テ、我カ政府ヨリ明示スル所ナリ、豈ニ貴下ノ漫リニ彼レニ告ケラル、ヲ要センヤ、乞フ、復此ノ不敬ノ言ヲ發スル勿レ、抑モ前陳スル如キ大条理ノ動カス可ラス、換ユ可ラサルモノアルヲ以テ、廟議茲ニ確

定セリ、如何ナル情実ヲ上陳セラル、トモ政府決シテ採用ナキコトヲ知ル、故ニ此歎願書ノ旨趣ハ拙者ニ於テ聽許スルコトヲ得ス、只速ニ遵奉セラルヘシ、

(朱)
一当藩之儀、右ニ申上候通、

皇国・支那へ属シ居候故

皇国へ奉對候テハ皇曆ヲ用、支那ニ對シテハ彼曆ヲ用、年中之儀礼モ御尚国之御格式ニ準シ、取行居申次第ニテ、新年・紀元節・天長節等ノ祝賀、弥御布告通遵奉可仕候間、

其他是迄通被仰付被下度奉願候、

此件ハ前条遵奉ノ上ハ、随テ遵奉セサル可ラサル事由ニ付清国ノ年号ヲ廢止シ、我カ年号ノミヲ奉セラルヘキコト論ヲ待タサルナリ、

(朱)
一職制之儀、国柄ニ応シ民心ニ随ヒ相定、古來變易無之、政

府御直管相成候テモ、国体政体永久不相替被仰付候段被仰渡、藩内一同拝承難有安堵仕居申候处、藩制改革被仰付候ハ、小邦丈人心迷乱、每物行届申間敷ト、別テ心痛仕居申候間、御内地トハ別段之御取訳ヲ以、何卒此中之通被

仰付被下度奉願候、

此件、政府ニ於テ、当藩ノ国体政体永久変革セサル等ノ命令、曾テ無キ所ナリ、只去ル六年ヲ以テ、外務^卿郷副島種臣之指揮ニ依リ、外務官員ヨリ当藩官員ヘ贈リタル書中ニ掲クル所ノ事ヲ指シテ言ハル、ナルヘシ、果シテ然ラハ貴弁ノ旨趣ト異ナリ、彼ノ書中ノ意ハ則チ藩タルノ制ヲ容易ニ變更セサルノ意ナリ、而シテ今般ノ御達書ハ固ヨリ藩タルノ制ヲ變革スルノ主意ニアラス、藩制ニ屬シタル職制ヲ施行スルノ主意ニシテ、此藩制アレハ、必ス此職制ナカルヘカラサルナリ、元來国ノ政体ハ時勢ノ沿革ニ從ヒ、国家ヲ經營スルノ便宜ニ因テ、變革セサル可ラサルモノニシテ、永世旧制ヲ墨守スルコト得ヘキモノニアラス、則チ内外古今ノ書史ニ就テ、之ヲ見レハ歴々明カニシテ、尚ホ近クハ我カ邦明治初年ヨリ本年ニ至ル迄ノ間ニ於ケル、其變遷沿革、天下皆ナ知ル所ナリ、就中近日ニ至テハ元老院ヲ被置

天皇陛下無量權ノ幾分ヲ割テ之レニ附与セラル、等、我

カ朝未曾有ノ大變革ナリ、是皆ナ時勢ノ沿革ニ從ヒ立国ノ本旨ニ基キ、宜シク然ラサル可ラサルニ出ツ、

天皇陛下ヨリ有司人民ニ至ル迄、私ノ議論、私ノ意見ヲ挟ミ、其宜シク然ラサル可ラサルノ道理ニ從ハサルコトヲ得ス、当藩ニ於ケルモ亦然ルナリ、故ニ只速ニ遵奉セラルヘシ、

前陳ノ条件ハ政府確定ノ詮議ニ出テ、乃チ拙者ニ委シテ当藩ニ被差遣タル以上ハ、仮令幾度歎願セラル、トモ、拙者ニ於テハ決シテ之ヲ聽許スルコトヲ得ス、藩議或ハ迂闊ニシテ、一度歎願シテ聽許ヲ得サレハ再ヒ三ヒニ及ヒ、猶ホ聽許ヲ得サルトキハ、藩吏上京シテ直ニ政府ニ向テ哀願スヘシ等ノ事ナキニシモアラサル乎、若シ然ラハ実ニ冗議ニシテ、徒ラ二時日ヲ費ヤス耳、此等無用ノ事ヲナス勿レ、何トナレハ拙者ニ於テハ廟議ノ濫興ヲ聽得テ、而シテ今般ノ命ヲ奉シタレハ、其大条理ノ決シテ動カス可ラサルモノニ於テハ、一度之ヲ聽許セサルモノハ、仮令再ヒ三ヒニ及フト雖モ決シテ聽許セス、若藩吏

上京シテ直ニ政府ニ向テ哀願スルトモ、政府ハ既ニ拙者ニ委サレタレハ、藩吏ノ上京哀願ニ依テ採用アルノ理ナキノミナラス、抑モ拙者ニ於テ其委任ノ權ヲ以テ藩吏ノ上京ヲ聽許セサルナリ、依テ明九日ヨリ日数十日間猶予スヘキニ付、此間ニ於テ彼ノ冗議贅論ヲ止メ、更ニ凶ヲ改メテ正確ノ藩議ヲ尽シ、来ル十九日午前迄ニ答弁書ヲ出サルヘシ、若シ不得已事故ノ生スルアツテ、尚ホ時日ノ猶予ヲ請ハル、トモ、来ル二十一日ヲ超過セラル、コトナカレ、茲ニ待貴酬、

明治八年八月八日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

口上手扣

今般御達書之件々、藩王江再度御説明之趣、我々江茂委曲承知仕、存慮之程御内分ヨリ左条ニ申上候、
一 当藩ノ如キ我カ国ノ版図タルモノヲシテ他邦ニ臣事セシメ、両属ノ体タラシムルハ国權ノ立サル、最モ大ナ

ルモノニシテ速ニ之ヲ改メサレハ、世界ノ輿論ニ対シ御答弁ノ条理ナシ、是独リ我カ政府ノ欠典ノミナラス、随テ当藩ノ存亡ニ関ス、戒メサル可ケンヤ、是今般御達書アル所以ノ一大眼目ナリトノ件、当藩之儀、往古ハ万事不調法ニ為有之事情処、支那ノ屏藩ニ相成候付官生差渡、親切ニ教諭を受、一統人倫之道を知、猶又閩人三十六姓被給諸規模相定、政体諸礼式等品能相成、誠ニ国家創立之恩義不輕事ニ而支那江進貢之儀、当藩之大義勿論恩を不忘、職を尽し信義取守候儀、天下之至公ニ而自私之苦情ニ而ハ、無之事情得ハ、此所御洞察、寛洪之御処置被為在候ハ、万国之輿論ニ対し候而茂御答弁之条理相立、乍恐御欠典ニハ相成間敷哉ト奉存候、支那断チ絶候而ハ累世之厚恩忘却迄ニ而無之、信義を失、人タリ国タルノ道共ニ相廢、天地之間ニ可相立理ハ有之間敷哉、尤支那トノ統數百年以前より之段ハ諸外国一統之知る所ニ而新規ニ他邦江両属之体タルトハ義情相替可申、且又当藩両属之所ハ各国江其隠

れ無之、御兩國之御威權ニヨリ古來無事ニ有之事候得

ハ、当分通御兩國之御保護を蒙候ハ、當藩存亡ニ関スル念遣ハ有之間敷ト奉存候事、

一琉球ハ地理・人種・風俗・言語等之諸件ニ就テ論スルトモ、固ヨリ

皇國之版圖ニシテ所謂地理上ノ管轄ナリト之件、當藩ハ

皇國・支那之中間ニ當リ、地理之氣脈御兩國江連続いたし、人種・風俗茂御兩國江似寄、言語ハ常式交通繁有之候故、

皇國ニ似寄候、是等を以一定何方ニ因リ候トハ可難申哉ト奉存候事、

一支那政府之保護を受ケス、所謂政令ノ管轄ニ似テ実ナキモノト之件、當藩弘化より文久之比迄外国船繁々渡來、和好交易杯小邦難応儀共申立、仏暎亜三国之人員代り／＼逗留、藩中至極及心配居候処、支那江願越各渡合之長官江及示諭引取、無事平穩ニ為相成事ニ而、

右様差当次第、保護茂有之候事、

一清國ニ於テ琉球ハ己レノ管轄ナリト言フモ、独リ當藩

ニ對シテ之ヲ言フコトヲ得テ、我カ政府ニ對スルハ勿論、世界ニ向テ能之を言フコトヲ得ス、何トナレハ中

古明主之招諭スルヤ、明ニ我カ管轄ヲ絶タシメス、又明ニ我レノ許諾ヲ得ス、只琉球國主之濫リニ応諭スル

ヲ幸トシテ、之レト私義ヲ結ヒタルモノ、如クニシテ、世界ノ条理ニ照ラシテ、更ニ名分ノ取ルヘキナキトノ

件、當藩進貢之規則ハ明清會典ニ記載シ、諸國一統明知イタシ候故、前条通逗留之仏暎亞人共、支那之示諭

ニ依リ引取相成、且當藩往昔ハ皇國・支那・朝鮮・暹羅・瓜哇國杯交通迄ニ而何方江

茂服從無之候処、中古明主之招諭ニ依テ初而進貢いたしたる次第ニ而、其時支那より

皇國之管轄ヲ絶タシメ皇國之許諾ヲ得ヘク条理無之、濫リニ応諭スルヲ幸ト

シテ、私義ヲ結ヒタル儀ニ而ハ無之、是以名分之取ヘ

キナキ方ニハ相見得不申儀ト奉存候事、

一 征台ニ付、会災人民ノ遺族ニ与フル金額ヲ、我カ政府ニ向テ払ヒタルコト、若シ清国ニ於テ琉球ハ必ス已レノ管轄ナリトシテ、世界ニ向テ公唱スルコトヲ得ハ何ソ自ラ牡丹社ヲ処置シテ、当藩下人民ヲ保護セサルヤト之件、台湾御征伐ハ、

皇国より御処分相成候故、撫恤銀茂右之引結ニ而

皇国江御引渡相成爲申ニ而可有之、且逢殺害候時生殘シモノトモ支那より手厚保護有之候上、当藩江到来之咨文ニ台湾府江形行相糾、強暴を傲懷柔を示ト之趣相見得候付、生蕃一件、支那より差構不申筋ニハ相見得不申、是以清国之当藩ニ於ケル情義名分、廢絶いたし(○朱文挿入)候方ニハ相見得不申候事、

(貼紙)

朱入之通、書替を以、七月廿五日取替差上候、

(行間ニテリ、先)

其上台湾御征伐以後、支那ヨリ当藩江向、何之沙汰茂無之、進貢使上京表文・貢物等受納、藩王并使者附々江賜物其外会釈向等先例通親切ニ被申附、且皇帝殂落ニ付白詔、新帝即位

之紅詔等到来、何篇先規不相替彼」

一 藩王ニ於テハ其任ノ重キ、我カ藩屏ノ職分、其品位ノ貴キ一等ノ官、華族ノ列ニ在リ、藩内ニ於テハ其利用厚生ノ道を達スル為メ、船舶ノ往来、人民ノ交際、万貨ノ需用等、皆ナ其自主ノ權利ニ因テ随意ニ之ヲ行フコトヲ得、加之内地トノ往来、前途益盛ナルモノアリ、閩藩因テ以テ成立安着スル所以ノモノニ於テ、毫モ欠耗スル所ヲ見ス、苦情果シテ何ノ苦情ナル乎トノ件、成程藩王御取扱向御手厚被仰付、彼レニ向利用厚生之道を達スル為メ、船舶ノ往来、人民之交際、万貨之需用等何之面目有テ可被行哉、此儀何共不相調事御座候、当藩支那ト之続ハ大義之掛ル所、夫故幾重ニ茂願立候次第ニ而自私自之苦情を以、旧格ニ因襲いたし候筋ニ而ハ毛頭無御座候事、

一 我カ政府ニ属スルコトヲ清国ニ向ケ公告セン等ノ言ニ至テハ、最モ大ナル謬リニシテ、敬ヲ我カ政府ニ失スルノ甚シキモノナリトノ件、

皇国御管轄之所ハ鹿兒島県管轄之砌より、支那江致隱密來事候処、当時御和誼之砌、従前通ニ而ハ不相濟、

皇国ヨリハ既ニ表通り相成居候得共、当藩ヨリハ爾今包ミ居候付、此節支那江茂申披御両国之御奉公明瞭ニ致精勤度ト之所存ヲ以テ、右通為申上事候間、此段ハ

御聞分被下度事、

一 (原本廢滅、「明治文化資料叢書」第四卷外交編「ヨリ補充ス」)
「政府ニ於テ、当藩之国体政体永久」(變易セサル等之)

命令曾而無キ所ナリ、只去ル六年を以テ外務卿副島種臣之指揮ニ依リ、外務官員より当藩官員江贈リタル書中之意ハ、則チ藩タルノ制を容易ニ變更セサルノ意ナリトノ件、当藩国体政体永久不相替様被仰付、其意味御書付を以テ御渡被仰付度、去ル六年副島種臣殿江奉願、

右御書付御渡之時、国体政体永久不相替トノ意味不相分候付外務省官員兼江相伺候処、其意味ハ相含ミ候段承知仕、書取を以テ御引合之上、其意味書状を以テ御礼等申上、御受納相成居候、適當藩御管理之本省其総裁之御指揮ニ依リ御達之御趣意ハ、則チ政府之命令ニ而藩

内一同難有奉感戴候を、今更右通之御演説、込入仕合御座候間、兼而外務省より承知仕居候通被仰付度事、

一 今般之御達書ハ固ヨリ藩タルノ制ヲ變革スルノ主意ニアラス、藩制ニ属シタル職制ヲ施行スルノ主意ニシテ、此藩制アレハ必ス此ノ職制(廢滅、前出資料ニヨリ補充ス)「ナカルヘカラ」ストノ件、

職制ハ第一藩治之便利ヲ計リ相立候を至要ノ筈ニ而、当藩是迄之職制難措行稜茂候ハ、改革可有之候得共、基ひ国柄ニ応し、民心ニ随ひ、体裁相立、四民各分ニ安し、業を勵し、治民之實際ニ致適宜居候処、改革いたし候而ハ国家經營之便宜を失ひ、政務届兼可申、先進而申上候通往古以來分ト国立イタシ、王号等有之、御内地旧藩ト茂相替候次第、御取訳を以、是迄通被仰付度奉存候事、

右ハ御互ニ役場を離、御内論之事ニ而過不及之所茂御免被成候間心底打明申上候様、分ケ而被仰聞候付存慮之程申上候、尤口上迄ニ而ハ届兼可申ト手扣書を以申上候間、幾重ニ茂情実之所御賢察被下度奉仰候事、

亥

八月廿日

親里親雲上

内間親雲上

喜屋武親雲上

幸地親方

与那原親方

富川親方

池城親方

浦添親方

伊江王子

内務大丞松田道之殿

当藩清国江隔年之進貢、或ハ清帝即位之節慶賀使差遣、且清国より冊封受來候得共自今被差止、且藩内一般明治之年号を奉し、年中之儀礼等総而御布告之通遵行、且藩制改革被仰付候と之件々、是迄通被仰付度奉願候処、御聽許不被成段御示諭之趣委曲承知いたし、必至

と驚入諸官江茂評議之上、猶又願之趣左条ニ申上候、

一当藩之如キ

皇国之版図タルモノヲシテ他邦ニ臣事タラシムルハ、御国權之立サル最モ大ナルモノニシテ、速ニ之ヲ改サレハ、世界之輿論ニ対し御答弁之条理無之、政府之御欠典可被為成ト之御説明ニ候得共、当藩支那江之進貢ハ五百年以前より之事、諸国一統之明知スル所ニ而新規ニ他邦江從ひ、両属之体タルトハ条理相替可申、先書ニ茂申上候通、当藩基ひ支那之教化ニ依り、為人之道を知り、政体諸礼式相立、猶又

皇国之御撫恤を蒙り、一藩生養之道を遂、何方茂難差離、且当藩

皇国御管轄之所、御征蕃之役ニ当り、支那ト之御談判、結局ニおひて茂、猶能明ナリト之段茂致承知候得共、其以後支那より当藩江何之沙汰茂無之、去秋渡海之進貢使、当三月上京、表文貢物無異儀受納賜物使ハ、附々会釈向等例格通被申付、尤同治皇帝殂落付白詔并

新帝即位之紅詔到来、懷柔之厚キ、何茂從前ニ相替不申候処、數百年來之恩意ニ背キ、貢職を断テ候而ハ累世之高恩忘却信義を失ひ、人タリ国タルノ道相廢候筋合ニ茂成立可申、抑信義ハ守身保国之要道、万国之同く好む所ニ而海隅僻居之小邦、是を至宝ト取守居、増而方今御親政之世トナリ、各国御交際向等、信義を以被召行御事ニ而敝藩支那ト之統、信義不取失様寛洪之御処置被為在候ハ、世界之輿論ニ被為対候而茂御答弁之条理相立、乍恐御欠典ニハ相成申間敷哉、

皇国・支那ハ往古より父母之国ト奉仰、幾万世不相替忠誠を尽し度、挙藩一同本願罷在申事御座候間、彼是自私之苦情ニ而ハ無之次第、別段之御取訳を以、何卒支那江隔年進貢、代替之節慶賀且彼ノ封冊を茂請候儀、是迄之通被仰付被下度、偏ニ奉願候、

一 当藩之儀、右ニ申上候通、支那茂難差離次第二而、年号并儀礼等之儀、最初願通

皇国江奉対候而ハ皇曆を用、支那江対してハ彼曆を用、

年中之儀礼茂是迄通取行、新年・紀元節・天長節之御祝賀等ハ、御布告通遵奉仕候様被仰付被下度奉願候、

一 職制之件、元來国之政体ハ時勢之沿革ニ従ひ、国家を經營する之便宜ニ因而変革セサル可ラサルモノニシテ、永世旧制墨守スルコト得ヘキモノニアラスト御説明之趣致承知候、御達通職制ハ国家を經營する之便宜ニ叶候を至要之筈ニ而、当藩職制茂難基ひ国柄ニ応し人氣ニ随ひ相定、政情令民情貫徹いたし居申候、藩内之景況從前ト相替、当分之職制難措行稜茂候ハ、可相改儀御座候得共、右通治民之實際ニ致適宜居候を致改革候而ハ、国家經營之便宜を失、政務行届申間敷ト至極心配仕候、当藩之儀(前)之儀開闢以來分ト国立いたし、御内地旧藩トハ相替候次第、旁特別之御取訳を以何卒職制不相替、此中之通被仰付被下度奉願候、

右ハ国家重大之事件、夫々之条理有之、再往奉願候、委細摂政・三司官より茂申上候間、寛洪之御仁徳を以御採用所仰御座候也、

明治八年八月廿一日 琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

当藩清国江隔年之進貢、或ハ清帝即位之節慶賀使差遣、且清国より冊封受來候得共自今被差止、且藩内一般、

明治之年号を奉し年中之儀礼等、総而御布告之通遵行、且藩制改革被仰付候ト之件々、是迄通被仰付度、藩王并我々より茂奉願候処、御聽許不被成段、藩王江御説明之趣承知仕、諸官末々ニ至リ必至ト驚動仕、乍恐猶又我々より茂願之趣、左条ニ申上候、

一 当藩ノ如キ

皇国之版図タルモノヨシテ他邦ニ臣事タラシムルハ、御国權ノ立サル最モ大ナルモノニシテ、速ニ之ヲ改サレハ、世界之輿論ニ対シ御答弁之条理無之、政府之御欠典可被為成ト之御示諭候得共、当藩支那江之進貢ハ五百年以前より之事、諸国一統之明知する所ニ而、新規ニ他邦江随ひ而屬之体タルトハ条理相替可申、是迄

段々申上候通、当藩往古ハ万事不調法ニ為有之事候処、支那之教化ニ依リ為人之道を知リ、政体諸礼式相立、国家創立之恩義、矢張

皇国之御撫恤を蒙、一藩生養之道相遂候モ同前、且当藩

皇国御管轄之所、御征蕃之役ニ当リ、支那ト之御談判結局ニ於テモ、猶能明ナリト之段茂承知仕事候得共、其以後支那より当藩江何之沙汰茂無之、去秋渡海之進貢使、当三月上京、表文貢物無異儀受納、藩王并使者附々江賜物、其外会釈向等例格通被仰付、尤同治皇帝殂落ニ付白詔并新帝即位之紅詔、当夏帰帆之貢船より到来、懐柔之厚キ、何茂従前ニ相替不申候、然ニ数百年來之恩意ニ背キ、貢職を断チ信義を失候ハ、人タリ国タルノ道共ニ相廢、何之面目アリテ天地之間ニ相立可申哉、抑信義ハ守身保国之要道、万国之同く好色所ニ而信義を失ひ候ハ、共ニ惡色所ニ而海隅僻居之小邦、信義を以宝トシテ、古來無事平穩ニ罷在申候処、

支那江信義を失候ハ、諸国ニ輕慢セラレ、如何成後患可致出来哉茂難計、方今御親政ノ世トナリ、各国御交際向專信義を以被召行御事ニ而、敝藩支那ト之統、信義不取失様寛洪之御処置被為在候ハ、世界之輿論ニ被為対候而も御答弁之条理相立

天皇陛下之御仁徳益相顯申筋ニ而、乍恐御欠典ニハ相成申間敷哉、

皇国・支那ハ往古より父母之国ト奉仰、幾万世不相替忠誠を尽度、挙藩一同本願罷在申事御座候間、彼是自私之苦情ニ而ハ無之次第、別段之御取訳を以、何卒支那江隔年進貢、代替之節慶賀、且彼ノ封冊を茂受候儀、是迄通被仰付被下度、偏ニ奉願候、

一 当藩之儀、右申上候通、支那茂難差離次第ニ而年号并儀礼等之儀、最初願通

皇国江奉対候而ハ皇曆を用、支那江対シテハ彼ノ曆を用、年中之儀礼茂是迄通取行、新年・紀元節・天長節之御祝賀等ハ御布告通遵奉仕候様被仰付被下度奉願候、

一 職制之件、元來国之政体ハ時勢之沿革ニ従ひ、国家を

經營する之便宜ニ因而变革セサル可ラサルモノニシテ、永世旧制を墨守スルコト得ヘキモノニアラスト御説明之趣承知仕候、御達之通職制ハ国家を經營スルノ便宜ニ叶候を至要之筈ニ而、当藩職制茂基ひ国柄ニ応し人氣ニ随ひ、体裁相立、官吏之職掌、庶民之承順、其实際ニ致適宜、四民各分ニ安シ、業を励罷在申候、藩内之景況、従前ト相替、当分之職制難措行稜茂候ハ、可相改儀御座候得共、左様之儀ニ而茂無之事情を改革仕候而ハ政令民情貫徹不致、藩務行届申間敷ト至極心配得共、当藩之儀、開闢以來分ト国立いたし

皇国・支那江屬シ候而茂難有王位封冊被為在、御内地旧藩トハ相替候次第、旁特別之御取訳を以何卒職制不相替、此中之通被仰付被下度奉願候、

右之件々、藩王より再願申上候得共、巨細之成行、我々より茂申上^(筋カ)候越様被申付右通奉願候、誠ニ恐懼至

極奉存候得共、国家重大之事件現実難措行条理有之、

聊以冗議贅論を主張シ候筋ニ而ハ無御座候間、何卒願

意御採用被下度、拳藩一同偏ニ奉仰候、以上、

明治八年八月廿一日

富川親方

池城親方

浦添親方

伊江王子

内務大丞松田道之殿

可及御談判儀有之、明一日午前九時、拙者共其城中へ罷

越候ニ付、今帰仁王子摂政・三司官及ヒ物奉行等不残、

其他今般事件之議ニ関与イタシ候者ハ、一同参集致シ置

有之度、若シ病氣之人員有之共、可成勉メテ出席候様御

申付可有之、且又貴下御病氣之儀ハ兼テ承知罷在候得共、

可成ハ勉メテ枕ヲ離レ、病ヲ扶テ御出座有之度、此段可

及御照会候也、

明治八年八月三十一日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

追テ明日ハ直ニ城中ニ向ケ罷出、客館へハ立寄不申候、

且又送迎之式、警固之式等ハ勿論、城中之御取構ハ一切

無之様御心得有之度、尤明日罷出候ハ拙者及ヒ内務六等

出任伊地知貞馨并ニ内務八等出仕中田鷗隣・内務権大録

種子島時恕等ニ有之候、此段為念添テ申進候也、

今般御達書ノ事ニ付再度ノ応接、公席ヲ開クノ前、貴官

等ト謀リ一ノ便方ニ依テ開キタル討論、内席ニ於テ彼是

互ニ論究セリト雖トモ、随論随答事端百出、遂ニ倫理交

錯ヲ免カレス、故ニ猶ホ貴官等ノ口演書ノ箇条ニ就キ、

更ニ対弁書ヲ以テ左ニ説明ス、

(朱) 当藩ノ如キ我カ国ノ版図タルモノヲシテ他邦ニ臣事セシメ、

西属ノ体タラシムルハ国權ノ立サル最モ大ナルモノニシテ、

速カニ之ヲ改メサレハ、世界ノ輿論ニ対シ御答弁ノ条理ナシ、

是独リ我カ政府ノ欠典ノミナラス、随テ当藩ノ存亡ニ関ス、

戒メサル可ケンヤ、是今般御達書アル所以ノ一大眼目ナリト

ノ件、当藩之儀、往古八万事不調法ニ為有之事候処、支那ノ屏藩ニ相成候付、官生差渡親切ニ教諭ヲ受、一統人倫之道ヲ知、猶又閩人三十六姓被給、諸規模相定、政体諸礼式等品能相成、誠ニ国家創立之恩義不軽事ニテ、支那へ進貢ノ儀、当藩之大義勿論思ユ不忘、職ヲ尽シ信義取守候儀、天下之至公ニテ、自私之苦情ニテハ無之事候得ハ、此処御洞察寛洪之御処置被為在候ハ、万国之輿論ニ対シ候テモ御答弁之条理相立、乍恐御欠典ニハ相成間敷哉ト奉存候、支那断チ絶候テハ累世之厚恩忘却迄ニテ無之信義ヲ失、人タリ国タルノ道共ニ相廢、天地之間ニ可相立理ハ有之間敷哉、尤支那トノ統、數百年以前ヨリノ段ハ諸外国一統之知ル所ニテ、新規ニ他邦へ兩屬之体タルトハ義情相替可申、且又当藩兩屬之所ハ各国へ其隠レ無之、御兩國之御威權ニヨリ、古來無事ニ有之事候得ハ、当分通御兩國之御保護ヲ蒙候ハ、当藩存亡ニ関スル念遣ハ有之間敷ト奉存候事、」

此件、其教授ヲ受ケテ、当国百事ノ進歩シタルハ固ヨリ恩義ナシトセス、抑モ今般ノ御達書ハ其恩義ヲ忘却シテ

信義ヲ失フヘシトノ主意ニアラス、今我カ政府ニ於テハ当藩ノ清国ニ対スル信義ナルモノニ比スレハ、猶ホ幾層重大ナル条理ノ動カス可ラス、換ユ可ラサルモノアツテ、義以テ当藩ヲシテ清国ニ臣事隸屬セシムルコトヲ得サルノ主意ナリ、故ニ当藩ニ於テ徒ラニ其恩義ヲ忘却スルニアラス、政府ノ命令ニ随テ其大義名分ニ就クモノナリ、豈ニ当藩ノ所謂人タリ国タルノ道ヲ廢シテ、天地ノ間ニ立ツコトヲ得サルノ理アラランヤ、若シ当藩ヲシテ、清国ニ臣事隸屬セシムルトキハ、世界ノ輿論ニ対シテ答弁ノ条理ナキ所以ノモノハ他ナシ、凡ソ世界ノ中、林列シテ国ヲ成スニ、其独立シテ万国ト対峙シ、内治自主ノ權、物件上ノ權、万国平行人權等ノ諸權ヲ十分有スルモノアリ、他ノ一国ニ隸屬シテ此諸權ヲ十分有スルコトヲ得サルモノアリ、此諸權ヲ有スルト有セサルトハ其国ヲ成スト成サルトノ大義ニ關係シ、万国皆ナ争テ自ラ講究論議スル所ナリ、今我カ国ハ、則チ独立対峙スルモノニシテ、此諸權ヲ十分有スルモノナリ、然ルニ版図内ノ当藩ヲシ

テ、清国ニ臣事隸屬セシムルトキハ、此諸權中、内治自主ノ權、物件上ノ權ニ於テ十分有スルコトヲ得サルノミナラス、實際上ニ於テモ万国公法ニ照スコトヲ得サルノ障礙事由ヲ来スコトナキヲ保タス、茲ニ其一二三事ヲ挙ケン、譬ヘハ若シ他ノ一國ト清國ト戰爭ヲ結フニ、此琉球ヲ清國ノ隸屬ナリト視ルトキハ、之ヲ掠奪抛有シ、或ハ其軍艦、琉球ノ船舶ニ大洋中ニ会ヘハ之ヲ拿捕スル等ノ事ナキヲ保タス、此時ニ當テハ我政府ハ局外中立ニ在リト雖トモ、彼ノ一國ニ對シテ紛論ヲ起サ、ルヲ得ス、乃チ清國ト他ノ一國トノ争端、遂ニ局外中立タル我カ政府ニ波及シ、結局我カ國ノ安危ニ関スル一大重事ヲ釀成スルニ至ラントス、又ニツニハ既ニ去年我カ政府ト清國トノ紛論ノ如キ、若シ一旦事破レ戦ヲ結フトキハ、我カ政府ニ於テハ此琉球人民ヲシテ、清國トノ往来ヲ絶タシメサル可ラス、清國ニ於テハ我カ國トノ往来ヲ絶タシメサル可ラス、於是當藩処分上ニ就テ頗ル障礙ヲ生ス、又三ニハ近頃我カ政府ト清國ト新タニ條約ヲ結ヒタレハ、其

實際上ニ於テハ他ノ條約、各國ト一ツモ異ナルコトナクシテ、一二皆テ万国公法ニ依ラサル可ラス、然ルニ我カ版図内ノ地ヲシテ、又清國ニ臣事隸屬セシムルトキハ、其實際上内外ノ權義ヲ混乱シ、彼是國權ノ立タサルヨリシテ、復不測ノ紛論ヲ生スルニ至ラン、如此モノハ皆ナ平時而屬曖昧ノ体タル弊害、時變ニ因テ發起スルモノナリ、此他諸般ノ上ニ於テ我カ政府ノ權利、即チ國ノ權利ヲ損害スルコト不少ハ、前段ニ縷陳スル如シ、是則チ世界ノ輿論ニ對シテ答弁ノ條理ナキ所以ニシテ、今當藩ヲシテ清國ニ臣事隸屬スルコトヲ絶タシメルハ、重大ナル條理ノ動カス可ラス、換ユ可ラサルモノアルヲ以テスル所以ナリ、然ルニ往時ハ政權幕府ニ在テ、他邦ノ交際モ亦未タ密ナラサルヲ以テ、其條理ヲ究メスシテ、慢然過キ来レリト雖トモ、時勢ニ依リ幸ニシテ大障礙ニ会セサルナリ、今ヤ皇政挽回、万機親制ノ世トナリ、万国ノ交際モ益密ナルニ當テハ、内外ノ事務皆テ世界ノ條理、万国ノ公法等ニ照ラシテ施サ、ルヲ得ス、於是當藩ノ清國

二臣事隸屬スル其往昔ヨリ因襲スルモ、今新タニ為スモ均シク、是不条理ニシテ我カ国権ニ損害アリ、故ニ今其往昔ヨリ因襲スルノ故ヲ以テ、特別之ヲ許スコトヲ得サルナリ、夫レ政府ニ取テハ如此時勢、条理ノ宜シク然ラサル可ラサルモノアツテ、当藩ニ取テハ如此大義名分ノ宜シク従ハサル可ラサルモノアルモ、更ニ之ヲ問ハス、只彼清国教授ノ恩義ヲ主張スルハ、抑モ其事理ノ大小輕重ヲ誤認スルモノニアラスヤ、他邦ノ教授ヲ受ケ、以テ其国事ヲ進歩セシムルハ世界万国其例少シトセス、則チ我カ国ノ古、未タ開明ナラサルノ初メニ当リテモ、応神天皇ノ朝、百济国縫衣女ヲ貢シ、又王仁入朝シテ論語千字文ヲ献シ、又釀酒冶工ヲ貢ス、欽明天皇ノ朝、百济国仏像及ヒ仏經ヲ献シ、又五経醫諸博士及ヒ採薬師染工等ヲ貢ス、敏達天皇ノ朝、百济国仏經僧尼仏工ヲ献ス、崇峻天皇ノ朝、百济国仏舍利僧及ヒ諸工ヲ献ス、推古天皇ノ朝、高麗及ヒ百济ノ僧來テ、大ニ仏教ヲ弘ム、聖武天皇ノ朝、多治比広成・下道直備唐ヨリ還リ、孔子及ヒ

十哲像・唐礼大衍曆等ヲ献ス、嵯峨天皇ノ朝、朝会ノ礼・冠服ノ制ヲ定メ、咸唐制ニ準ス、近クハ欧洲諸国ト交際益密ナルヨリ、文学也、兵式也、技芸也、生徒ヲ遣リ教師ヲ招ヒテ、以テ彼ノ教導ヲ受ケ、駸々乎トシテ国事ノ進歩ヲ致セリ、故ニ其儒仏ニ從事スル者ハ清国ニ恩義アリ、文学也、兵式也、技芸也ニ從事スル者ハ欧洲諸国ニ恩義アリ、政府ハ則チ其各国ニ恩義アリ、是各其道ニ因テ恩義アルナリ、之ヲ若シ当藩所論ノ如ク、如何ナル大義名分アルトモ、此恩義ニ換ユ可ラストスルトキハ、我カ政府及ヒ人民ハ、本国ノ大義ニ際スト雖トモ、清国及ヒ欧洲諸国ニ対シテ敵抗ス可ラサルカ如シ、豈ニ此本国ニ対シ如此不義不道ナル政府アラシヤ、如此不忠不愛ナル人民アラシヤ、本国ノ大義ニ当テハ、政府也、人民也、全国力ヲ以テ其大義名分ノ在ル所ニ就テ、愛国ノ義務ヲ尽サ、ル可ラサルナリ、今当藩ノ我カ本国ニ於ケル正ニ此ニ際セリ、乞フ、大義ヲ謬ルナカレ、且試ニ当藩ノ為メニ謀ルニ、抑モ当藩ノ勢固ヨリ独立シテ国ヲ成ス

コトヲ得可ラス、又世界ノ形勢ニ依テ惟ミレハ、此両属ノ体ナルモノハ、假令政府之ヲ許ストモ久シク之ヲ維持スルノカタキハ自然ノ理ナリ、然レハ則チ何レカ一方ニ属シテ、人民永久安着ノ計ヲ為サ、ル可ラス、而シテ其所属ヲ撰フハ、則チ衣食也、住居也、商法也、交際也、闔藩依テ以テ成立安着スルニ便ナルモノニ着眼セサル可カラス、否ラスシテ、只王爵ヲ維持シ、旧格古例ヲ墨守スルニ便ナルモノニ着眼スルトキハ、即チ当藩王家ノ私ニシテ闔藩人民ノ為メニ謀ルモノニアラス、其人民ニ深切ナラサル莫大、於此然レハ闔藩依テ以テ成立安着スルニ便ナルモノヲ撰フトキハ、則チ我カ日本ニ属セサルヲ得ス、況ヤ、古来我カ国ノ版図ニシテ、今所属ヲ此一方ニ定ムルハ、固ヨリ大義名分ノ在ルアルヲヤ、其闔藩人民ノ為メ、得失利害ノ如何ナル、亦宜シク大ニ顧ルヘキヲ要ス、

(米) 琉球ハ地理・人種・風俗・言語等ノ諸件ニ就テ論スルトモ、

固ヨリ

皇国之版図ニシテ、所謂地理上ノ管轄ナリトノ件、当藩ハ皇国・支那之中間ニ当リ、地理之氣脈御両国へ連続致シ、人種・風俗モ御両国へ似寄、言語ハ常式交通繁リ有之候故

皇国ニ似寄候、是等ヲ以、一定何方ニ因リ候トハ可難申哉ト奉存候事、

此件、琉球国ハ地理ノ氣脈、日清両国ニ連続スルトノ論、何ノ所見ニ因ルヤ、若シ所論ノ如クナレハ、日清ハ則チ地脈ヲ同フスル国ト言ハサルヲ得ス、豈ニ如此妄説アラシヤ、抑モ我カ国ト清国ト地脈ノ断絶シタルハ判然明白ニシテ、我国ハ地勢東北ヨリ西南ニ走り、其地尾九州諸山ノ地脈蜿蜒起伏、遂ニ八重山島ニ至テ尽キ、其形宛モ蜻蜓ノ如クニシテ琉球諸島ハ其尾ニ当レリ、是琉球ハ我カ国ノ地脈ナリト謂フ所以ナリ、又人種・風俗日清両国ニ類シ、言語ハ交通ノ繁キヲ以テ我カ国ニ近ク、故ニ何レノ国ニ因ルト定メ難シトノ論、是只一樣ノ見ナリ、此琉球ノ人種タル、骨格体容我カ薩摩人種ナリ、其風俗ハ我国ノ風俗最モ多ク、就中我カ古代ノ風趣アリ、然レト

モ世ノ変遷ニ從ヒ、他ノ交際ニ依テ自然変移スルモノアレハ、亦日清兩國ノ風儀ヲ混同スルモノアリ、其言語ニ於ケル單語ニ至テハ、亦交際ニ因テ自然變移スルモノアリト雖モ、我カ古言・鎌倉言・薩摩言等多クシテ僅々支那言ヲ交ユ、元來此琉球人民ハ專ラ薩ト支那トノ間ニ往來シテ、常ニ内地ノ諸方ニ來ラス、就中久米村ニ於テハ現ニ明ノ人種移住シタルモノナリ、然ルニ我カ國言多クノミナラス其古言ノ存スルハ、則チ我カ國ノ人種タル一証ナリ、語調・語音・語章ニ至テハ交際ニ依テ自然變移スルモノニアラス、就中語調ニ至テハ學フト雖トモ變移スルコト得ス、而シテ此琉球人民ノ語調ヲ聴クニ、純然我カ國ノ語調ニシテ語音ハ薩摩ノ語音ナリ、語章ニ至テハ名調ヲ上ニ用ヒ、動詞ヲ下ニ用ユル如キ、最モ著明ナル我カ國語ノ証アリ、如此歴々タル因証アリ、故ニ地理・人種・風俗・言語等ニ就テ論スルモ我カ國ノ版圖ナリト謂フ所以ナリ、

(朱) 支那政府ノ保護ヲ受ケス、所謂政令之管轄ニ似テ実ナキモノ

トノ件、當藩弘化ヨリ文久ノ比迄外國船繁々渡來、和好交易杯小邦難應儀共申立、仏暎垂三國之人員代リノ逼留、藩中至極及心配居候処支那へ願越、各渡合之長官へ及示論引取、無事平穩ニ為相成事ニテ、右様差當次第保護モ有之候事、

此件、仏英亜等來琉スルヤ、皆ナ清國ノ示論ニ依テ退去セリトノ事、今始メテ聞ク所ニシテ大ニ疑ヒナキ能ハサル所ナリ、何トナレハ果シテ然ラハ彼ノ三國曾テ當藩ト結ヒタル條約ヲ、去ル五年我カ政府ト更ニ結ンテ清國ト結ハサルハ何ソヤ、則チ彼三國ニ於テハ此事更ニ清國ニ関セサルモノト為スナリ、且初メ三國來琉ノ時ニ當テハ、鹿兒島藩ヨリ若干ノ兵員ヲ送テ變ニ備ヘタルハ内外皆ナ知ル所ナリ、其保護ノ実跡、彼是日ヲ同フシテ論ス可カラス、

(朱) 清國ニ於テ、琉球ハ已レノ管轄ナリト言フモ、独リ當藩ニ對

シテ言フコトヲ得テ、我カ政府ニ對スルハ勿論、世界ニ向テ能ク之ヲ言フコトヲ得ス、何トナレハ中古明主ノ招諭スルヤ、明ニ我カ管轄ヲ絶タシメス、又明ニ我ノ許諾ヲ得ス、只琉球

国主ノ濫リニ応論スルヲ幸トシテ、之レト私義ヲ結ヒタルモノ、如クシテ、世界ノ条理ニ照ラシテ更ニ名分ノ取ルヘキナキトノ件、当藩進貢之規則ハ明清會典ニ記載シ、諸國一統明知致シ候故、前条通逗留之由英亜人共、支那之示論ニ依リ引取相成、且当藩往昔ハ

皇國・支那・朝鮮・暹羅・瓜哇國杯交通迄ニテ、何方ヘモ服從無之候処、中古明主之招諭ニ依テ初テ進貢致シタル次第ニテ、其時支那ヨリ

皇國ノ管轄ヲ絶タシメ

皇國之許諾ヲ得ヘク条理無之、濫リニ応論スルヲ幸ヒトシテ、私義ヲ結ヒタル儀ニテハ無之、是以名分ノ取ルヘキナキ方ニハ相見ヘ不申儀ト奉存候事、

此件、我カ政府ノ所見ハ大ニ之ニ反セリ、抑モ此琉球國ハ、我カ上古神人ノ開キタル所ニシテ、天孫氏ハ則チ其裔ナルコト古史ニ審カナリ、雖然凡ソ世界ノ中、草昧ノ古ニ当テハ、事皆ナ神義ニ属シ人智事理ヲ以テ推論ス可ラサルモノアリ、仮令之ヲ論スルモ今世人間行事上ニ必

要ナラス、只各國其世譜ニ備フルノミ、故ニ我カ國ハ神武帝以來ヲ以テ論シ、清國ハ伏羲以來ヲ以テ論シ、歐米諸國ハ耶穌以來ヲ以テ論スルヲ常トス、故ニ今此琉球國ノ事ニ於ケル、徒ラニ上古ニ溯テ論スルハ惟ニ益ナキノミナラス、講史學者ノ所為ニ亘リ、官吏談判上ノ要務ニ

アラサルヘシ、依テ上古ノ事ハ暫ク措キ、中古以來ニ就テ論スレハ推古天皇ノ朝、南洋諸島ノ人始メテ來朝シ、孝謙天皇ノ朝ニ至ル迄朝貢年々絶ヘス、屢祿位ヲ賜フ、

永万元年ニ至リ、源為朝伊豆ノ大島ヨリ航シテ來リ、大里案司ノ妹ヲ娶リ尊敦ヲ生ム、是則チ舜天王ニシテ今王則チ此末裔ナリ、文治三年ニ至リ島津忠久薩隅日三州ノ

守護兼南海十二島平家物語ニ沖繩ヲ十二島ノ内ニ列ネタリノ地頭ニ補セラル、文

中元年ニ至リ、明主朱元章行人揚載ヲ遣ハシテ招諭ス、當時ノ國主察度之ニ応シ、弟泰期ヲ明國ニ朝セシム、然レトモ我國ニ對スルハ如故、嘉吉元年ニ至リ、足利義教島津忠國ノ反人ヲ討スル功ヲ賞シテ琉球國ヲ加封ス、宝徳元年ニ至リ、尚福金王使ヲ発シテ、足利義政ニ京師ニ

朝シ方物ヲ納ム、天正十七年ニ至リ、尚寧王天龍寺僧桃菴及ヒ安谷親雲上ヲ遣ハシ、豊臣秀吉ニ京師ノ聚樂第二朝シ、方物ヲ納メ、征韓ノ役七年ノ間、薩藩ニ転付シテ兵賦ヲ肥前名古屋^(長門)ニ送ル、慶長十四年ニ至リ島津家久征討ノ末、尚寧王・三司官等各誓書三章ヲ贈リ、全ク薩藩ノ隸屬トナツテ租税ヲ納メ、此地ニ薩官ヲ置キ、与論以北ノ五島ヲ割テ薩ノ直管トナス、以来国主ノ襲封、徳川氏ノ継統ノ時毎ニ島津氏琉球ノ正副使ヲ率ヒ幕府ニ朝ス、慶長十六年ニ至リ、琉球全島ノ地ヲ検ス、而シテ飢饉ニ際スレハ、金穀ヲ送テ之ヲ救ヒ、警事アレハ兵員ヲ送テ變ニ備フル等ノ事ヲ行フ、近ク皇政維新ノ後ニ至テハ明治四年鹿児島ノ管轄トナシ、同五年伊江王子・宜野灣親方・喜屋武親雲上等上京シテ維新ノ慶事ヲ祝ス、此時ニ当リ当国ヲ藩トナシ、主ヲ藩王ニ被任、一等ノ官・華族ノ列ニ被加、藩内融通ノ為メ金三万円ヲ賜ヒ、此地ニ官ヲ置キ、同年政府直管トナス、同七年征蕃ノ役ヲ起シ、遂ニ清国政府ヨリ償フ所ノ金額ヲ以テ当藩下会災人民ノ

遺族ヲ賑ハシ、又蒸氣艦ヲ賜フ、其他藩債消却等ノ部分ニ就テ、亦多少ノ恩典アリ、加之元来当国ハ地理也、人種也、風俗也、言語也、神祭也、皆ナ我カ国ノ部分ニシテ、且我カ国ノ貨幣ヲ用ヒ、我カ年号ヲ半用シ、仏寺創立ノ基源ノ如キモ内地ヨリ来レリ、夫レ古ヨリ我カ国ノ版図ニシテ、政府保護ノ事務ヲ行フ等ノ事歴率ネ如此、故ニ之ヲ我カ天然ノ隸屬ナリト謂フ、由此觀之、明国ノ招諭スル、遙カニ我レノ後ニアツテ、而シテ只冊封ヲ行ヒ其年号ヲ半用セシムルノミ、其保護事務ニ至テハ我カ政府ノ保護スルモノト、豈ニ日ヲ同フシテ論ス可ケンヤ、或ハ絶テナシト謂フトモ可ナリ、故ニ私義ヲ結ヒタルモノ、如シト謂ヒ、且政令ノ隸屬ニ似テ其実ナキモノナリト謂フ所以ナリ、若シ又仮リニ、我ヨリ前ニ於テ招諭隸屬セシムルモノトセン乎、然レハ慶長年間島津氏征討シテ遂ニ国主ヲ擒スル等ノ大變事アルニ、明国一兵ヲ出シテ之ヲ救ハス、加之与論以北ノ五島ヲ割領スルニ措テ之ヲ問ハス、宛モ秦人ノ越人ニ於ケルカ如キハ何ソヤ、当

藩ノ人之ヲ庇フテ言ヘラク此事タル、決シテ明国ノ欠典ニアラス、当国ニ於テ此変事ヲ告ケサレハナリト、此言ヤ、正理ニ於テ決シテ取ラサル所ナリ、何トナレハ仮令当国ハ告ケサルモ、明清ニ在テハ已レノ管地ヲシテ他邦ニ奪ハレ、凡ソ三百余年之ヲ知ラスト言フコトヲ得ンヤ、若シ真ニ知ラスシテ問ハサルモ知テ問ハサルモ其保護ノ義務ヲ尽サ、ル、既ニ三百余年ナリ、之ヲ豈ニ世界ニ対シ、靦然トシテ琉球ハ已レノ管轄ナリト言フコトヲ得可ケンヤ、又彼ノ台湾ノ事ニ於ケル、何ソ自ラ牡丹社ヲ処置シテ当藩下人民ヲ保護セサルヤ、何ソ当藩下会災人民ニ与フル金額ヲ我カ政府ニ向テ払ハスシテ、自ラ直ニ当藩ニ授ケサルヤ、何ソ我カ征蕃役ヲ義拳ト視認メ、我カ政府ニ向テ若干ノ償金ヲ払ヒタルヤ、是皆テ琉球ハ清国ノ版図ナリト言フコトヲ得サル所以ノ証ナリ、然リ而シテ今此等ノ事ヲ論スル、既ニ冗言ニ属ス、何トナレハ我カ征蕃役ノ始末ニ於テ、我カ政府ト清国政府トノ間ニ在テハ明カニ決着スルモノアレハナリ、

(米)

征台ニ付、会災人民ノ遺族ニ与フル金額ヲ我カ政府ニ向テ払ヒタルコト、若シ清国ニ於テ琉球ハ必ス已レノ管轄ナリトシテ、世界ニ向テ公唱スルコトヲ得ハ、何ソ自ラ牡丹社ヲ処置シテ、当藩下人民ヲ保護セサルヤトノ件、台湾御征伐ハ

皇国ヨリ御処分相成候故、撫恤銀モ右之引結ニテ

皇国へ御引渡相成爲申ニテ可有之、且逢殺害候時、生殘シモノトモ、支那ヨリ手厚保護有之候上、当藩へ到来之咨文ニ台湾府へ形行相糾、強暴ヲ傲、懷柔ヲ示スト之趣相見得、其上

台湾御征伐以後、支那ヨリ当藩へ向、何之沙汰モ無之、進貢使上京表文貢物等受納、藩王并使者附之へ賜物、其外会釈向等、先例通親切ニ被申附、且皇帝祖落ニ付白詔、新帝即位之紅詔等到来、何篇先規不相替、彼是以清国之当藩ニ於ケル情義名分、廢絶致シ候方ニ相見得不申候事、

此件、清国ヨリ当藩下会災人民ニ与フル金額ヲ我カ政府ニ向テ払ヒタルハ、我カ征藩ノ引結ニテ然ルトノ言、仮リニ当藩ノ常言ニ依テ考フレハ、柔盾^(米)ノ甚シキモノト謂フヘシ、何トナレハ当藩ノ我カ政府ニ属セシコトハ、從

来清国ニ対シテ秘セリト言ヘリ、然レハ当藩ノ我カ政府ニ於ケル清国ヨリ視ルトキハ、他ノ管外ノ一國ノ如シ、其一国ノ為メニ征蕃ノ役ヲ起サハ、清国之ヲ非トシテ問ハサル可ラス、何ノ引結アツテ償金ヲ払フノ理アラシヤ、乞フ枉テ辞ヲ作ルナカレ、此事ヤ専ラ管内人民ヲ保護スルノ大義ニ係ルヲ以テ、清国ヨリ義拳ト視認メ、乃チ償金ヲ払ヒタルナリ、又清国ヨリ当藩ニ対シテ、自ラ藩地ノ処分ヲ為セリト告ゲシハ甚タ奇怪ノ言ニシテ、或ハ清國ノ虚言ナラント疑ハサルヲ得ス、何トナレハ若シ既ニ自ラ彼ノ藩地ヲ処分スル以上ハ、我カ征蕃役ヲ非トシテ之ヲ問ハサ^(ル脱之)可ラス、然ルヲ義拳トシテ償金ヲ払フハ何ソヤ、是則チ決シテ自ラ処分セサルノ証ナリ、乞フ、去年来此事ニ属スル履歴顛末ニ就テ少シク顧思スヘシ、又征蕃以後、清国ヨリ当藩ニ対シ、更ニ一ノ告知ナクシテ、進貢依旧受納ノ式ヲ行フトノ事、当藩ノ事タル、征蕃ノ始末ニ於テ、既ニ日清西政府ノ間ニ決着スル以上ハ事皆ナ我カ政府ニ在リ、清国ヨリ故ラニ、当藩ニ対シテ告知

スヘキノ理ナク、其進貢受納ハ、元是去年ノ貢物ニ属スルヲ以テ、仮令本年ニ越テ收納スルトモ、固ヨリ受納スヘキ理アツテ、両政府決着スル所ノ事義ニ於テ更ニ妨ケナシ、其本年以後ニ属スルモノハ決シテ行フ可ラサルナリ、又白詔紅詔到来ノ事ニ至テハ、甚タ不条理ニシテ、去年征蕃始末ニ付テ、我カ政府ニ対スルモノト大ニ齟齬逕廷セリ、清国ノ所為甚タ怪ム可キナリ、我カ政府若シ之ヲ聞ケハ、蓋シ相当ノ処置ヲ行フヘシ、乞フ、其白詔ト紅詔トハ写シテ之ヲ送致スヘシ、夫レ、前陳ノ条理ニ依レバ、清国ノ当藩ニ於ケル情義名分既ニ絶セリ、

^(米)藩王ニ於テハ其任ノ重キ、我カ藩屏ノ職分、其品位ノ貴キ一^(米)等ノ官華族ノ列ニ在リ、藩内ニ於テハ其利用厚生ノ道ヲ達スル為メ、船舶ノ往来、人民ノ交際、万貨ノ需用等、皆ナ其自主ノ權利ニ因テ、随意ニ之ヲ行フコトヲ得、加之内地トノ往来、前途益盛ナルモノアリ、闔藩因テ以成立安着スル所以ノモノニ於テ、毫モ欠耗スル所ヲ見ス、苦情果シテ何ノ苦情ナ^(米)ル乎トノ件、成程御取扱向御手厚被仰付候段ハ難有奉存候得

共、支那断ち絶候上ハ、彼レニ向利用厚生之道ヲ達スル為、
船舶ノ往来、人民之交際、万貨ノ需用等、何之面目有テ可被
行哉、此儀何共不相調事御座候、当藩支那ト之統ハ、大義之
掛ル所、夫故幾重ニモ願立候次第ニ而、自私之苦情ヲ以旧格
ニ因襲致シ候筋ニテハ毛頭無御座候事、

此件、清国ニ臣事隸属スルコトヲ絶ツトキハ、船舶ノ往
来、人民ノ交際、万貨ノ需用等、何ノ面目アツテ之行フ
コトヲ得ンヤトノ言甚タ解セサルナリ、抑モ其臣事隸属
スルコトヲ絶ツハ、自ラ猥リニ信義ヲ棄テ、之ヲ絶ツニ
アラス、彼我両政府決着スル所ノ主意ニ依リ、我カ政府
即チ本属政府ノ命令ニ従ヒ、即チ大義名分ニ就テ之ヲ絶
ツナリ、其船舶ノ往来、人民ノ交際、万貨ノ需用ハ自主
ノ權利ニ依リ、^(筋カ)万貨ノ需用ハ自主ノ權利ニ依リ交際ノ、
交際ノ理ニ従ヒ、即チ万国公法ノ准スル所ニ就テ之ヲ行
フナリ、何之面目ヲ失スルコトカ之レ有ンヤ、何ノ行フ
コトヲ得サルコトカ之レ有ンヤ、如此条理アルハ更ニ之
ヲ問ハス、只ニ面目ヲ失シ行フコトヲ得スト言フ、是即

チ自私ノ苦情ナリ、乞フ、宜シク思フヘシ、
^(米)我カ政府ニ属スルコトヲ清国ニ向テ公告セン等之言ニ至テハ、
最モ大ナル謬リニシテ、敬ヲ我カ政府ニ失スルノ甚シキモノ
ナリトノ件、

皇国御管轄之所ハ鹿児島県管轄之砌ヨリ、支那ハ致隠密来事
候処、當時御和誼之砌、従前通ニテハ不相濟、

皇国ヨリハ既ニ表通り相成居候得共、当藩ヨリハ于今包ミ居
候ニ付、此節支那ヘモ申披、御両国之御奉公明瞭ニ致精勤度
トノ所存ヲ以、右通為申上事候間、此段ハ御聞分被下度事、

此件、此書中ノ弁解ニ依レハ、良ヤ其旨趣ヲ領解セリ、
故ニ敢テ敬ヲ政府ニ失スルヲ以テ名状セサルナリ、雖然
抑モ今般ノ命令ニ於ケル、我カ政府ノ管轄タルコトヲ清
国ニ秘スレハ、之ニ臣事隸属スルコトヲ絶タシメ、之ヲ
公ケニスレハ之ヲ許スノ主意ニアラス、如何ナル方法ヲ
行フトモ、到底条理ニ適セサレハ、之ヲ許<sup>(次項、前出資料ニ
ヨリ補充ス)</sup>「サザルノ主
意ナリ」

^(米)政府ニ於テ、当藩之国体政体永久変易セサル等ノ命令、曾テ

無キ所ナリ、只去六年ヲ以テ外務卿副島種臣ノ指揮ニ依リ、外務官員ヨリ当藩官員へ贈リタル書中之意ハ、則チ藩タルノ制ヲ容易ニ變更セサルノ意ナリトノ件、当藩国体政体永久不相替樣被仰付、其意味御書付ヲ以御渡被仰付度、去六年副島種臣殿へ奉願、右御書付御渡之時、国体政体永久不相替トノ意味、不相分候付外務省官員衆へ相伺候処、其意味ハ相含ミ候段承知仕、書取ヲ以御引合之上、其意味書状ヲ以御札等申上御受納相成居候、適當藩御管理之本省其總裁之御指揮ニ依リ御達之御趣意ハ、則チ政府之命令ニテ、藩内一同難有奉感戴候ヲ、今更右通之御演説込入仕合御座候間、兼テ外務省ヨリ承知仕居候通被仰付度事、」

此件、假令外務官員ニ於テ国体政体永久変革ノ旨趣、書中ニ含蓄セル旨ヲ述ヘタル乎ト雖トモ、見ニ其当藩ニ証拠トシテ所持セル書中ニ其明文ナキ以上ハ、拙者ニ於テハ之ヲ取用スルコトヲ得ス、故ニ去ル六年副島外務卿ヨリ達セシ主意ハ、即チ当藩ニ証拠トシテ所持セル書面ノ主意ニシテ国体政体永久変革ナキノ主意ニアラス、為藩

ノ制ヲ變更セサルノ主意ナリト判定スルナリ、且元來政体等ノ如キハ時勢ノ沿革ニ隨ヒ、政事上ノ便宜ニ依リ、宜シク然ラサル可ラサルノ道理ヲ以變革スルモノナレハ、天皇陛下ヨリ有司人民ニ至ル迄、其一己ノ私情ヲ以テ其宜シク然ラサル可ラサルモノヲ拒ムコトヲ得サル儀ハ、過日以來縷々説明スル所ナリ、故ニ外務卿ハ固ヨリ太政大臣ト雖トモ其變革セサルコトヲ保証スルコトヲ得ス、又保証スヘキモノニアラサルハ論ヲ待タスシテ明カナリ、雖然其時ニ當リ、当藩ヨリ進呈スル所ノ請書ニ国体政体永久変革ナキ旨ヲ拝承セシトノ明文アルヲ、外務省之ヲ領受セシ以上ハ當藩ニ於テハ、即チ国体政体變革ナキコトヲ保証セルモノト視做ストノ言ニ於テハ一理ナシトセス、故ニ拙者ハ漫ニ之ヲ抑圧セス、因テ熟思スルニ當藩ノ此事ニ於ケル只ニ義アリ、彼ノ外務省ニ於テ請書ヲ領受セシ以上ハ、即チ變革ナキヲ保証セリト視做スヲ以テ、政府ニ向テ嚮ニ外務省ノ保証シタルヲ踏マンコトヲ要シテ、今般藩制改革ノ命令ハ遵奉セサル乎、是一ナリ、時

勢ノ沿革、政事上ノ便宜ニ於テ、宜シク然ラサル可ラサルノ道理ヲ弁知シテ、今般ノ命令ハ速ニ遵奉シ、而シテ彼ノ外務省容易ナル処置ヲ以テ、遂ニ当藩ニ対シテ不信ナルコトヲ駁シテ、其処分ヲ請フ乎、是ニナリ、是ニツノ者何レカ之ヲ取ル、惟其意トスル所ヲ行フヘキノミ、
冊子原寸 縦一九・五釐 横二七・五釐 四六枚

二六六九ノ二

〔（表紙）〕
「朝官衆往反之書類 下」

〔（朱）〕
今般ノ御達書ハ、固ヨリ藩タルノ制ヲ變革スルノ主意ニアラス、藩制ニ属シタル職制ヲ施行スルノ主意ニシテ、此ノ藩制アレハ必ス此ノ職制ナカル可ラストノ件、職制ハ第一藩治之便利ヲ計リ相立候ヲ至要ノ管ニテ、当藩是迄之職制難措行稜モ候ハ、改革可有之候得共、基ヒ固柄ニ応シ、民心ニ随ヒ、体裁相立、四民各分ニ安シ、業ヲ励シ、治民ノ實際ニ致適宜候処、改革致候テハ国家経営ノ便宜ヲ失ヒ政務届兼可申、先

達テ申上候通、往古以来分ト国立致シ、王号等有之、御内地旧藩トモ相替候次第、御取訳ヲ以是迄通被仰付度奉存候事、此件、当藩ノ体タル、固ヨリ内地ノ旧藩ト異ナルコトナシ、当藩ハ王ト称シ旧藩ハ侯ト称スルモ、均シク皆ナ君主ノ称ニシテ、則チ管民ニ君臨シテ統撫セシメ、藩屏ノ任ニ充ツルナリ、是亦当時一種ノ制ナリ、雖然何レノ国タリトモ其一君主ノ外君主ノ体タルモノアル可ラス、故ニ旧藩諸侯ニ於テハ、此大義名分ヲ弁知シ、土地人民ヲ奉還シテ藩知事ト為リ、真ニ其人臣ノ職分ヲ尽シタルナリ、今当藩ハ王称アリト雖トモ独立国君ニ非ス、又附庸国君ニアラス、則チ我カ藩屏ノ任地方ノ官ナリ、然レハ藩治ハ藩王自ラ担任スヘク、他ノ官吏ハ之ニ参シ、之ニ属シテ従事スヘキナリ、今当藩ノ制ヲ視ルニ、治權皆ナ撰政・三司官ニ帰シテ藩王ニ帰セサルノ体面ヲナシ、就中撰政ノ名ニ至テハ、即チ藩王ノ治權ヲ専有セリ、政府豈ニ此藩治ヲ王ニ撰ラシメスシテ他ノ一官吏ニ撰ラシム可ケンヤ、必ス任ヲ藩王ニ責メ、補助ヲ参官ニ責メ、以

テ治功ヲ奏セシメサル可ラス、故ニ今般改革ノ職制ハ、其藩屏ノ任地方ノ官タル職務ニ就テ相当ナルモノニシテ、

此藩制アレハ必ス此職制ナカル可ラサルナリ、且此職制ヲ施行スルニ於テ、更ニ当藩ノ事実ニ障碍アルヲ視ス、

何トナルハ只各官ノ職分ヲ改メ、以テ治權職分專ラ藩王

ニ歸スルノ体面ヲ為スノミニシテ、其治実ニ至テ八年号

及ヒ頒曆ヲ奉シ、刑法ヲ奉シ、貨幣ヲ用ヨル等ノ大制ヲ

除クノ外ハ、皆当藩ノ適宜ニ委任スルコト如故ナレハナ

リ、然ルニ猶ホ藩治ニ障碍アルヲ唱ヘテ之ヲ拒ムハ他ナ

シ、彼ノ旧格古例ヲ墨守シ、新規ニ就クヲ欲セサル姑息

ヨリ發スルモノト謂ハサルヲ得ス、乞フ、少シク顧思ス

ヘシ、

右ハ、^(寛カ)畢意席上討論ノ大略ヲ記スルノミ、尚ホ十四日本

月八日兩度ヲ以テ、藩王ニ所贈ノ説明書ト、拙者着琉以

來貴官等ニ対シ、屢口論セシ旨トヲ參觀交考シテ、其終

始ノ論序ヲ審カニスヘキヲ要ス、而シテ此内席ノ討論ハ、

互ニ公談中ノ懇論ノ部分ニ屬スルモノト視做シ、他日公

席応接ノ部分ト權義ヲ異ニスルモノタルコトハ、曾テ互ニ約諾セシ如キナリ、

明治八年九月一日

内務大丞松田道之

伊江王子殿

浦添親方殿

池城親方殿

富川親方殿

与那原親方殿

幸地親方殿

喜屋武親雲上殿

内間親雲上殿

親里親雲上殿

拙者今日俄ニ此所ニ臨ムハ他ナシ、今般御達書之条件ニ

付拙者着琉以來、實下及ヒ摂政以下ノ諸員ニ対シ、弁論

説明數回ニ及フト雖トモ其条理ヲ領解セラレスシテ、毎

ニ不当ナル答弁ノミ、遂ニ昨三十一日、答弁ノ旨趣ヲ以

テ藩議ノ尽キタル所ト陳述セラレタルニ付、拙者其箇条ヲ視レハ毎条猶不条理ナリ、依テ其旨趣ヲ以テノ歎願ハ聽許セス、乃チ明二日第十時ヲ以テ、速ニ遵奉セラルヘキ旨ヲ三司官ニ対シ陳述セシナリ、然レハ藩議方向ノ決スル、明二日ニアツテ事情既ニ切迫ト謂フヘシ、於是拙者ハ貴下及摂政以下ノ諸員ニ対シ、大ニ一言セサルベカラサル事アリ、抑モ今般ノ事遵奉セラルレハ論ナシ、若シ遵奉セラレサルトキハ、其歎願聽許ヲ得スシテ遵奉セラレサル儀ニ付、即チ我方政府ニ反セラル、ナリ、政府ニ於テハ決シテ之ニ対スル嚴重ノ処分ヲ行ハルヘシ、是則チ当藩王家廢存ノ係ル所ニシテ一大変事ナリ、而シテ今般ノ命令ヲ遵奉セラレサルハ、其他日ノ一大変事アルハ更ニ不知シテ、只漫ニ今日ノ藩議ヲ尽サレタル乎、然ラハ事甚タ迂闊ニ出テ、其時ニ當テ千悔スルモ既ニ及サルナリ、今速ニ図ヲ改メテ遵奉セラルヘキヲ要ス、若シ或ハ他日ノ一大変事アルハ、固ヨリ之ヲ知り、仮令其一大事ニ際シ、当藩王家ノ廢存ニ係ルトモ、清国ニ対スル

情義ニハ換ヘ難シトシテ、断然不拔ノ義ヲ決セラレタル乎、然ラハ寒ニ疎暴ノ非義ニシテ貴下ハ家祖ニ対シテ不孝莫大、於此摂政以下ノ諸員ハ貴下ニ対シテ不忠莫大、於此二ツノモノ何レニ出ルモ皆ナ以不策ニシテ、実ニ当藩王家ノ為メ大ニ憂フ可キ所ナリ、然ニ貴下及ヒ摂政以下ノ諸員ハ、只ニ其非議不策ナルヲ是トシテ之ヲ遂ケ、藩下人民ノ為メニ謀ラサルモノ、如シ、嗚乎独リ可憐モノハ当藩下人民ナリ、拙者今般ノ命令ヲ奉シ来リ、此非議不策ヲ親シク視認シ、措テ問ハサル可カラス、依テ明日奉答セラル、前ニ當リ、一言以テ貴下及ヒ摂政以下ノ諸員ニ質サントスルナリ、若シ遵奉セラレサルトキハ、貴下及ヒ摂政以下諸員ノ他日一大変事アルノ事ニ於ケルノ方向ハ、彼ノ二ツノモノ何レニアル乎、審カニ答告セラルヘシ、茲待貴酬、

明治八年九月一日於首里城中 内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

昨三十一日被差出タル貴下及ヒ撰政以下之御答弁書ニ対シ、拙者ニ於テ詳細弁論可致ト存候処、右御答弁書之旨趣ハ、即チ去ル二十日其藩吏、撰政・三司官等ト示談之上、臨時相開キタル討論内席ニ於テ、撰政以下之各員ヨリ被差出タル書面之旨趣ト同一ニ付其内席之書面ニ対シ、拙者ヨリ弁論ニ及フ書面ヲ以テ、併テ貴下及撰政以下之御答弁書ニ対スル弁論書ト致シ候間御熟覽可有之、右弁論書ニ陳述致シ置候条理之旨趣ニ付、貴下及ヒ撰政以下之御答弁書之旨趣ニテ御歎願者、拙者ニ於テ決シテ聴許不致候条、明二日ヲ以テ速ニ遵奉可被致、此段及御照会候也、

明治八年九月一日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

当藩支那ト之統従前通被仰付度、再往奉願候処不条理之由ニ而御採用無御座、分ケ而御嚴達之趣致承知、此上御断茂難申上事御座候、乍然兼々申上候通、当藩ノ支那ニ

於ケル五百年來之恩義有之、其上御征台之末支那御談判以後ニ茂取扱向何篇従前ト相替不申事候処、直様断チ絶候而ハ何共難致次第御座候間、何卒政府ヨリ支那御談判ヲ以進貢被差免候通、支那ヨリ咨文到來之上、御請仕度御座候間、其通被仰付被下度奉仰候也、

明治八年九月三日

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

本日今般ノ命令遵奉ノ旨ヲ以テ差出サレタル書面ヲ視ルニ、旨趣甚タ不条理ナルヲ以テ藩吏ニ弁論シ、直ニ之ヲ擯斥シタリト雖トモ口述ノミニテハ誤聞謬ノ伝ノ恐アリ、故ニ猶ホ貴書ニ依リ、更ニ对弁書ヲ以テ左ニ説明ス、

^(珠)当藩支那トノ統従前通被仰付度、再往奉願候処、不条理之由

ニテ御採用無御座、分ケテ御嚴達之趣承知致シ此上御断モ難申上事御座候、乍然兼々申上候通、当藩ノ支那ニ於ケル五百年來之恩義有之、其上御征台之末、支那御談判以後ニモ取扱向何篇従前ト相替不申事候処、直様断チ絶候テハ何共難致次

第御座候間、何卒政府ヨリ支那御談判ヲ以進貢被差免候通、支那ヨリ咨文到来之上、御請仕度御座候間、其通被仰付被下度奉仰候也、

此書、今般ノ命令遵奉ノ書面ナル旨ヲ以テ差出サレタルニ、拙者之ヲ熟閱スレハ、則チ却テ遵奉セサルノ主意ナリ、何トナレハ我カ政府ヨリ清国ニ談判アツテ、清国ヨリ咨文到来ノ上遵奉スヘシト云ヘリ、是即チ清国ヨリ命令アレハ遵奉スヘク、我カ政府ノミノ命令ニ依テハ遵奉セサルノ主意ニシテ敬ヲ我カ政府ニ失スル、実ニ甚シ、藩議毎ニ言ヘラク、琉球ハ有信守礼ノ国ナリ、然ルニ今清国ニ絶ツハ、五百年来ノ恩義ヲ忘レ信義ヲ失ヒ、世界ニ対シテ恥ツヘシト、而シテ此書面ノ主意ニ依レハ、信ヲ清国ニ守ルカ如キ乎ト雖トモ礼ヲ我カ政府ニ失スルナリ、世界豈ニ之ヲ有信有礼ノ国ト言コトヲ得可ケンヤ、前言以テ藩吏ニ詰ルニ藩吏言ヘラク、固ヨリ我カ政府ノ命令ニ従ハサルニアラスト雖トモ、清国ニ於ケル五百年来ノ恩義アツテ今当藩ヨリ之ヲ絶ツトキハ、自ラ信義ヲ

失スルノ理ニシテ為スニ忍ヒス、我カ政府ハ征蕃ノ始末ニ於テ、清国ト当藩トノ情義断絶セシコトハ、日清両政府明カニ決着スル所ナリト言フト雖トモ、当藩ヲ以之ヲ見ルトキハ、征蕃役後、猶ホ依旧進貢受納ノ式ヲ行ヒ、且皇帝殂落ノ白詔、新帝即位ノ紅詔等到来スルハ、未タ情義ノ絶セサルモノトスルナリ、若シ其情義ノ絶セサルニ、漫ニ我カ政府ノ命令ノミニ依テ之ヲ絶ツトキハ、他日清国ヨリ問罪ノ師ヲ受必セリ、是当藩ノ一大憂ナリ、故ニ我カ政府ノ談判ニ依テ、一度彼ノ咨文ヲ得テ而後遵奉スルトキハ、日清双方ニ対シ信義ヲ失セスシテ当藩安泰ナリト、此言ヤ皆非ナリ、抑モ我カ政府当藩ニ対シテ命令ヲ下シ、之ヲ従ハシムルハ専有ノ権内ニ在リ、豈ニ清国ニ依テ彼ノ咨文ヲ煩ハシ、而後始メテ当藩ヲシテ我カ命令ニ従ハシムルコトヲ得ル等ノ如キ、我カ政府ノ権利ヲ損毀スルノ所為ヲ為ス可ケンヤ、而シテ我カ政府、当藩ニ対シテ今般命令ヲ下スハ専有ノ権内ニアルコトハ、則チ征蕃役始末ニ於テ日清両政府ノ明ラカニ決着スル所

ニシテ、其依旧進貢受納ノ式ヲ行フハ、元是去年ノ買物ニ屬スルヲ以テ、両政府決着スル所ノ事義ニ於テ更ニ妨ケナク、白詔・紅詔到来ノ事ニ至テハ、征蕃役ノ始末ニ於テ、清國ノ我カ政府ニ対スルモノト齟齬逕廷ノ所為ナルヲ以テ、我カ政府ヨリ清國ニ対シ、相当ノ処分ヲ行フヘク、当藩ハ此事アルヲ以テ、我カ政府ノ今般ノ命令ニ從ハサルコトヲ得サルコトハ、拙者過日来屢説明スル所ナリ、故ニ当藩ハ日清両政府決着スル所ノ主意ニ依リ、我カ政府ノ命令ニ從フモノナレハ、清國ヨリ問罪ノ師ヲ遣ルヘキノ理ナシ、若シ此事ニ就キ、清國ニ於テ紛論ヲ来スコトアラハ、彼レ必ス我カ政府ニ向テ問フヘシ、然レハ我カ政府ハ之ニ答フルニ、百般ノ条理アツテ到底日清両政府ノ談判ニ屬シ、難事ヲ当藩ニ負フノ恐レナキコトハ明カナリ、又清國ノ咨文ヲ得テ而後我カ政府ノ命令ニ從フトキハ、日清双方ニ対シテ信義ヲ失セントノ見ハ甚タ謬レリ、何トナレハ是則チ清國ノ命令ニアラサレハ、我カ政府ノ命令ニ從フコトヲ得サルノ謂ニシテ、我カ政

府ヲ輕蔑スル最モ甚タシキモノト謂フヘシ、何ヲ以テ之ヲ双方ニ対シテ信義ヲ失セスト言フヤ、我カ政府ニ対シテハ実ニ信義礼待ヲ失スルモノナリ、貴下及ヒ藩吏ノ所見、其不条理ナル、率ネ如是、其不条理ナル旨趣、此書中ニ含蓄シタルヲ、拙者何ノ見アツテ之ヲ受クルコトヲ得可ケンヤ、是則チ断然擯斥シタル所以ナリ、依テ熟ツラ当藩ノ為ニ謀ルニ、其日清両政府ニ対シテ信義ヲ失セサルハ只一アルノミ、則チ第一ニ過日来拙者ノ所説、即チ我カ政府ノ主意トスル所ノモノハ、当藩ニ於テハ真確ナリト視認メテ、今般ノ命令ニ対シテハ遵奉ノ書ヲ呈シ、而シテ第二ニ彼ノ五百年來ノ恩義ノ絶チカタクヲ絶ツハ、我カ政府ノ主意トスル所ノモノヲ真確ナリト視認メテ、命令ニ從フト雖トモ彼ノ征蕃役後、依旧進貢受納ノ式ヲ行ヒタルコト、及ヒ白詔・紅詔ノ到来シタルコト等ニ因テ視レハ、未タ信義ノ断絶セサルモノ、如キアルヲ以テ、当藩ノ本旨ニ於テ未タ快然ナラサル所アレハ、我カ政府ヨリ清國ニ談判之上、事由ヲシテ判然タラシメンコトヲ

欲ス、故ニ今此命令ヲ遵奉スルハ、我カ政府ノ主意トスル所ヲ真確ナリト視認メタルニ出ツルモノニシテ、若シ清国ニ於テ我カ政府ノ主意トスル所ハ、己ノ主意ニアラストシテ、紛論ヲ起シテ、遂ニ清国ノ主意トスル所ニ帰スルトキハ、我カ政府ノ主意トスル所ハ、真確ナラサルモノニ属スレハ、則チ当藩ノ我カ政府ノ命令ヲ遵奉シタルハ固ヨリ本旨ニアラス、依テ今我カ政府ニ向テ明カニ此意ヲ表章シテ、併テ聽理ヲ願フ等ノ旨ヲ具陳シタル書ヲ呈スルナリ、而シテ他日若シ清国ヨリ紛論ヲ起スコトアルトキハ、其第二ノ書ヲ以テ之ニ対スレハ、其實メハ我カ政府ニ帰シ、清国ニ於テモ当藩ヲ督責スヘキ理ナキノミナラス、却テ之ヲ慰視シテ待ツヘシ、然ルトキハ我カ政府ニ対シテハ礼待ヲ失セス、清国ニ対シテハ信義ヲ失セス、即チ双方ニ対シテ信義ヲ全フスルモノナリ、夫レ如此スルトキハ我カ政府ニ於テ其遵奉書ヲ取ルニ、慙心以テ之ヲ取テ其願意モ亦宜シク裁制スル所アルヘキナリ、乞フ、速ニ之ヲ行フヘシ、貴下若シ猶ホ拙者ノ所説

ヲ聽カス、前議ヲ換ユルコトヲ欲セサルトキハ、遂ニ命令遵奉セサルノ外他ナシ、然ラハ其遵奉セサルノ書ト、去一日ヲ以テ所贈ノ質問書ニ対スルノ答弁書ト併テ以呈セラルヘシ、至是、我カ政府ニ反スルノ状判然タルヲ以テ、我カ政府於テハ、其遵奉セサル書ヲ取ルモ、憤懣之ヲ取テ遂ニ嚴重ノ処分ヲ行フヘシ、夫レ当藩ノ政府ニ於ケル、慙心以テ之ヲ待タレテ双方ニ対シテ信義ヲ全フスルト、憤懣以テ之ヲ待タレテ当藩王家ノ廃存ニ係ルト、其理非得失如何ソヤ、希クハ貴下猶ホ一層熟慮シ、早く藩議ヲ改メラレヨ、

明治八年九月三日於首里城中

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

当藩支那ト之事件、段々願申上候得共御採用無御座、此儘直ニ奉長候様ニ茂難仕、至極及当惑居申候、右付乍恐政府江成行弁解之為、官吏上京させ申度御座候間、御許

容被下度所仰御座候也、

明治八年九月四日

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

本日差出サレタル書面ヲ視ルニ、旨趣甚不条理ナルヲ以テ藩吏ニ弁論、直ニ之ヲ擯斥シタリト雖モ口述ノミニテハ誤聞誤伝ノ恐アリ、故ニ猶ホ貴書ニ依リ、更ニ対弁書ヲ以テ左ニ説明ス、

(米)「当藩支那トノ事件、段々願申上候得共御採用無御座、此儘直

ニ奉畏候様ニモ難仕、至極及当惑居申候、右付乍恐政府へ成行弁解之為官吏上京サセ申度御座候間、此段許容被下度所仰御座候也、」

此件、聴許ス可ラサルコトハ過日來屢説明スル所ニシテ、貴下及ヒ藩吏ニ於テモ能ク領解セラル、所ナリ、然ルニ今猶ホ此言アルハ、前日ノ事ハ宛モ忘却セラリタルモノ、如シ、実ニ其颯面ナル、亦甚シ、故ニ今又喋々愚陳ヲ費ヤスヲ要セスト雖モ、此書ニ対シ亦答ヘサルヲ得ス、

依テ猶一二言ヲ述ントス、抑モ拙者ハ不肖ナリト雖モ政府ノ命ヲ奉シタル委員ナリ、其奉命委員ニ於テ藩情ヲ審案シ、遂ニ其歎願ノ旨趣不条理ナリト視認メ、之ヲ聴許セサルニ其委員ヲ措ヒテ、直ニ政府ニ向テ弁論セントスルハ、是委員ヲ辱カシメ則チ政府ヲ辱カシムルナリ、之ヲ他國ニ対スモノニ譬フルニ、他ノ一國ヨリ委任ノ使節ヲ遣ルニ、其使節ヲ措キ直ニ其政府ニ向テ談判センコトヲ論シテ、其使節ヲ辱カシムルモ同一ニシテ、他國ハ則チ戦ヲ以テ是ヲ問フヘシ、我カ政府ハ則チ法ヲ以テ之ヲ問ヘキナリ、仮令今拙者之ヲ聴許シテ藩吏ヲ上京セシムルモ、政府豈ニ委員タル拙者ヲ措キ、直ニ藩吏ノ弁解ヲ聞カンヤ、夫レ如此不条理ナル書面ノ旨趣ハ拙者決シテ聴許セス、是之ヲ直ニ擯斥スル所以ナリ、依テ事今日ニ至テハ、只奉否ノ二ツアルノミ、乞フ、速ニ決定セラレヨ、

明治八年九月四日

於首里城中 内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

当藩支那ト之統、五百年來之縁由有之、信義之掛る所ニ而断チ絶候儀難致、是迄通被仰付度、松田道之江段々願申上候得共御採用無御座、其儘御請仕候儀、藩中人心之安セサル所ニ而、使者立を以政府江申上、乍此上御採用無御座候ハ、御請可申上段、三司官口上を以奉願候得共、此儀茂御聞取無御座、然逆直様御請茂難仕次第御座候、此段申上候也、

明治八年九月五日

琉球藩王尚泰

太政大臣三条美殿

当藩支那ト之事件、御達通直様御請難仕段ハ、別段を以申上候通ニ而成行弁解之為官吏上京仕候儀、御免被仰付被下度奉願候、尤上京之上歎願等ハ曾而不申上候間、宜御依頼申候也、

明治八年九月五日

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

本日今般ノ命令遵奉セサル旨ヲ以テ差出サレタル書面ヲ視ルニ、文意甚タ曖昧ニ付藩吏ニ弁論シテ、直ニ之ヲ擯斥シタリト雖トモ、口述ノミニテハ誤聞謬伝ノ恐アリ、故ニ猶ホ貴書ニ依リ、更ニ対弁書ヲ以テ左ニ説明ス、

（朱）当藩支那ト之統、五百年來之縁由有之、信義之掛る所ニテ断

チ絶候儀難致、是迄通被仰付度、松田道之へ段々願申上候得共御採用無御座、其儘御請仕候儀、藩中人心之安セサル所ニ

テ使者立ヲ以政府へ申上、乍此上御採用無御座候ハ、御請可申上段、三司官口上ヲ以奉願候得共、此儀モ御聞取無御座、

然逆直様御請難仕次第御座候、此段申上候也、

此書今般ノ命令遵奉セサル旨ヲ以テ差出サレタル所ナルニ、之ヲ熟閱スレハ過日差出サレタル書面ノ旨趣ト齟齬スルモノアツテ、且結文曖昧ナリ、則チ政府へ申上、此上御採用無御座候ハ、御請申上候云々トアレトモ、過日ノ書面ノ旨趣ニ就テ視レハ、只拙者ヲ聞キ、直ニ政府ニ向テ弁論センコトヲ乞フノ書ニシテ、決シテ遵奉スルノ主意ニ非ス、是過日差出サレタル書面ノ旨趣ト齟齬スル

モノト謂フナリ、又去迎御請難仕次第御座候、此段申上云云ハ遵奉セサルノ謂ニ非ス、其遵奉スルコト難キ事情ヲ陳述スルノ意ニ止マリ、之ヲ要スルニ其実ハ遵奉セサルノ意ナレトモ、他日朝議ヲ蒙ルニ答フヘキ遁辭ノ余地ヲ残セシモノニシテ、其策ノ狡猾ナル亦甚タシ、是結文曖昧ト謂フナリ、拙者奉命スル所ノ權義ハ、当藩今般ノ命令ニ於テ、其奉否ヲ決着スルノ職分ニシテ、只藩情ヲ聽テ上陳スルノミノ職分ニ非ス、況ンヤ此齟齬曖昧ノ文意ナルモノヲヤ、依テ其齟齬スルモノハ之ヲ改メ、結文ニ於テハ遵奉セサル旨ノ明文アラサレハ、拙者ハ之ヲ領収セサル也、

明治八年九月五日於首里城中 内務大臣松田道之

琉球藩王尚泰殿

ヘラルト新聞之写到来ヨリ、貴下及ヒ諸官一般驚駭之由ニテ過刻三司官来寓、縷陳之趣領承致シ候、一般驚駭之儀ハ一応御尤ノ事ニ候得共、元来新聞紙ト申モノハ世上

ノ論客又ハ射利ノ徒隨意ニ放記スルモノニシテ、或ハ他ノ一事ニ就テ為ニスルコトアツテ、故ラニ記載スル等之事モ間々有之、要之二十二七八ハ真ナラサルモ多ク、既ニ昨年我カ弁理大臣大久保氏ノ清国ニ滞留中ニ於テモ、種々虚喝ナル事ヲ新聞上ニ鳴ラシタルコト不少、近クハ拙者今般当藩ニ来ルニ付テモ、東京諸新聞上ニ於テ百般ノ虚説ヲ流布シタル事等モ有之、新聞之事タル、凡ソ如此モノニ候間、決シテ御狼狽致間敷、若又仮令如何ナル軍艦到来スルトモ、拙者滞中ナラハ拙者ニテ引請、拙者帰京後ナレハ内務省出張所官員ニテ引請談判致シ、其談判決着セサル以上ハ軍艦ヨリ直ニ当藩ニ対シ問罪、又ハ糾查等之事ヲ為スヲ得可ラス、而シテ其談判ノ決着スルハ、政府ノ評議ヲ歴サレハ決着ス可ラス、然レハ到底我カ政府ト清国政府ト之談判ニ属スヘキ条理有之、若シ到来ノ軍艦、此等之条理ヲ踏マツシテ、直ニ当藩ニ対シ問罪ノ事ヲ行フトキハ、我カ政府ト清国政府ト之和交條約ヲ破ル之大事ニ關係スルニ付テハ、万国公法之準セサ

ル処ナレハ、彼軍艦決シテ此等之疎忽之挙動ハイタサ、
ルハ必然ニ有之候間、当藩ニ難事ヲ蒙ムラル、ノ恐レハ
決シテ無之候条、無用ノ御懸念ヲ被止、諸官一同へ御説
諭可有之、且又今般命令ノ奉答セラル、ハ此軍艦到来ノ
前後ニ就テ、当藩ノ情義之得失ハ無之ニ付、速ニ奉答可
被致、此段為念及御照会候也、

明治八年九月四日於首里城中 内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

支那より急々軍艦渡来可有之段、新聞誌ニ相見得候通ニ
而当夏帰唐之者共相糾候得は、帰帆涯於支那茂右之取沙
汰為有之段申出、就而は実正軍艦渡来可有之哉と至極及
騒動、御達之御用諸官之吟味運ひ兼居申事御座候間、迎
陽丸帰便より長崎表江御問越、電信を以上海領事官江御
糾、実否相知候間、御返答御延被仰付度、新聞誌は多分
虚説、且たとひ軍艦渡来候共、当藩江は相構させ不申と
之御示諭茂分ケ而承知仕事候得共、其篇ニ而茂難落付、

右通諸官之吟味運ひ兼申次第御賢察、何卒御聽許被下度
奉仰候也、

九月五日

富川親方

池城親方

浦添親方

伊江王子

内務大丞松田道之殿

今日差出サレタル書面ニ依り、更ニ对弁ヲ以テ左ニ説明

ス、

(米) 支那ヨリ急ニ軍艦渡来可有之段、新聞誌相見得候通ニテ当夏

帰唐之者共相糾候得ハ、帰帆涯於支那茂右之取沙汰為有之段

申出、就テハ実正軍艦渡来可有之哉ト至極及騒動、御達之御

用諸官之吟味、運ひ兼居申事御座候間、迎陽丸帰便ヨリ長崎

表へ御問越、電信ヲ以上海領事官へ御糾、実否相知候間、御

返答御延被仰付度、新聞誌ハ多分虚説、且仮令軍艦渡来候共、

当藩へハ相構させ不申トノ御示諭モ分ケテ承知仕事候得共、

其篇ニテモ難落付、右通諸官之吟味運ヒ兼申次第御賢察、何卒御聽許被下度奉仰候也、

清国軍艦ノ事ニ於テハ、決シテ動搖狼狽ス可カラサルノ主意、及ヒ今般ノ命令奉否共、彼ノ軍艦到来ノ無有二關ス可ラサルコトハ、昨日藩王ニ所贈ノ書面及ヒ貴官等ニ對シ説明スル所ノ旨趣ニ於テ明カニシテ、既ニ貴官等ニ於テモ其説明ヲ聽テ、以テ諸官一般ノ狼狽鎮靜シ、而シテ後、更ニ又今般ノ事ノ藩議ヲ尽シ、則チ昨晚景ニ至リ、直ニ政府ニ向テ弁論センコトヲ乞フノ書ヲ藩王ヨリ出サレタルニアラスヤ、而シテ其書面ヲ聽許ヲ得サルヨリシテ、遂ニ復軍艦ノ事ニ遡リ、今又如此ノ書ヲ出サル、ハ其所為遲延矛盾、実ニ定議ナシ、之ヲ要スルニ、事ニ託シテ時日ヲ遷延スルノ策ヲナシ、形チハ柔順ニ似テ其實籠絡欺憫ノ心ヲ逞フスルモノ、如シ、道ヲ失スル亦甚シ、依テ此書面ノ旨趣ニ於テハ拙者決シテ聽許セス、只命令奉否何レカ速ニ決着セラルヘシ、

明治八年九月五日於首里城中 内務大丞松田道之

伊江王子殿

浦添親方殿

池城親方殿

富川親方殿

御達書之旨趣弥以遵奉有之候哉、又ハ遵奉無之哉、御答承知致度候ニ付過刻拙者隨行、及ヒ在勤官吏ヲ以申入候処、御達書之旨趣遵奉難相成書面被差出候処、口述卜文意齟齬致シ候故、御請難被致候ハ、御断之廉判然記載可被差出旨、及御談判候由之処、弥御遵奉相成ラサル儀ト御藩決ノ上ハ、此上是処ニ罷在候共甲斐無キ次第ニ付、只今ヨリ那覇港へ引取可申ト存候、依之右判然タル御断書可被差出、且可及御達事件有之候条、早々御出可有之、此段及御照会候也、

明治八年九月五日 首里城中ニ於テ 内務大丞松田道之

伊江王子殿

浦添親方殿

池城親方殿

富川親方殿

今般政府命令ノ事ニ付拙者來藩以來、政府ノ主意トセラ
ル、所、即チ条理ノアル所ヲ以テ、百万弁論ヲ費ヤスト
雖トモ、貴下及ヒ藩吏ニ於テハ、更ニ承諾セラレスシテ、
毎ニ不条理ナル願請ノミニ付拙者ハ之ヲ聽許セス、此上
ハ遵奉セラル、乎、否カラサル乎、二ツノ外他ナキニ至
リ、遂ニ一昨四日ニ於テハ政府ノ命ヲ奉シ、委員タル拙
者ヲ閣、直ニ政府ニ向テ弁論センコトヲ主張シテ、拙者
ヲ辱カシメ、即チ政府ヲ辱カシメ、又弥遵奉ナキニ決ス
ルトキハ、拙者ハ是非貴下ニ面シテ一言述フヘキノ旨趣
アツテ之ヲ照会ニ及ヒタルニ、病ノ故ヲ以テ謝セラル、
ニ依リ、遂ニ其病況ヲ検査センコトヲ要シタレハ、又固
ク之ヲ拒マレタリ、昨五日ニ於テハ遵奉セサル旨ヲ以テ
被出タル書面ヲ閱スレハ、文意曖昧、他日督責ヲ受クル
ニ答為メ遁辭ヲ含蓄シタルモノニシテ、政府ニ於テ決シ

テ取ル可ラサル書面ニ付、拙者直ニ之ヲ弁論シテ擯斥シ
タルニ靦然猶ホ悛メサル等件々ハ朝命ニ応セス、即チ政
府ニ反シタル者ト名状スヘキ也、依テ拙者ハ之ヲ視認メ、
明後八日ヲ以テ此地ヲ去リ、帰京ノ日、之ヲ審カニ政府
ニ上陳セントスルナリ、然レハ則チ政府ハ貴下即チ反者
ニ対スルニ国治ヲ以テシ、当藩ニ対スルニ前途ノ処分ヲ
以テセラルヘシ、依テ左ノ条件可被心得、將サニ去ルニ
臨ミ一書如斯也、

一 貴下謝恩名代上京、今婦仁王子并ニ刑律取調ノ為上京
ノ官吏、学事修業、事情通知ノ為メ上京ノ人員等出發
ノ儀ハ当分差止候事、
一 都テ藩吏ノ上京ハ当分差止事、
一 当分之内、当地人民他ノ管地ニ向テ航海スルトキハ、
毎時内務省出張所ニ届出ヘク、藩吏ハ他ノ管地ニアラ
ストモ、都テ当地ノ諸港ヲ出時ハ、其所要并ニ其至ル
ヘキ地方等詳カニ届出ツヘク様可致候事、

明治八年九月六日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

今般命令之事ニ付久米村住居之輩ニ於テ議論沸騰シ、既ニ今日ハ疎暴之舉動ニ及ヒタル趣ニ相聞ヘ、若シ然ラハ甚タ不埒之至リニ有之候条、其旨趣并ニ人名等承知致シ度、審カニ御申立可有之、尤モ拙者儀ハ明日此地出發致シ候ニ付、当夕中ニ御報知可有之、為其隨從及ヒ在勤官吏差出シ候一書如斯、

明治八年九月七日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

今般御達之御用、藩内之者共議論沸騰シ、昨日疎暴之舉動ニ及タル趣ニ御聞及、自然右様之向茂候ハ、其旨趣并人名等御承知被成度、御官吏兩名を以御懸合之趣致承知、構之役筋江検査させ候処、支那ト之統憂心之余リ三司官等御出張所江出頭之砌、首里・那覇・久米村之者共大勢相集、一同參上歎願可仕ト申募、其通ニ而ハ不敬可

成立ト引歸シ為申形ニ而、聊議論沸騰シ、疎暴之舉動ニ而ハ毛頭無御座段申出有之候間、其形御聞置被下度、此段及御返答候也、

明治八年九月八日

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

当藩支那ト之統五百年來之縁由有之、信義之掛る所ニ而断テ絶候儀難致、是迄通被仰付度段々願申上候得共御採用無御座、其俛御請仕候儀、藩中心之安セサル所候間、藩吏之内人撰之上、拙者之委任ヲ与ヘテ上京セシメ、今一応政府ヘ申上、其上御採用無御座候ハ、東京表ニ於テ直ニ御請可申上候条、此儀御許容被下度御依頼申上候也、

明治八年九月九日

琉球藩王尚泰

内務大丞松田道之殿

本日差出サレタル貴書ニ依リ、左ニ対答ス、

(米)

「当藩支那トノ統五百年來ノ緣由有之、信義之掛ル所ニテ断チ絶へ候儀難致、是迄通被仰付度、段々願申上候得共御採用無御座、其儘御請仕候儀、藩中心之安セサル所ニ候間、藩吏之内人撰之上、拙者之委任ヲ与へテ上京セシメ、今一応政府へ申上、其上御採用無御座候ハ、東京表ニ於テ直ニ御請可申上候条、此儀御許容被下度、御依頼申上候也、」

過日直ニ政府ニ向テ歎願セラレンコトヲ請ハレタレトモ、其要旨ハ命令遵奉セサルコトヲ強願スルノ主意ニ止マルヲ以テ政府ノ命ヲ奉シ、即チ委員タル拙者ヲ閣キ、直ニ政府ニ向テ強顔(願カ)セラル、ハ拙者ヲ辱カシメ、即チ政府ヲ辱カシムルノ理ナルニ依リ、拙者ハ之ヲ聽許セサリシ処、本日請ハル、所ハ、若シ政府聽許ナキトキハ、貴下ノ委任ヲ受ケタル藩吏ヲ以テ、直ニ遵奉セシムル(願カ)ヲ拙者ニ対シテ明カニ保証セラレタレハ、則チ遵奉ノ意旨此中ニ在リ、然レトモ其委員タル拙者ヲ閣クノ理ニ於テハ前ニ同シト雖モ、其遵奉セサルヲ強顔スルト、遂ニ遵奉スルノ意旨アルトハ、其輕重固ヨリ義ヲ同フシテ視ル可ラ

サルモノアツテ、且当藩近日困難切迫ノ情ニ於テ、拙者親シク視察スル所アレハ大ニ之ヲ酌量シ、則チ拙者奉スル所ノ權内ヲ以テ一ノ便方ニ依リ、特ニ此請ヲ聽許セン、依テ速ニ藩吏ヲ撰ミ委任ヲ与へテ、拙者ト共ニ上京スルコトヲ命セラルヘシ、又昨日迄ニ於テハ、談判既ニ破レテ他日政府処分ノ一段ニ歸スルヲ以テ、謝恩名代タル今歸仁王子及ヒ刑法取調・学事修業・事情通知ノ人員并ニ他ノ藩吏等ノ上京ヲ止メ、藩吏及ヒ人民一般航海スルトキハ、内務省出張所ニ届ケシムヘキ等ノ条件ヲ照会ニ及ヒタレトモ、本日請ハル、所ノ旨趣ヲ聽許スル以上ハ、則チ談判復和シタルモノニ付、曩ニ照会ニ及ヒタル条件ハ委、皆之ヲ解釈スルナル、然レハ既ニ遵奉セラレタル条件ハ、皆ナ実践セラルヘキ理ナルヲ以テ、謝恩名代タル今歸仁王子、刑法取調ノ官吏、学事修業・事情通知ノ生徒等ハ速ニ上京ヲ命セラルヘキヲ要スル也、

明治八年九月九日

内務大丞松田道之

琉球藩王尚泰殿

冊子原寸 縦一九・五糎 横二七・五糎 三三枚

三六〇 岩倉右府公より島津左府公へ

岩倉右府之參朝を促す

〔端裏付巻〕
「岩倉具視」

一昨日來翰之所不能即答失礼候、如命秋冷相催候、弥御清榮恐悅、然ハ不日出仕被致哉、來示之趣敬承、毎々御懇諭旁一応參館可及御答存候所兎角不快、意外御無沙汰候、何レ其内出頭之上方々可申承候、此段一筆申入候、外二支那雲南一件書類正ニ落握、則条書令返呈候、仍早々如此候也、

九月四日

具視

左大臣殿

文書原寸 縦一六糎 横五六・五糎

三七二 琉球使者上京ニ付藩王ヨリ三条相国へ

朝旨直接諭示ヲ乞フノ件

当藩支那ト之続五百年來之縁由有之、信義之掛る所二而

断チ絶候儀難致、是迄通被仰付度、内務大丞松田道之江段々願立候得共御採用無御座、其俣御請仕候儀、藩中心之安セサル所ニ候間、藩吏之内人撰之上、拙者之委任ヲ与ヘテ上京セシメ、今一応政府江申上、其上御採用無御座候ハ、東京表ニ於テ直ニ御請可申上趣を以、遂ニ松田大丞之許容ヲ得、今般池城親方差出、与那原親方・幸地親方・喜屋武親雲上・内間親雲上・親里親雲上隨行申付候条、宜御頼申上候也、

明治八年九月十日

琉球藩王尚泰

太政大臣三条美殿

文書原寸 縦二七糎 横三八糎

三七三 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

元老院會議ノ件

〔封筒〕
「島津左府公」

実美

〔封筒ウラ〕
「封」

元老院章程改正之義、未決議ニも不相至候処、既休暇も相濟、今日よりハ開議ニも可相成候得共、彼是差支も有之候と存候ニ付、別紙之通達方取計申候間、此段申上候也、

九月十二日

実美

島津殿

文書原寸 縦一七・五糎 封筒原寸 縦二一・五糎

横五一・三糎 横 七糎

云々 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

華族会館ノ件

(封筒)
島津左府公 実美
(封筒ウラ) L

弥御安全奉賀候、然は華族会館江徳大寺・柳原出席之義徳大寺江申入候処、即今速ニ承諾相成都合ニ御座候、就而は先柳原計ニても速ニ出席相成候方、会館都合宜趣

ニ付、於愚存は柳原計ニても可然存候、猶尊慮承度、実ハ明後日迄ニ相運候様致度旨、柳原よりも催促有之候間、乍略義書面を以て申上候、艸々拝具、

九月十四日

左府公

実美

文書原寸 縦一七・二糎 封筒原寸 縦一七・八糎

横七五・五糎 横 五・七糎

云々 斎藤簡ヨリ左府公へノ呈書

断然帰国ノ決意ヲ以テ直奏ヲ乞フ

(包紙ウラ書)
上 侍史御中

斎藤簡九拜

(表紙)
上 侍史御中 L

謹而奉申上候、御前御儀、先月二日より御出仕被遊、其六七日目ニも被

為有候哉、日ハ心得不申候得共、御仁政も御忠言も不被行、御素餐御屑と不遊、官位共ニ御返還御帰県遊し候欝、又朝政御委任欝之両端、三条公江御催促被遊候所、未夕上聞ニ不及候由ニ付、左候ハ、

御自身御直奏被遊、御睿断を可被為願被仰候ニ付、三条公必奏聞可仕由ニ付、其意ニ為御任相成候所、三条公より右御勅答ニハ篤と御勘考可被遊旨被仰出候由ニ付、御待被遊候哉之所、此節迄ニハ已ニ四十日程ニ及、御

考之御勅答、未夕不被為有候半と奉恐察候、又先月廿日

後ニも御座候哉、中山一位卿(忘能)・大原老卿(重徳)・嵯峨卿(実受)以下

立花殿迄御八人尊邸江被為入、定而御懇談御約束被遊候

哉ニ而、其翌日九時ニ候哉、十時ニ候哉、宮内省江

御前御始御九卿御揃ニ而、御參内被遊、尤三条公(実美)・岩倉(具徳)

公・參議方も御諾ニ而

主上御出座、中山卿ニ候か、何方卿ニ候哉、御開口ニ而

太政大臣御一人之御決議ニ而、万機之御政御謬誤等も難

計候ニ付、以來三公御分課ニ而御裁判被為有度旨、又衆

民安着之御政事被為有度儀と、両条之議懇ニ被仰上候処、主上御始、両大臣・參議方も御一同御無言ニ而、余程之間皆々御無言之席と相成、御広座肅然として俗諺ニ申し

らけ候様相成仕舞候ニ付、御覽ニ被為余候哉ニ而

御前御一人御發言ニ而今日申上候議事ハ、惣衆生中之申上候議事ニ御座候間、篤と御勘考之上御勅答被成下度と御前之御一言之御啓キニ而、御一統御退席被為有候由伝

聞仕候儀ニ付、少々之相違ハ御座候も難計御座候得共、

其大綱ハ相違仕間敷哉奉存候、其構ニ而相探候得ハ、本

日木戸殿早朝ニ參内仕(孝七)

主上江篤と申上、悉ク御耳目を奉塞候故ニ、御無言ニ被

為入候様御仕向ケ申上置、三条卿始皆々御無言ニ而右九

卿方御立処を失候様ニ之奸謀申含ニ相違無之之儀奉存慮

候、是以最早二十日ニ及候半ニ付、御勅答被遊候も宜

敷御時節と奉存候、其以前

御前御直奏可被遊御儀を、三条公より篤と御勘考御勅答

ニ被仰出候ハ四十日ニ已ニ及候得ハ、右肝謀無所不

置之奸議ニ候得ハ、いつ御勅答、いつ迄御勘考か固より難計と奉存候、先月初之御委任か御官位御返還之兩端御催促之元因ハ、乍恐昨年十月御建言書之写、窃ニ拝見仕候処、御西巡幸以前より之御履歴一々御条陳被遊、御旧臣方之落度迄御捨取被遊、何一ツ御採用不相成次第御細述被為有、左候而御素餐之御罪ニ付、從二位左大臣之御位官御返還被遊御帰巢被為有度、夫共被仰上候御次第、可採者ありと思召候ハ、朝政御委任相成候ハ、御病体被為押候而も御勉強御從事可被遊候ニ付、其成功を御責御座候様ニと申御雄偉之御建言書之処、先月二日御出仕後、右兩端御催促被為有候御儀ハ、定而昨年十月より当節迄奏聞無之、只御一己之御私を以、如此至重至大之天下安危ニ關係し候御建言書を御密握被成置き候ニハ相違無之、扱もく御不忠千万之御方と奉存候、此度も御自身御直奏を御恐懼ニ而御奏聞之由ニハ候得共、篤と御勘考之上勅答と御座候得ハ、又々十ヶ月や一ヶ年ハ夫切二而無事ニ可相濟候間、其内ニハ又何か好き風も吹候

半位を上聞し置候半ニ相違ハ必有之間敷と奉存候、左候得ハ際限無之、奸詐ニ御碌々として

御前之尊名を御因循為す事なきの誹り難御免れ、已二過日親友之者罷越相咄候ニ

左相公もさつはり尻腰不被為有、又半年か一年ニハ濟不申ハ必然と奉存、つまり東京を御離れ遊候を不被為好御故かと申歎息仕候ニ付、私答ニハ必御遠略も被為有候半とハ答候得共、夫共御英決御乏為と可惜くくと長歎息ニ而相歸り申候、是等ハ兼而申上置候九人之内ニ而識者とハ可申者ニ御座候、右様識者之議論憂慮と被為変候様ニ而ハ、乍憚

御前之御徳量之御厚薄ニも關係仕候重事ニ付、名ハ末代と申俗諺も御回顧御沈思被為有、先般御辞表被為有、桜田御邸より当御邸江御引移之節、簡愚捧一書候文中ニ御盛拳大御出来と申上候次第も陳腐可仕、随而天下之人望も自然一人より二人ニ伝へ、識者共各額を集め相歎息憂思仕候様ニ而ハ実ニ不容易次第と、乍恐奉歎惜候間、

重々乍恐文武之一怒を御発し、御憤然と即日ニも東京を御離れ遊し候御決断ニ而、三条公へハ御断り而已ニ而直ニ御参内

御立奏被為遊、御睿断を御願被遊候方と奉恐願候、夫共三条公屹度日を刻し、御勅答必と御請合と被仰聞候ハ、御好ミハ不遊候而も、御枉ケ一度ハ為御任候而も、必以此度ハ明日とか明後日との儀ハ、決而御猶予不遊御儀ニ御真決被為有度奉仰願候、書ハ不尽言ニ御座候間、何卒御一喝ニ申上度、飛揚之如く懇思之至ニ御座候得共、御逢無之ニ付不文言、乍不行届以愚筆奉泣願候、誠恐誠惶頓首稽顙、

九月十七日

斎藤簡九拜

奉呈

左相公

閣下

文書原寸 縦二七種

包紙原寸 縦

二七種

横一九種

横三八・五種

三三 三条相国ヨリ大久保参議へ

外交問題

(封紙ウツ書)
大久保殿

急用

実美

別紙之通、従外務卿申越候二付、政府よりも兩人計行向候方可然哉二岩倉共相談し候間、徳大寺被行向候間、於足下も乍御苦勞行向有之様致度候、仍早々如此候也、

九月廿一日

文書原寸 縦一六・八種 横五〇種

三六 内田政風書翰 宛名不明

支那朝鮮問題等

猶々御体專要念上候也、

一輪拝呈仕候、秋冷稍相催候処、其后倍御清適被成御座奉敬賀候、随而小僕無恙碌々在勤仕候、乍余事、御除神

可被下候、大流行虎列刺病(コレラ)も季候ニ從テ消滅仕、大幸此事二候、御地は右之悪病流行も無之、雨勝ニ而常年よりハ暑も凌易キ年之由結構之至ニ候、倭朝鮮一条も速ニ好結果ニ立到、御互ニ国家之為ニ可賀事ニ候、諸新聞ニも種々之説も相見得候通、支那之挙動、実ニ真偽難察件々不尠、就中朝鮮王より支那帝江之哀訴等、全臣属之國と相見得候ニ付而は甚不審之廉不尠、いつれ条约國より何とか難題ヲ申懸候場合ニも可立到も難計歟ニ被察申候、外ニ相替尊台迄申上候事件も無之候、倭御別紙疾返上之含罷在候処、郵便等ニ而は掛念ナキニアラス、幸便見合居候処、斯ク遷延ニ相及之処失敬仕候、此内粗申上候通、御考按通採用着手之場合ニ罷成候得は、無上之幸福ハ無申迄候得共、何分上ハ魂、口ニは飽迄賛成顔いたし候而も、始より胸間ニ関ヲ守、只程能挨拶ニ及候が彼カ長上歟ニ被推候付、迎もく被行候処六ヶ敷、箱之庭ニ収メ置迄之事かと遺憾之至ニ候、尤彼一人ニ限タル風醜ニハ無之、滿朝人心大意如是、諸県も同様ニ而、只風ノ儘

ニ々高位之鼻息ヲ伺、独立之氣象アルハ用られざるが當時之世態とあきらめ候得はさまて腹も立不申、乍併万々一も御答ニ苦ミハト尽力可致も難計事ニ候、下よりハ飽迄突込、其狼狽ヲ楽ムモ面白ミ之ある事カと相考申候、一同之為、御尽シ被下候儀ニは仕度事ニ候、御地之景況御思ひ山々際ハ御洩被下候様奉願候、北国一条は如何之御評議ニ決シ候哉、木藤氏等之話も有之候間如何之御話シニ決候哉、御洩シ奉願上候、先はあらく御託且御伺迄、乍畏以乱筆細々如是御座候、書余後音ニ相讓申候、謹言、

九月廿六日

内田政風

文書原寸 縦一六・五釐 横一一九釐

云々 東京府士族清水純崎ヨリ島津左府公へノ建白

時弊匡救ニ就テ

(表紙)
一上書

東京府士族

賤臣清水純崎頓首謹白

左大臣島津公閣下、純崎幸二

皇運中興ノ秋言路洞開ノ日ニ遭逢シ、老骸骨ノ未就木ハ、
何福如之、況又

閣下鼎輔ノ地位ニ屹立シテ、太山不讓、土壤河海不挾、
細流ノ雅量ヲ被為抱候由、拜承罷在、窃為天下賀之、
欣躍無己、純崎曩以疾辞官、退テ閑住スルモ、報國ノ
心ハ尚未灰了ナリ、比來晴耕雨読ノ余、聊獻芹ノ微衷
ヲ表スル迄、別冊ニ胸中ノ所蘊ヲ条陳シテ、奉冒瀆
威嚴候、尤庶政ノ大体ニオケルヤ、固ヨリ如純崎ノ敢
テ喙ヲ容ルベキニ非ラス、而シテ僅ニソノ細目ニ渉ル
モ、亦コレ蠱測管窺ニシテ、深広ノ実ヲ窮ル能ハザレ
ハ、徒ニ大方笑談ノ一噓ヲ資クルニ足ル而已、
電覽ノ後、直ニ覆酷ノ用ニ付セラル、モ、又ハ一二収
録、モツテ他日大隄ノ蟻孔ヲ完修セシムルニ備ヘラ

ル、モ、亦唯命、何ソコレヲ仕進ノ階梯トナシテ、自
家ノ聞達ヲ求ムルノ私念アラランヤ、伏願
閣下其諒察之、惶惧再拜、

東京府士族

明治八年九月廿七日

清水純崎〇^(朱)

列款

海陸二軍トモ、平素ノ養方ニヨリ、将卒一和不致トキハ、
自然萎靡不振シテ、戰陣ノ御用ニハ相立申間敷哉ノ義ハ、
固ヨリ臣等ノ特ニ申上ル迄ニモ無御座候得共、方今目撃
耳触スル所ニシテ、頗ル兵機ニ妨害アル者ヲ摘出シテ、
之ヲ左ニ陳述仕候也、

一爾来近衛隊・諸鎮台及教導団等ニテ、何レモ気色索然
トシテ、往々偶語スル者アリ、曰、吾曹ノ兵卒タルヤ、
幸ニ太平無事ノ盛運ニ逢着シテ乍在、如何ニセン、父
母易養ノ日モ、親族ノ屬續ニ与ルコトヲ得ベカラス、
且自分疾病ニテ入院スルトキハ、容易ニ血族ニ面会モ

不相成トハ、何等ノ不幸ナルコトニ候ヤ、之ヲ推スニ、
素ヨリ

天皇陛下ノ不情ト無恩ナルニハ非ラス、皆是各官員ノ部下ヲ奴視スルノ処分ニ出ルナリト、長大息致シ居リ候趣、臣愚窃恐他日投諸死地之際、不知其所報者竟如何也、為之元帥者、アニマタ一則以懼、一則以戒メザルベケンヤ、

一諸隊兵卒及武学生徒等、父母病氣ノ節ハ、該家ヨリ通知次第ニ、隨即御暇ヲ被賜候様有之度、尤ソノ虚実ト真偽ハ、直ニ督部ヘ探索被申付候方可然、右ハ他事トモ違ヒ候義ニ付、特別ノ訳ヲ以テ、御准许相成、但戦地ニ従事スルトキハ非在此例旨、且爾後兵卒ノ親族共ヨリ、府県各区扱所ヘ添翰ヲ願出候ハ、休暇及退出ノ時日ヲ不問、速ニ検査ヲ遂ケ、ソノ筋ヘ進達イタシ、決テ等閑ノ処分無之様本文ノ義ハ、当府下某区ニオイテ、募兵二編入セシ者ノ父病氣及危篤ニ付、親族共ヨリ当人下宿ノ義願出ル節、扱所其外夫々手数ヲ歴テ、漸ク下宿ヲ被差許シハ、既ニ葬リテ三日ヲ過ル由ナリ、コレ嘆スベキナラスヤ、可取計旨ヲモ更ニ被仰出候ハ、兵卒共一ト際

天恩ノ優渥ナルヲ感戴可仕ト奉存候事、

一兵卒ノ内、平常ノ修業格別励精ニシテ、且行実モ恭謙謹飭ナル者、自然内科ニ属スル病証相発、数日ニシテ全愈無覚束節ハ、当人并親類共ヨリ願ニ依リテハ、下宿モ被申付候様有之度、然ル上ハ、各自ニ倚頼スル医師ニ託シ、充分ニ血族ノ看護ヲ受ケ候条、タトヒ病草ニ至リテモ、毫モ遺憾ハ有之間敷、コレ亦兵氣ヲ振作スルノ一策トナラン欵ト奉存候事、

但男児ハ四方ノ志アリト雖トモ、自然疾病事故アルヲ過慮セサル者ハ幾希ナルニ付、当節ノ景況ニテハ右病院休養中、医業其他過分ノ官給ヲ仰キ乍在、各自奉対

朝廷、窃ニ異議ヲ生スル哉ニ相聞ソレ疾病、則呼父母ハ人ノ常情ナリ、且病院看護ノ御手当向ハ充分行届可申ナレトモ、乍恐病者ノ安堵スルハ、却テ充分ナラザル血族ノ看護ニアルヘク缺、加之官医モ必ス圍手ノミニ無之、此異議ノ所由起也、極テ御不都合ノ筋ニ有之、因テ本文ノ義ヲ前以御布達被成置候ハ、兵卒共感荷ノ余、内外ノ取締モ相立、詰リ一拳両全ノ御

処置ナラン欵ト奉存候ナリ、

一現今募兵ノ法ヲ御廃止相成、本文募兵ノ義、農家ノ子弟一タヒ兵隊ニ入りテハ、他年限滿ノ後、解兵帰村被申付トモ、氣位バカリ高尚ニナリ、之ヲ檢束スル者ナケレハ、自然遊惰ニ流レ、卒ニ復力ノ担糞漢タルコトヲ得ベカラス、コノ法ノ盛行ハルハ、ヤ、亦是漸次ニ耕地ヲ汗萊、近衛隊并諸鎮台トスルニ馴致セン欵、臣等過慮不少奉存候

共、最寄府県旧士族ノ内ヨリ、強壯ノ者ヲ御撰拵被為在、年次輪班ニ入営修業被仰付候方可然、就テハ是迄被召募候平民ハ、追々解兵帰籍為致、尤有志ノ輩ハハ材力心術等ヲ、篤ト檢査ノ上、真ニ凡民ノ俊秀ナル者ヲ御採用アラシメテ、異日更ニ願ニ依

テ編隊被申付候様有之度事、

法司ノ義ニ付、民間ノ巷議ヲ探聽仕候処、当今ノ御裁判ニテハ、借モノハ返済セヨ、調金ヲ克セスハ身代限可引渡旨ヲ、本人ナレハ無論、保証人ノ被告モ、一概ニ御敵達相成、右様ノ御扱方ナレハ、該庁上二面目機發アリテ太夕人ニ似タル者ヲ座セシメテ、印刷ニセシ規則書ヲ為扣置テモ、御裁判ハ可相濟ナリ申居ル者モ有之、或ハ頃日貸借ノ路ノ確ト差問ルハ何事ゾヤ、遂ニ正直ナル窮人マテ必至ト困難ニ至ルモ、全ク

朝廷オイテ例ノ印紙ヲ御売捌ノ為メ、譬へハ小鮮ヲ煮ルニ之ヲ攪却スル様ナル御世話ノアルヨリ起ルコトナリ、寧民間ノ融通ハ、相互ニ実意ヲ以テ取引可致、右貸借ニ付テ訴訟申出ルモ、総テ御採上ケニ不相成旨、御布告被為在、更ニ御關係無之方可然、左スレハ自然濱俗ヨ易へ淳風ニ移スノ運ニモ可成行欵ナソ申居ル者モコレアリ、古語云、夫民所怨者、天所去也、民所思者、天所与也、挙大事、必当下順民心、上合天意、功乃可成、一体訟獄ノ義ニ付テハ、兎角ニ民情ノ冤抑ヲ釀成シヤスキ事ユへ、何卒十分ニ下情ヲ上通セシメ、ソノ利害得失等ヲ深計遠慮アリテ、而後ニ民ハ可使由之トノ御趣意ヲ以テ、大ニ御变革ヲ被仰出度奉希望候事、

一先般金錢取引ノ際ニ、身代限ノ法ヲ被設置候義ハ、到底貸主ヲ扶植シテ、民間ニ融通ノ一大路ヲ被為開候、御趣意ニモ可有御座ト、窃ニ推考仕候処、爾後貸借上自然風俗峻薄ニ罷成、今日ニ至リテハ、諺ニ所云百賈ノ形ニ編笠一蓋ヲ取ル者、滔マトシテ天下皆是ナリ、

乍恐人民ヲ保護スルノ道ニ相反可申欵ト奉存候間、速

ニ御釐正有之度候事、

一 敵ニ身代限ノ法ヲ立テ、息銀并返済期限ノ法ヲ不被確

定ハ、末ニノミ規則アリテ、本ニハ規則ナシト可申欵、

依之窮人共家事差迫ルニ至リテハ、遂ニ不可為ノ約束

ヲ取結フ者モ間々有之、詰リ裁判所ノ御手数ト相成ル

事ニテ、乍恐古語ニ云、必也、使無訟乎ノ意ト矛盾ス

ルニ似タリ、コレハ御欠典ナラン欵ト奉存候事、

但民間貸金利息ノ義、通例金百円ニ付壹円ト定額ヲ

被為立即金貳拾五円ニ付、利息、
武拾五錢ニアタルナリ、右ノ外ニ礼金ナソト

称シ高利ニアタルノ分ハ、裁判上御取上ケ不相成

候、尤前文利息ノ外、金三拾円ニ付貳拾五錢、乃

至四拾円五拾円ニ付同断ト、各自ニ約束ヲ相定候

義ハ可為勝手旨被仰出度、右ハ旧習ヲ不脱却ノ処

分ニテ、方今開化ノ民風ニ相背クコトナリ抔ト、

議論蜂起可仕候得共本文ノ情実ヲ極論スルトキハ、敢テ
借者ノ為ノミニ非ス、大ニ高利ヲ貪

リ取テモ、結局元金ヲ耗了シテハ、貸主ノ出納決算モ相立不
申、尤世上ノ高利貸ト唱ヘル者ノ恒言一、疾ク元金ハ取上ルユ

ハ、コノ位ノ損耗ハ余義ナキ抔ト申セドモ、コレ、一切御採
ハ東國均者ノ与スベキニハアラサルコトナラン欵

用無之方可然、是亦風俗ノ頹敗ヲ更張スルノ第一

義ト奉存候事、

一 借用金返済期限ノ義、是亦通例六ヶ月又八十二ヶ

月ト相定、利息ノ收給ハ、必ス毎月々末ニ勘定イ

タシ候様可相心得旨被仰出、尤借主ノ都合ヲ以テ、

右期月ヲ一ヶ月乃至二ヶ月三ヶ月ト相約スルハ不

苦候得トモ、時宜ニ寄り、自然返済方差滞ル節ハ

月々只対談ノ利子ノミヲ支給シテ可ナリ、其時々

証文ヲ書換ヘ、俗ニ踊リ又ハ手数料ト唱ヘル分金

ヲ貪リ取ルコトハ不相成旨、御敵制有之度候ナリ、

一 御裁判上御允許ニテ、原告被告トモ代言人代書人ヲ被

為置候処、逐日種々悪弊ヲ醸出スル哉ニ相聞ヘ、如何

ニモ御不都合ノ筋ト奉存候間、一切御廢止相成ル方可

然、尤病氣幼少ノ者ハ、其事情ヲ弁明スルノ為ニ、親

族又ハ知音ノ者ヨリ代理人差出候義ハ、可為先般布達

ノ通旨、被仰出度事、

但本文代言人共各自馴合罷在、原被ノ際ニ馳驅周旋シテ、私利ヲ營求スルヨリ、双方ノ本人ハ不知不識彼等ノ熟籌ニ陥レトモ、終ニ之ヲ説破スルコトナラスシテ、黙止スル者不少ノ実蹟ハ、疾ニ御探偵相成、御洞察被為在候義ト奉存候、畢竟現今ノ代言人ハ戊辰以前、馬喰町旅籠屋仲間オイテ、俗二公事司又ハ出入司ナソト唱フル者ニ相当仕、右ハ幕府ノ末路糶政居多ノ際ニテサへ、毎々嚴禁申達有之候処、御維新後ハ、却テ公然御允許被仰出ハ如何ノ訳ニ哉、臣愚于今疑団氷解不仕候ナリ、一頃日来、某区内ノ大路ニ遵テ有人、絹傘ヲ傾ケ、革履ヲ踏ミ、後先伴ヲ結テ行ク、説英論仏、漸及国事、甲傲然トシテ笑テ曰、方今裁判上新ニ身代限ノ規則ヲ設置ラル、僕之ヲ蛇ト蛙ト蝸牛ノ抵触スルニ喩ヘタリ、君モツテ如何トスル、抑カノ被告人タル、モシ正直ニシテ薄命ナル者ナレハ、一躓シテハ再ヒ起ルコトノ容易ナラサル、可憫、又金子借受ノ節ヨリ、預メ権諺ヲ

旨トシテ、甘ク財主ヲ誑サント要スル者ハ、月ニ辞シ日ニ謝スルノ末、遂ニ編笠一蓋ヲ投出シテ、自ラ其策ヲ得タリトス、毫モソノ法網ニ罹ルヲ恥辱トセサレトモ、本文金子ヲ借入ルニ、動産等ヲ抵當ニ差出シオキナガラ、又外ノ財主ヘ二重書入ニスルノ輩ハ、自然其実跡發露セントスルノ際、速ニ裁判所ヘ自首シテソノ罰ヲ免レントスル手段ナク、ツマリ終モ有之哉ニ相聞候、実ニ狡黠極矣ト云ヘシ、心事可惡、ツマリ終身郷党ニ齒セラレス、是亦可憫ナリ、原告人ハ一月二兩三人充モ、コノ發落ヲ引受ルトキハ、其ノ所得ハ所失ニ不償シテ、同盟ノ士首ヲ聚メテ、或ハ閉社ノ議ヲ唱フルニ至リ、何レモ皆菜色アルナリ、而シテ朝廷オイテハ、僅ニ印紙ヲ貼用セシメントノ為ニ、却テ冗官ノ月給若干金ヲ費耗スルノ末、只管衆怨ノ府トナル而已、乃是各虫ノ往テ參スル、必ス取次ニ麩死スルト一般、恐クハ不刊ノ良法トハ難申カルベシ、吁智為利昏、其不然乎、乙以目阻之曰、勿敢多言、到丁字街、東西ニ走了、臣尾而聽之、窃有所感焉、因テ此ニ附記スル者ハ、何事ニヨラズ、民情ノ朝旨ニ背馳スルコトナキニ非サルノ実蹟ヲ、御酌量被

為在度奉存候事、

先般王政復古ノ際、列藩ヨリ封土ヲ奉還ニ付、置県ノ令ヲ被仰出ハ、全ク是普天ノ下莫非王土ノ御趣意ニ可有御座、然ル処、府県管下ニテハ、却テ地面ヲ所持スル平民等ヲ地主ト相稱シテ、券状へ歴々コレヲ記載セシムルノ段、如何ナル訳柄ニ哉本文ノ如ク、平民等各自己地主トナルトキ天皇陛下ノ御所有ニハアラサル者ノ姿ニ相成、廢藩ノ舉トハ、一事兩様ニテ名実ノ齟齬スル、コレヨリ甚シキハ無之歟其稱謂ハ旧ニ依テ、家持何之誰ト為名乗候様仕度、右ハ小事トハ乍申、聊名分ニ關係イタス事ユへ、速ニ御改正ノ方可然奉存候事、

一先般官省使府県ヨリ預金取扱御用ヲ被命ノ豪民共へ、相当ノ抵当物ヲ可差出旨、御布達有之候節ノ事ナリキ、当府下ニテ多ク地面ヲ所有スル者共ノ内、何様ノ手続ヲ以テ取計候哉ハ推究不仕ナレトモ、自家ノ量見ヲ以テ、地券ノ金高ヲ勝手儘ニ相改ムルヨリ、一時格外ニ地価ヲ引上ケ候者モ有之、細民共難渋不少ノ趣、遠近ニ相聞候、爾後各区市街ノ景況ニ応シ、最奇分ニテ地

価ヲ令一定、右對門比屋ニ特別ノ高低無之様、篤ト整理シテ可伺出旨、其筋へ被仰付、速ニ御改正相成度候事、

邦畿ハ維民ノ所止ニシテ、米穀ハ是民ノ所仰ナリ、方今ノ形勢ニテハ、万々不可行ノ議トハ奉存候得共、何卒三府市中ノ相場立ヲ速ニ被廢止、凡テ実米ヲ以テ売買スルノ外、空米先売ハ一切不相成旨嚴重被仰出度、其説如何トナレハ、本年奥羽ニテハ川附田面凡十萬石程流作ニ相成ルト雖トモ、其他山附ニテ雨都合宜ク、水利申分無之地方ハ凡十五萬石モ平年ヨリ余計ニ收入可致歟、左スレハ前文損耗差引テモ、先ツ四方石左右ノ豐熟ナラント、彼表ヨリ出稼ノ米商人共相咄候趣及伝承候処、当府下ニテハ、前文ノ景氣ヲ以テ一旦米価ヲ引上ケ、于今ソノ儘居置ハ、詰リ会社中姦商ノ所為ニ出テ、細民ノ困難ハ不啻、マタ可惡ノ甚ナラスヤ、本府ノ其實ニ任スル者、篤ク此辺ニ注意セヨト、御嚴達相成候様奉希望候事、先般置県以來、華族ノ面々ハ、更ニ政務ノ鞅掌ニ關係不

致、間暇無事ニシテ消暑罷在ヨリ老成人ヲ除ノ外、自然

遊蕩ニ耽ルノ輩モ不少、毎々不体裁ノ義モ相聞ヘ候、タ

トヘ家祿八十分一ニ御減省相成トモ、先哲所云、粒々皆

是民ノ膏脂ニシテ、ソノ祖先汗馬血戈ノ功ニ報スルトコ

ロノ者ナレハ、アニ素食シテ止ムベケンヤ、因テ願フ、

自今春秋二次ニ何レモ文武ノ業ヲ大ニ

御試験可被為在旨、

勅詔ヲ以テ被仰出ノ末、ヨク一材一芸ヲ抱負スル者ハ、

其器ニ応シ夫々御擢用被仰付、若不学無術ニシテ不称其

服ノ輩ハ、再三懇切ニ御勸誘有之ニオイテハ、項上ノ一

針、速ニ御取締モ相立、且銘々奮勵激発イタサル、様ニ

可成行欵、是亦華族ノ後進ヲ擁護保全スルノ第一着ト奉

存候事、

右列款ハ臣愚区々ノ誠ニ出テ、自然書不択言ナレハ、頗

ル忌諱ニ触ル義モ不少候得共、杞憂ノ切ナル、巻テ之ヲ

懷ニスルコト能ハス、乃僭越ノ罪ヲ犯シ、謹テ奉言上候

也、

以上

冊子原寸 縦二四糎 横一八糎 二一枚

三六 三条太政大臣より島津左府公へ

元老院議長兼任及其他

二六七八ノ一

(封筒) 島津左府公 実美

(封筒ウラ) 緘

別冊松田大丞より差出候間御廻申候、猶委細同人出頭申

上候様申付候間御聴可給候、勿々不具、

九月廿九日 実美

島津公

御覽後、岩倉江も御廻し可給候、
文書原寸 縦一七・三糎 封筒原寸 縦二四・四糎

横二八・二糎 横一〇・五糎

二六七八ノ二

先般元老院ヲ被設

親臨開院式被為行、數名ノ議官ニ新任被 仰付、弥以同院ノ規模ヲ更張シ、立法ノ大本ヲ被為立候、

歡慮ニ付、島津左大臣江從前内旨之通、速ニ議長兼任御請可有之 思召候事、

但同院章程及人撰等之義ニ付、見込之筋モ有之候ハ、出仕之上可被申立事、

服制建白之末、先般

玉座下ニ於テ前途国計ノ不足ヲ憂へ、上陳ノ趣意ハ尤之義ト被 思召候ニ付、出仕之上、其段 親諭可被為有

御内意之事、

病氣湯治之為、鹿兒島下向願之義は、方今国事多端且議長兼任ノ 思召ニ付、乍氣毒御聞届難相成、扶病朝參可有之 御内旨之事、

文書原寸 縦二八糎 横四一糎

二六九 山階宮晃親王ヨリ島津左府公へ

時候御見舞

(封筒) 左大臣様

侍史中

晃

(封筒ウラ)

(封紙ウラ書) 島津左大臣様

侍史中

晃

次第二冷氣相催候、益御勇健御奉職奉大賀候、抑此一折
龜末乍赤面、時令御見舞申上候驗迄ニ進上仕候、御笑納
被下候ハ、深々畏入奉存候、万々期拜謁候也、

敬白、

亥

九月廿九日

二白、不序之節、折角御厭伏願候、晃無事、乍恐御
放念被下度候、内外御多事種々御苦心ト奉恐察候也、

文書原寸 縦一六・八糎 横四六・三糎

封筒原寸 縦一八・五糎 横五・三糎

三六〇 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

江華島雲揚艦事件

御安全奉賀候、過刻書面差上候処御答書之趣拝承候、雲揚艦之義、殊ニ被差遣候軍艦ニハ無之、兼而支那海測量之為海軍省より出張之軍艦にて、此節も支那海江廻行候ニ付朝鮮西海岸乘廻申候処、不凶右之次第ニ御座候、別段從政府更々被差遣候義ニハ無之候、猶委細ハ拝上可申上不取敢此旨申上置候、草々拝具、

九月廿九日

島津公

実美

文書原寸 縦一七糎 横六八糎

三六一 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

韓固事件

(封紙ウツ書)
島津左府公 実美

別紙電報到来ニ付差進申候、今日評議仕候処、何れ艦長歸京委細言上之上、廟議等可有之、即今之処對韓人民保護之為、軍艦一艘差廻候事急務と評決仕候ニ付此段申上候也、

九月廿九日

二伸、過日差上候書狀史官ニ相命し、文面甚不都合

失敬仕候、此段ハ理申上候、

文書原寸 縦一七・八糎 横六六・五糎

三六二 三条太政大臣ヨリ島津左府公へ

朝鮮事件

御安全奉賀候、然ハ朝鮮事件ハ誠不容易一大事件ニ付、右大臣始參議一同

御前ニ被為召、今般不容易事件出来ニ付而ハ、一同勉勵尽力致候様、訳而御沙汰被為有候ハ、可然奉存候、御相談申候、御同論ニ候ハ、言上可仕候、此段御打合申度

急々如此候也、

九月廿日

島津殿

実美

文書原寸 縦一七・三釐 横六四・五釐

三六三 内田政風ヨリ久光公へ

西郷隆盛上京ノ件

口上

御機嫌克被遊御座奉恐悦候、然は御意は早速御答申上答候処及遷延、実ニ奉恐入候、就而は僕輩苦心之次第も有之、至急ニ難運事情茂御座候間、何卒乍御勝手是より御答申上候迄、暫時御許容被成下候様奉願上候、何分大事件ニ而百方相尽シ候上、不申上候而は遺憾ニ奉存候、旁不悪様御汲取千万奉拝願候、此旨御詫旁申上、勿々以乱筆如是御座候、謹言、

九月廿日

内田政風

上

文書原寸 縦一六・五釐 横五一釐

三六四 華族会館振起方法大略

合三通

二六八四ノ一

昨年諸君同盟ヲ募リ、会館ヲ興シ

勅諭ノ厚キヲ奉体シ、華族ノ義務ヲ尽サント欲ス、此レ寔ニ可悦ノ至ナリ、果シテ同族奮発シ此実効ヲ挙ンカ、実ニ国家ノ美事タリ、然ルニ爾後寥寥、其成績ヲ遂ルノ目的確乎トシテ立ツヲ聞カス、或ハ之ニ同意スルト雖トモ又遂ニ去ル、或ハ之ニ同意スルト雖トモ傍觀ニ近ク、其盛衰興廢ニ注意ナキモノ、如シ、如此因循苟且スル時ハ会館果シテ何ノ功益アル、実美カ前日ノ悦ヒ却テ憂トナルナリ、実美枢務缺掌、屢々此館ニ来ル能ハスト雖トモ日夜忘ル、能ハス、冀クハ諸君、此館ニ従事スルノ目的、且後來館事振起ノ方略等、諸君ノ意見書取ヲ以テ御示有之度、実美共ニ賛成スル所アラン、諸君此旨ヲ了セラレヨ、

実美

会館御中

文書原寸 縦二八・五種 横四一・五種

同族一和スル時ハ振起ノ方法許多有ン、伏テ諒察ヲ乞フナリ、

二六八四ノ二

(表紙)
「答書之写」

明治八年 月 日

竹腰 正美
山内 豊誠
武者小路実世
万里小路通房

過日、会館振起ノ目的御尋問ニ付下拙等協議熟考候処、

最初本館設立ノ節辛未、

太政大臣三条実美殿

勅諭ノ叡旨ヲ奉体シ、同族一般ニ関係候処、同族中或ハ

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 四枚

從ヒ或ハ非トス、夫レ元来私立ノ結社ナレハ仮令之ニ負

クモ、之ヲ董督勸懲スルノ道ナシ、或ハ一二ノ有志者之

二六八四ノ三

レニ座スト雖トモ、安ソ之ヲ振起盛大ニスルノ術アラン

会館振起方法大略

ヤ、依テ思フ、之ヲ振起盛大ニスルハ政府ノ力ヲ借ラス

一会館へ 臨幸同族一体へ対スル 勅諭書ヲ降シ賜リ度

ンハ不可ナリ、夫レ斯館ノ旨趣タルヤ、本上下ニ対スルノ

事、

義務ヲ尽サンコトヲ講究スルモノナレハ、或ハ三大臣臨

勅諭主意ハ華族一体ヲ轄合シ、其本分ヲ尽サシムル

席シテ之ヲ董督スルモ敢テ不可トセス、此法若シ行ハレ、

事ヲ要ス、尤現今会館へ同盟ノ輩ヲ褒シ、猶ホ同盟

外ヲ勸シ、自ラ其褒貶有ルノ旨ヲ含ムヘシ、

但臨幸已前ニ、府下華族一般ハ宮内省ヨリ東京府

ヲ經テ、会館へ集会可致旨御達有之度事、

一三大臣へ勅語ノ事、

勅語ノ次第ハ、会館ニ於テ華族一体へノ勅諭書ヲ降

サレ候ニ付、三大臣中枢務多端ナリト雖トモ、其内

一人当分会館事務ニ従事シ、勅意貫徹候様可致事、

一会館職務ノ事、

華族一体ヲ董督シ其事務ヲ尽サシメ、傍家政品行上

ニモ及フヘシ、

一華族一体ニ関スル事件ハ、總テ会館ニ於テ掌理シ、地

方ニ関スル事件ハ各府県ニ於テ管轄シ、諸布告願伺届

ハ宮内省ヲ經由スヘシ、尤大事件ニ至テハ宮内省ヨリ

正院へ上申スヘシ、

冊子原寸 縦二八釐 横二〇釐 二枚

三六五 朝鮮江華島雲揚艦事件報告 合三通一綴

第一号

雲揚艦ヨリ電信之儀ニ付上申

雲揚艦ノ儀、先般来朝鮮国東南海岸測量トシテ航海申付、

同海岸測量粗相済候末、尚又西海岸ヨリ支那海牛莊辺マ

テ測量トシテ航海申付置候処、今般別紙之通、同艦長并

上少佐ヨリ電報有之候条不取敢御届申上候、猶早々帰京

致シ、委細事実申出候様電信ヲ以申遣置候条、同人帰京

之上、委細上陳可仕候、此段上申仕候也、

明治八年九月廿九日 海軍大輔川村純義

太政大臣三条実美殿

朝鮮興化島釜山ヲ離ルハ、コト、陸地直径九十へ廿日到着、端舟

ヲ卸シ測量セシ処へ彼ヨリ大砲小銃ヲ暴発シタリ、何故

砲発セシカ、上陸尋問セントスレトモ彼砲発勵シキ故不

得止、当艦ヨリ大砲小銃ヲ發シ上陸、彼ノ大砲三拾八、

其外小銃品々持歸ル、城ハ焼失、手負水夫二人、一人ハ

療治不叶、電信ニテハ委細申出難シ、故ニ米國郵船ヨリ

帰京之上申出度ニ付、大至急御指令可被下候、

九月廿八日午前十一時廿五分長崎ヨリ

雲揚艦長

井上海軍少佐

河村海軍大輔殿

第二号

兼テ釜山皇館へ派出相成居候外務官員、今般御引戻シニ相成候哉ニモ承居候処、別紙一号ヲ以御届申上候通、既ニ彼ヨリ暴動致シ候勢ニ付テハ此上ノ事変難測候間、為保護長崎港碇泊之内軍艦壹艘、釜山マテ派出為致可申哉、至急御指令相成度此段奉窺候也、

明治八年九月廿九日 海軍大輔川村純義

太政大臣三条実美殿

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・五糎 三枚

二六六 鳥取県今井鉄太郎ヨリ左府公へ

国家ノ治乱興廢ハ人材ノ有無ニ関スルヲ論ジ

西郷、副島、前原等世四人ヲ列挙シテ復職ヲ

望ム

島津左府公閣下

鳥取県

今井鉄太郎

微臣謹言、

国之治乱興廢スル所以之者、毎ニ賢不肖其所ヲ得ルト得ザルトニ因ル、夫人材ハ朝ニ在レバ朝重ク、野ニ在レバ野重シ、其在ル所天下之權帰ス、古ヘヨリ我王室之盛衰スル所以亦職是之由、将門之関八州ニ窃拠スル、其原因ハ相門压制之四字ニ止ル、頼朝之兵權ヲ攘奪スル、其由来ハ
朝廷大江・三好之徒ヲシテ、其驥足ヲ展ベシメザルニ在リ、徳川氏之顛覆亦以テ徴スベシ、コレ

閣下之熟知スル所、固ヨリ微臣之贅言ヲ待タザルナリ、
国家ヲ為ス者、苟モ斯ニ見ルアラバ何ゾ顛覆之憂ルニ足
ラン、今

王室維新以來已ニ八年、政制未ダ全ク立ズ、国威未ダ全
ク振ハズ、人民内ニ怨畔シ、敵国外ニ跋扈ス、交通之道
一日忽ニス、ベカラズ、微臣謹テ按ルニ、其方法施設之如
キ、枚挙スルニ勝ヘズト雖モ、其要黜陟之二字ヲ以テ第
一着トナスベシ、宋陸游之詩句ニ云、諸公可歎能謀身、
コレ近世有司之心髓ヲ洞視スルモノト云ベシ、能謀身之
結果、必ラス国ヲ誤ルニ至ル、今宜シク院省使庁府県ニ
視テ、コノ能謀身者ヲ黜ゾケ、在野之英傑ヲ
朝ニ網羅シテ鬱屈ヲ懷カシムルナカレ、是レ前日微臣海
江田君ヲ以テ 閣下ニ上申スル所以、 閣下ニアラズン
バ其レ誰ニカ望ン、今在野之英名微臣之知ル所ヲ録シテ、
以テ 閣下ニ進ム、微臣之知ラザル所ハ、人將サニ是レ
ヲ拳ゲントス、伏テ進止ヲ俟ツ、

明治八年九月

今井鉄太郎昧死謹上

西郷大将

副島正四位

前原從四位

福岡孝悌

桐野少将

篠原少将

島本仲道

海江田武二

奈良原 繁

小室信夫

岡本健三郎

谷 重 喜

河田景与

林 有 造

奥平謙介

樺山資綱

高屋長祥

名東県元徳島

高知県

同

鳥取県

高知県

山口県

鹿児島県

高知県

佐賀県

徳久恒範

青森県元津軽

杉山龍江

高知県

弘瀬新一

同

千谷敏徳

石川県元金沢

富樫平太郎

青森県元会津

竹村俊秀

滋賀県元彦根

大東 某

鹿児島県

有馬純雄

同

篠崎 某

鳥取県

湯本文彦

同

茅原信行

同

森田 幹

小倉県元中津

梅谷藤次郎

名東県元徳島

井上高格

山口県

松原音造

栃木県

木呂子退蔵

同

大屋祐義

冊子原寸 縦二四・五糧

包紙原寸 縦二四・五糧

横一七・五糧 四枚

横 二三糧

二六七 琉球藩制度改革ニ付応接經過覚書

七月十四日内務大丞松田道之殿并随行官員衆、本藩城元江被罷出、清国江隔年之進貢、或は清帝即位之節慶賀使差遣シ、且清国より冊封受來候得共自今被差止、且藩内一般明治之年号を封シ、(奉カ)年中之儀礼等総而御布告之通遵行、且刑法定律之通施行可致、因テ右為取調担当之者并学事修業・時情通知之為、少壮之者上京、且藩制改革可致トノ件々、別紙太政大臣御達書并松田殿説明書取添、藩王江御渡相成、且分遣隊被置候と之御達書、先途池城親方等在京之時被御渡松田殿より茂御示諭承知仕、夫々国評之上、分遣隊被置候儀并刑法担当之者、且学事修業・時情通知之為、少壮之者上京等之儀御請申上候、然処支那は五百年來之縁由有之、信義之掛る所ニ而断子絶候儀難致、且年号儀礼茂

皇國・支那江屬居候国柄故、御達通ニ難行、且職制之儀茂致改革候而は政務差支候付、八月五日藩王并撰政・三司官より別紙両通を以奉願候処御採用無御座、別紙説明書被御渡候得共、右之件々はいつれ御免許を得不申候而不叶儀と相固り居候内、松田殿より重而願書差出候ハ、其内内序を設、互ニ見付之程致論談候様被申聞候付、別紙之通手扣書相調、同廿日三司官并物奉行中御吟味役より茂朝官衆出張所江参り、別紙之通手扣書差上致論談、同廿一日別紙両通之通再願申上候処、条理不相立由ニ而御聴許無御座、又々別紙之通説明書被御渡、九月一日城元江被罷出、口述を以段々御教諭有之候上、別紙之通敷御懸合承知仕候得共、支那ト之続は前文通信義之掛ル所ニ而、役方御談判を以進貢被差免候通、咨文到来之上御請仕度、九月三日別紙之通奉願候得共御採用無御座、既ニ数百年來屬シ居候を、何之掛合茂なく断テ絶候而は問罪之使節渡來茂難計、至極及心配、其段茂申上候得共御聞取無御座、然テ直様御請茂難仕候付、政府江成行爲

可申上、官吏上京之儀御免被仰付度、同四日別紙之通奉願候処、御聴許無之願書被差返、此儘奉長候儀、藩中心之安セサル所ニ而同五日、猶又官吏上京之願、別紙両通を以申上候処、御断之前後ニ不取分曖昧之書面難取次由ニ而是又被差返、翌六日ニは別紙之通御教示ニ預り、御征台之儀ニ付謝恩、名代王子并刑律取調・学事修業・時情通知之為上京之者、其他都而藩吏之上京等迄茂被召留候付、同七日藩中之者共不安いたし、多勢相集り那覇中及騒動、朝官衆ニ茂被聞召、其旨趣并人名等申立候様別紙之通御懸合有之、検査させ候処、支那断テ絶候儀憂心之余り、首里・那覇・久米村之者共歎願之為、右次第之段申出、別紙之通及御返答候、右付而は藩中何様之変事可差起茂難計、憂慮罷在為申事候処、随行官員衆之内池城宅江被罷出、支那ト之一条御断之方藩議相固り候止、松田殿帰帆之上、嚴重之御処分被仰付候茂難被黙止、使者を以政府迄願立、御採用於無之は御請可仕ト之事ニ候ハ、使者立は差免候方内々相談相濟候間、吟味を以何

分致返答候様被申付、同九日別紙之通願出候処、朱書通

認直候様(磨滅)□申、左候而是迄之談判相□候付、名代王子其

外官吏上京等召(磨滅)□今度最早和誼ニ向候付被取返候由、

別紙之通(磨滅)□名代使者立之儀は被差免候事、

亥 九月

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 四枚

三六 朝鮮江華島事件電報一通

八年九月廿八日午後七時二十五分 長崎県令宮川房

之ヨリ電報 夜十二時着

ワガ ウンヨウカン。チヨウセン。カイカノミヤコヘ。

トトルソナル。ガワ。サル ハツカ ハツテイラニテ

ソクリヨウノ オリ カレ ダイバ ヨリ ホヲハツ

ツイニ タタカイト ナリ ヨク ニジウイチニチ ミ

メイ。ホンカンヲ ス、メ リクセント ナリ ダイバ

ヲノリトリ。トリテ ジンカラ ヤキハラヒ カレ ハ

イソウ リサンス ヨツテ カイグンシヨウ サイノウ

ヘ カノチ ヒキアゲ コンニチ ニウコウス フサン

ニテモリヤマ イマダ シラザルユヘ ヲシキリギヨセ

ン ニテ ホウチ セリ カスガカン シフク デキ

コンニチ ココロミノリ アリ ミギ モウシアグル、

文書原寸 縦二八種 横四一種

三六 三条太政大臣より島津左府公へ

三条公より左府公へ面談ノ件

(封筒) 島津左府殿 実美

(封筒ウラ)

ル

御安全奉賀候、然ハ今日参上之筈申上置候処、伊太利公

館ニ行向存外隙取、余リ晚陰ニ及候間今日ハ参上不仕候、

明日御参院ニ候ハ、於正院御内談可仕、自然御不参ニ候

ハ、参堂可仕候、御一筆御回答奉願申候、勿々拝具、

十月一日

実美

左府公

文書原寸 縦一七・五種 封筒原寸 縦 一八種

横五六・五種 横五・五種

三六〇 三条太政大臣より島津左府公へ

訪問之件

(封筒)
島津左府殿 実美

(封筒ウラ)
「

御安全奉賀候、然ハ過刻書面差出、家来を以て御承知否
相伺候処御口答之趣拝承候、猶熟考仕候処不軽事柄ニ付
御面晤御賢慮承度候間、夕刻下官参堂仕度差支有無御示
し有之度、尤御書中ニ而御答賜候ハ、別段拝眉ニも不
及候得共、余り軽率ニ涉り候義と存候間、此段申上候、
恐々拝具、

十月一日 実美

島津殿

文書原寸 縦一七・五種 横六五・五種

封筒原寸 縦一八種 横五・五種

三六一 北垣国道ヨリ左府公へノ建白

三失之議。経世之説

伏惟ルニ経世済民ノ事業タル、之ヲ論スル者多クシテ、
而シテ之ヲ施ス者寡シ、蓋シ之ヲ座上ニ論ス可クシテ、
之ヲ実地ニ施ス可キ位ナケレハナリ、惟明君賢相已ニ其
位アリ、又能輿論ヲ採リテ之ヲ実地ニ施スコトヲ得ルナ
リ、方今我国ノ形勢ヲ察スルニ内政未整、會計常ニ不足、
貿易権衡ヲ失ヒ金貨日ニ濫出、随テ上下疲弊シ、民心殆
ト離反ス、誠ニ危急險難ノ秋ナリ、是以論者巷ニ喋々議
者世ニ讒々タリ、其言未タ悉ク是ナラスト雖モ扱テ採用
スレハ、經濟之業ニ於テ裨益ナシトセス、側聞、閣下天
下ノ患ヲ憂ヒ、自ラ国家ノ大事ヲ任シ、広ク衆議ヲ取り、
普ク公論ヲ求メ、以テ今日ノ危険ヲ採ント欲スト、嗚呼、
我蒼生三千万ノ苦楽、一二閣下ノ精神ニ関ス、閣下ノ忠、
閣下ノ誠、誰カ涕涙感戴セサランヤ、国道ノ如キハ愛国

憂世、日夜苦慮ニ堪ヘスト雖モ位其地ニ在ラス、才識固ヨリ淺劣世ニ裨益ナシ、空ク杞人ノ憂ニ屬ス、雖然男兒ノ胸間、宿志ノ期スル所、夢寐モ之ヲ忘ル、能ハス、故ニ三失ノ議・経世ノ説ヲ録シ、謹テ高覽ヲ瀆ス、奇偉特絶ノ見アルニ非スト雖モ、閣下幸ニ国道カ衷情ヲ憐ミ、偶取捨ヲ賜ヘハ何啻国道ノ榮福ノミナランヤ、昧死頓首再拜、

明治八年乙亥十月三日

北垣国道

左大臣島津公閣下

三失之議

窃惟ルニ、方今我国三失之患アリ、人撰公ヲ失フ一ナリ、貿易ノ權衡ヲ失フ二ナリ、人民ノ帰向ヲ失フ三ナリ、官吏ヲ撰フニ其長官ノ私心ニ出テ、正邪曲直ヲ問ハスシテ只我意ニ適スル者ヲ採ル、是以テ大小官衙遂ニ各一部ノ私局ト為ルノ弊害ヲ醸ス、是レ人撰公ヲ失フ所以ナリ、金貨濫出、天下日ニ疲弊、是レ貿易權衡ヲ失フ所以ナリ、

内政不整、會計不足、官吏座食ニ安シテ、国家ノ患ヲ憂トセス、府県牧民ノ道ヲ勉メス、上下交モ疑ヒ人心日ニ離ル、是レ帰向ヲ失フ所以ナリ、嗚呼、此三失、今日ニシテ予防セスンハ、後智者アリト雖モ之ヲ採フ能ハス、能者モ之ヲ助ル能ハス、終ニ独立ノ国体ヲ失ヒ、臣子云フ可ラサルノ際会ニ至ルハ鏡ヲ懸テ瞭然タルカ如シ、然則今日政体ノ是非ヲ撰フニ違アラス、惟主宰者ノ担任力ノ強ト憂国情ノ厚トニ因テ、此ノ大危険ヲ採フ非常ノ功ヲ奏セサルヲ得ス、抑モ立憲政体ノ善且美ナルハ、人能ク知ル所ト雖モ彼ノ彼得大帝ノ如ハ、專制ヲ以テ創業ト守成トノ二業ヲ治メ、以テ魯ノ大富強ヲ致ス、故ニ我主宰者断シテ之ヲ行ヒ、今日ノ危険ヲ軫シテ他日ノ富強ヲ期スル者アレハ、又国家ノ幸福ト云ハサルヲ得ンヤ、立憲政体ヲ以テスルモ、專制政体ヲ以テスルモ、民ノ塗炭ヲ採ヒ、独立富強ヲ致スノ功ハ一ナリ、独り人民ノ權利ヲ抑揚スルノ異ナルアルナリ、故ニ三失ノ危険ヲ採フ可キノ際ニ当テハ政体ノ是非ヲ論スルニ違アラサルナリ、

夫レ三失ノ由テ来ル所以ノ者ハ当路人ヲ得サルニ在ルナリ、何トナレハ内閣大臣及ヒ行政長官、政治ヲ執ルコト既ニ八年、而シテ政治ノ体、立憲ヲ唱テ立憲ニ非ス、專制ニ似テ專制ニ非ス、一種曖昧模糊ノ術ヲ以テ、三千万蒼生ヲ籠絡セント欲ス、已テニ難ニ処スル能ハス、又退テ賢ヲ進ルヲ知ラス、終ニ今日ノ危険ヲ致ス、是レ当路人ヲ得サルニ出ルコト明ナリ、故ニ今日ノ危急ヲ採ハント欲セハ当路ノ人ヲ黜ケ、之ニ代ルニ担任力ト憂国情トヲ兼タルノ人ヲ挙ケ、行政長官ヲ一変シ、地方長官ヲ精撰セシメ、勉テ内政ノ整理ヲ求ルニ在ルナリ、太政大臣其人ヲ得テ内閣人ヲ得ヘシ、内閣其人ヲ得テ行政長官人ヲ得可シ、行政長官其人ヲ得テ地方長官人ヲ得可シ、内閣長官其人ヲ得テ大小官吏人ヲ得可シ、此ニ至テ人撰始テ公ヲ得、政治始テ実ヲ得、牧民ノ術漸ク挙ル可シ、人心漸ク帰向ス可シ、物産漸ク繁殖ス可シ、富強漸ク致ス可シ、而シテ後貿易ノ權衡其平ヲ執リ、金貨ノ濫出其弊ヲ除キ、始テ三失ノ患ヲ脱シ、我獨立ノ國權ヲ不朽ニ張

ルヘキナリ、若シ夫レ薦ムヘキノ人材ニ於テハ、朝野ニ問テ乏シカラサル可キハ之ヲ保スルニ足ルナリ矣、云爾、

經世說

内政ノ整理ハ廟堂ノ確立ニ基クト雖モ、其実ヲ舉ルノ方ニ於テハ地方官牧民ノ能否ニ在リ、何トナレハ民ハ國ノ本ナレハナリ、牧民ノ方其当ヲ得レハ上下相信シ、蒼生各業ニ安シ、物産日ニ興リ、地方年ニ富ムヘシ、地方既ニ富メルハ國家ノ富ナリ、國家既ニ富メハ強兵何ソ難カラシヤ、國富兵強シテ外國復タ我ヲ侮ル能ハス、抑モ牧民ノ方タル、之ヲ人民ニ譬レハ内務省ハ神經ナリ、地方官ハ支體ナリ、三千万蒼生ノ安危苦樂、内務省ノ動作ニ関スルハ、猶ヲ人身智愚能否ノ神經ノ敏鈍ニ関スルカ如シ、雖然支體養生ノ方ヲ加ヘサレハ人忽チ死ス、人死スレハ神經何ノ用ヲカ為サンヤ、支體健康神經敏利ニシテ人非常ノ業ヲ致ス可シ、内務省牧民ノ機軸ヲ執リ、地方官孜孜汲々、人民保護ノ実ヲ勉ムレハ國家富強ノ域ニ至

リ、内政ノ整理始テ成ル可シ、

貿易ノ權衡其平ヲ得ス、金貨ノ外出過多ナルトキハ、數年ヲ出スシテ紙幣頓ニ信ヲ失ヒ、廢紙トナリ、百事挫折、上下困窮、終ニ獨立ノ國体ヲ辱ムルニ至ルハ智者ヲ待タスシテ明ナリ、是方今我國患者ノ尤モ急ニシテ一日モ忽ニス可ラサルノ大事ナリ、此患ヲ拯ヒ、此權衡ヲ執ント欲セハ、外ハ各國ノ條約ヲ改正シテ保護稅法ヲ設立シ、此貿易ヲ限制シ、内ハ勸業ノ方ヲ興シ、以テ物産ヲ繁殖セシメ製作ノ術ヲ開クニ在リ、然ラサレハ何ヲ以テ金貨濫出ノ弊害ヲ脱スルコトヲ得ヘケンヤ、人或ハ云ハン、條約ノ改正甚タ難シト、是レ固ヨリ難カラストセス、雖然之ヲ改正セサレハ我國殆ト亡ヒン、何ソ其難キヲ憚ルニ違アラシヤ、万々難キモ斷シテ之ヲ為サ、ル可ラサルハ、國家人民ノ一大義務ナリ、又自由交易論ノ如ハ我經濟ノ實際ヲ知サル局外說ニシテ、共ニ論スルニ足ラサルナリ、

富強安民ノ術ハ、物産ヲ開作シ地力ヲ尽スヨリ先ナルハ

無シ、故ニ行政ノ事務勸業ヲ最モ急トス、抑モ勸業ノ方タル第一我國從來ノ物産ヲシテ、先ツ減少セシメサルヲ要シ、而シテ漸次之ヲ繁殖セシメ、其製作ヲ善良ナラシメルノ方ヲ講究ス可シ、第二未開ノ物品ヲ各國ニ取リ、之ヲ此土ニ開ク可シ、雖然百物千品一時二業ヲ起ス可ラス、數年ヲ期シテ國家ニ利ヲ見ルヘキ者一二ヲ撰ヒ、大ニ之ニ力ヲ用ヒ、其他ハ適當ノ試驗場ヲ設ケテ其得失利害ヲ考索シ、其我土ニ適應シテ利ヲ失ハサルヲ保ス可キ者ヲ撰ヒ、漸次授業ノ事ヲ為ス可シ、且ツ士族着産ノ方向ヲ定メシムルモ、飢餓ノ窮民ヲ助クルモ、天下ヲシテ無産座食ノ民無ラシムルモ、地力ヲ尽シ物産ヲ繁殖シ、製作ヲ精巧ナラシメ内外貿易ノ權衡ヲ執ルモ、富國強兵ノ根ヲ立ルモ、尽ク勸業ノ実如何ニ在ルノミ、蓋シ數年ヲ期シテ其公益ヲ起スニ足ル可キ未開ノ新事業ニ於テハ、聊カ愚見アリト雖モ一片紙上ニ記シ尽ス能ハサルナリ、節儉ノ法今日ノ緊要ナリ、仮令ハ家屋建築ノ如キ、甲ハ西洋風ニ作ラント云、乙ハ日本様ニテ可ナリト云、日本

様ナル者ハ上等二層ノ普請ニシテ一坪四十円ヲ出テス、
西洋風ナル者ハ中等ニシテ一坪百円ヲ下ラス、況ヤ上等
ノ造営ヲ好メハ其費用際限ヲ知ラス、是レ他ナシ、土木
ノ費用ニ於テ差アルニ非ス、多クハ外国品具ヲ用ヒルト
用ヒサルニ因ルナリ、之二準シテ百事心ヲ用ヒ、外国品
ノ濫用ヲ制セハ、又金貨濫出ヲ防クノ一端ト云可シ、無
用ノ外国人ヲ濫用スルヲ禁シ、外国派出ノ官吏ヲ減省ス
ル等ノ事モ亦節儉ノ一部分ナリ、故ニ節儉ノ方法施ス
ハアル可ラス、

人撰ノ方法ヲ立ルハ国家至重ノ事ナリ、今此法ヲ設ケン
ト欲セハ、先ツ天下一般町村会・区会・県会ヲ開キ、其
議員ヲ公撰シ（仮令初端至当ノ、公会共議国益民利ヲ起シ、公撰ヲ得ストモ）
終ニ国会ヲ開クヲ期ス可シ、然リ而シテ戸長ハ町村会ニ
公撰シ、区長ハ区会ニ公撰シ、議員及ヒ区戸長中ノ人材
ヲ県吏ニ採リ、終ニ行政長官ハ国会ニ公撰シテ上奏スル
ニ至レハ、人撰ノ法漸ク立ツ可シ、
征韓ノ事、志士ノ切齒スル所ニシテ、又国家ノ義務上ニ

於テモ（符カ）黙止ス可ラスト雖モ、先ツ廟堂ノ機軸ヲ固メ、
内政ヲ整理シテ、而後之レヲ処ス可キハ経世ノ大計ナリ、
冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 八枚

三三 徳大寺宮内卿より島津左府公へ

華族会館臨幸式

〔封筒〕欠損
臣島津久光殿

宮内卿徳大寺実則

二六九二ノ一

（割印アリ）

来七日華族会館へ

臨幸被為在候ニ付 臨幸式一通為御心得御廻申候間、御
落手有之度此段申進候也、

明治八年十月五日 宮内卿徳大寺実則

左大臣島津久光殿

文書原寸 縦二七・五種 横三九種

華族会館臨 幸式

一 兼日宮内省ヨリ来ル七日午前第十時

一 聖上臨 幸 勅諭之儀被為在候間、在東京在官非役華族一同、第三大区一小区永田町二丁目二番地華族会館

工午前第九時、礼服用^着、可集會御達之事、

一 聖上午前第九時三十分 御出門、

一 臨 幸之報知ヲ得テ 華族一同奉迎ス、

一 聖上会館工 著御、

一 会館華族役員及尾崎三郎・中村清行奉伺天機、

一 会館役員・三大臣・勅任官麿香間詰、奏任官六等以上・非役華族ノ輩^{奏任七等以下及判任官ハ非役華族ヲ誘導シ}

席ニ列セシム、

一 出御、宮内官員先導、供奉官員並ニ会館役員兩名扈從ス、

一 御着床、在席華族敬礼ス、

一 勅諭、在席華族敬礼ス、

一 三条大臣衆ニ代リ 勅語ノ御書付ヲ拝授ス、

一 一応御休所エ入 御在席華族敬礼ス、

一 三条大臣衆ニ代リ 勅諭遵奉ノ答詞ヲ言上スヘク華族

一同ニ告ク、

一 三大臣及会館發起人中山從一位等十五人ヲ御休所ニ召

シ、 勅語アリ、

一 三大臣及發起人直ニ御請ヲ言上ス、

一 宮内卿ヨリ 勅語ヲ書付ニナシ、三大臣及發起人ニ

相渡ス、

一 聖上更ニ出 御、宮内官員先導、供奉官員並ニ会館役

員兩名扈從ス、

一 御着床、在席華族敬礼ス、

一 三条大臣衆ニ代リ 勅諭遵奉ノ旨ヲ奉答ス、在席華族

敬礼ス、

一 会館有志ノ者議事会ヲナシ 天覽ニ供ス、

一 尾崎三郎特別講義ヲナス、

一 還 幸華族一同奉送ス、

一翌日華族總代トシテ三条大臣・會館役員總代壬生基修

及發起人第一等、官内省工到リ御礼言上ス、

冊子原寸 縦二七・五種

封筒原寸 縦二二種

横一八・五種 二枚

横九・二種

三空 鹿兒島側室村ヨリ久光公ニ上ル覺亮謹占ノ

筮則

一通

(包紙ウツ書②)

「此ま、

御前御側上リ

むら

封

旧九月六日
新十月五日

(包紙ウツ書①)

上

筮則

兌乾坎兌坤兌
一一一一一一
遇萃之解

判曰、上卦兌、少陰ニテ元位ニ在テ和悦スルノ象、下

卦坤、老陰、下ヨリ仰キ万国一斉順フ象、変シテ解ナレハ、六五ノ君、柔中ノ徳、与ニ九四執政大臣ニ陰陽正比シテ相親睦シテ、与ニ九二剛中大臣ニ陰陽而能委ニ任賢良両大臣ニ、則ニ四両大臣并以ニ剛中才力ニ能解ニ天下国家險難ニ象、故ニ名ニ解、象曰、王假ニ有廟用ニ大牲トハ祖先神助、祭則百祥聚、不ニ祭則散スル意、用ニ大牲ニ坤ノ牛ニテ豊厚ヲ云、凡治国平天下ノ事、莫ニ先ニ於聚ニ人心ニ而聚ニ其人心ニ、莫ニ先ニ於忠孝ニ今君能致ニ竭忠孝於祖考邦家ニ、則鬼神感泣来臨也、衆心必四来相聚リ化服セン、四五奸吏勃々前後輩出スト雖、実ニ憂国ノ情義真ニ入ル上ヘハ昭々タル天道、不レ許ニ奸徒私謀ニ、惡臭凝結シテ無為自然ニ肺腑ヨリ吐露シ、失ニ其所ニ意象ナリ、仍正大謹慎ヲ務メ百度不レ乖其ノ威嚴天下ニ溢テ、衆陰来聚リ服ルノ画像也、且醇々明察ノ政ヲ正スル期至ル、故ニ将来ノ康寧判然タリ、十分自己ノ分ヲ尽シ、人心ヲ不レ失、徳望ヲ大地ニ布クヤウニ、深ク

御心ヲ用ヒ給ハ、卦面正真ノ意象也、

乙亥九月六日謹占

臣覚亮百拝

□^(朱)□

文書原寸 縦 三二糎 包紙原寸①② 縦二七糎

横四六・五糎

横四〇糎

三六 琉球使者上京朝旨ノ諭示ヲ請フノ書 二通

二六九四ノ一

先般松田大丞殿藩地江御差渡、御殿達御ケ条之内、於当藩ハ建国来未曾有之大事件ニ而御請難仕処ヨリ、藩王初一同驚恐可否打返シ熟評ヲ遂候得共、何分名分情義ニ対シ、乍恐了解難仕、夫故於御藩元御請仕兼百方苦情歎願、且前件名分情義之履歴、纏々申上候得共御採用無之、歎願向一切御請付不相成、終二藩王代王子其他上京御差止ト相成、諸港出入之船々迄茂御達之趣有之、前件殿命之条々御受不仕候得ハ、嚴重之御処分被仰付ト之御事ニ而柔弱之小藩、上下失胆恐縮之至ニ不堪、乍去藩王初官役

之者共、御達之

朝旨ヲ了解不仕、其儘御受仕候而ハ名分ニ相関シ、從而偏藩井蛙之人民説論駕禦方ニ茂不都合相成候趣ニ立到候而ハ、猶更奉恐入候付此節私共江上京被申付、於闕下危急存亡之藩情、具ニ言上仕

御殿令之 御旨趣詳ニ拝承了解之上、御請仕候心得ニ而奉願趣御座候処御差許ニ相成、一同上京仕候次第御座候、就而ハ内外御多忙之御時節柄、誠ニ奉恐入候得共、出格之御憐愍ヲ被加孤藩之人情御汲取、

朝旨明白之御説論被成下候様奉願候、尤御説論之次第ニ因リ、更ニ歎願可仕儀茂可有御座候、此段茂合テ奉恐願候也、

明治八年十月七日

親里親雲上

内間親雲上

喜屋武親雲上

幸地親方

与那原親方

池城親方

太政大臣三条美美殿

冊子原寸 縦二七糎 横一九・五糎 二枚

二六九四ノ二

本文書八二六九四ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二七糎 横一九・五糎 二枚

三六 板垣退助ノ上奏文

臣板垣退助。

謹ンテ奏ス。臣猥リ二不才ヲ以テ。陛下ノ寵眷ヲ辱シ。維新ノ際。曾テ微シク犬馬之勞アルヲ以テ。廢藩之後。復タ擢ンデ頭職ニ居ル。臣日夜感激。庶クハ誠衷ヲ竭尽シ。以テ 聖明之治ニ裨補スル有ンコトヲ。臣性慙愚。論事切直。明治六年癸酉十月。朝鮮之事ヲ言ヒ。不幸ニシテ在廷諸臣ト議合ハズ。是ヲ以テ遂ニ臣ノ職ヲ辞ス。然ニ臣区々ノ忠。唯国ヲ謀ツテ以テ陛下ニ尽スニ在ル而

已。故二七年申戌一月。復タ左院ニ由テ上言シ。国家治安ノ道ヲ論ス。即チ臣カ身政府ノ内外ニ在ルヲ以テセズ。臣ノ志未タ嘗テ一日モ 陛下ニ報ル所以ンノ者ヲ念フニ在ラズンバアラサル也。本年三月。臣適々參議木戸孝允ト大坂ニ会シ。相共ニ国家ノ事ヲ論シ。大ニ臣カ嚮キニ上言セシ所口ト相合フ者アリ。臣頗ル臣カ意見。在廷諸臣ト其婦ヲ一ニスルヲ喜ブ。次テ本年三月。太政大臣三条美美。臣ヲ其家ニ招ク。木戸孝允等モ亦タ在リ。遂ニ臣ニ示スニ其政府ヲ改革スルノ略ヲ以テス。即チ立法ト行政トヲ分ツノ事ナリ。而シテ其行政ヲ改革スルノ道ニ就キ。特ニ又タ臣ニ論スニ内閣ヲ各院省使ヨリ分離シ。各參議ノ院省使長官ヲ兼任スルヲ廢シ。内閣ハ則チ純然トシテ大臣及ヒ三四參議。陛下ヲ輔弼シテ。天下ノ大政ヲ總理スルノ処ト為シ。以テ各院省使ヲ統ブ。如此ケレハ則チ政府ノ間。始メテ其頭首アルガ若ク然リ。施政其序ヲ得テ紊レズ。庶クハ現今内閣。文書紛冗。金穀雜沓ノ府タルノ弊ヲ除キ。其ヲシテ從容ト天下方機ヲ謀議

スル。真成内閣ノ体ニ称ハシムルコトヲ得ント云ヲ以テシ。復タ之ヲ申シテ曰ク。是レ既ニ政府ニ議決スル所ノ者ナリト。尋ヒテ 陛下親ク臣ヲ召シ。臣カ意見ヲ陳セシメ。而シテ臣ニ勅スルニ臣ノ言ヲ用ルヲ以テシ玉フ。臣於是テ愈々益々感激。遂ニ復タ職ヲ現任ニ奉ズ。乃チ木戸孝允・大久保利通・伊藤博文等ト俱ニ政体取調ノ命ヲ奉シ。三月廿八日ヲ以テ之ヲ太政大臣三条実美ニ呈ス。已ニ而シテ 陛下四月十四日ヲ以テ。大詔ヲ渙発シ。元老・大審二院ヲ設ク。是ヨリ先キ実美及ヒ孝允等。臣ニ告ルニ内閣ノ分離。亦タ必ラズ当サニ之レト俱ニ発スヘキヲ以テセリ。是ニ至テ復タ臣ニ謂テ曰ク。元老院已ニ設クト雖モ。然ニ猶未タ開院セズ。立法行政ノ分割。猶未タ立タズ。而シテ今遽カニ内閣ノ分離ヲ行フ。恐クハ却テ紛擾ヲ取ラン。故ニ若カズ姑ラク伊藤博文ニ命シテ。先ツ各院省使ノ事務章程等ヲ取り調ラベシメ。以テ元老院ノ開院ヲ俟チ之ヲ行シニハト。七月ニ至リ。元老院乃チ開院ス。而シテ内閣ノ分離ハ則チ中口止ム者ノ如

シ。或ハ其説ヲ依違シテ。反テ之ヲ沮ム者アルニ至リ。伊藤博文ノ取り調。亦タ兩月ヲ亘ツテ。総テ聞ク所口莫シ。於是テ臣窃ニ惑フナキ能ハズ。太政大臣三条実美ニ言ヒ。此ノ分離ヲ促ス者数次。適マ臣モ亦タ疾ニ罹リ。日ニ參朝スル能ハズ。然ニ時ニ朝スレバ則チ必ラズ之ヲ実美ニ言フナリ。而シテ遷延遂ヒニ決セズ。然ニ臣衷誠。深く自ラ信ズ。内閣ヲ各院省使ヨリ分離スルニ非ルヨリハ。則チ政府ノ事。復タ能ク臣ノ之レニ堪ル所口ニ非ズ。何ントナレバ。向キニ 陛下神斷シ。以テ立憲ノ政体ニ法リ。立法ノ官ヲ設クト雖モ。然ニ先ツ着手シテ行政ヲ整頓スルニ非レバ。未タ遽カニ其実ヲ挙ケ易カラズ。故ニ誠ニ政府ノ事ヲ更張セント欲ス。必ズ先ツ内閣ノ分離ヨリシテ始メズンバアル可ラズ。蓋シ參議ニシテ各院省使ノ長官ヲ兼任ス。夫レ參議ハ。大臣ニ次キ。万機ヲ參贊スル官ニシテ。實ニ天下ノ重任ナリ。各院省使ノ長官モ亦タ天下ノ重任ナリ。夫レ一人ニシテ是ノ兩重任ヲ負フ。尋常才智ノ能ク之レニ堪ル所口ニ非ズ。況ヤ維新以

来。其日タル猶淺ク。万事艸創。各院省使ノ事務。復タ殊ニ繁冗ヲ極ルヲヤ。是レガ時ニ方テ。各院省使ノ長官タル者。誠ニ其ノ当該ノ事務ヲ挙ケント欲ス。夙夜其間ニ孜々勉務スルモ。日尚ヲ且ツ足ラサラントス。且ツ参議ハ数人分任ノ官ナリ。各院省使ノ長官ハ。一人專任ノ官ナリ。人各々其專任スル所ロニ勤メ。而シテ其分任スル所ロニ疎ナル。亦タ勢ヒ已ムヲ得ザル者ナリ。是等ノ弊。遂ニ内閣今日ノ振ハザルヲ致ス。是レ苟モ政府ヲ更張セント欲ス。内閣ノ分離。即チ亦タ其本タル所以ンナリ。故ニ臣 陛下ノ寵眷ヲ辱フシ。誠ニ臣ノ良心ニ愧ル所ロ莫ラント欲ス。臣堅ク此説ヲ執ラサルヲ得ズ。是レ即チ臣 陛下ニ忠スル所以ノ職分ナリ。本月四日。陛下正院ニ臨幸シ。親ラ臣ニ論スニ。今ヤ朝鮮我軍艦ヲ砲撃シ。両国ノ交際將サニ危カラントス。其レ愈々諸臣ト同心協力セヨト云フヲ以テシ玉フ。嗚呼臣退助。陛下此勅ナシト雖モ。在廷諸臣ト同心協力シ。縱令ヒ身骨ヲ粉砕ニスルモ。誠ニ能ク 陛下ニ報スルアラバ。亦

臣ノ至幸也。但臣切ニ謂フ。苟モ内閣ヲ分離セズ。其ヲシテ依然トシテ所謂ル文書繁冗。金穀雜沓ノ府タラシム。其無事ノ日ニ在テスラ。尚ヲ且ツ彼レノ如ク其レ不可ナリ。矧ンヤ一旦有事ルニ於テヲヤ。臣故ニ 陛下ノ前ニ於テ。復タ之ヲ太政大臣三条実美ニ切言シ。以テ其速ニ内閣ノ分離ヲ行ンコトヲ請フ。而シテ実美之ヲ然リトシ。臣ニ応スルニ速カニ之ヲ行フヲ以テセリ。是レ皆ナ 陛下ノ親知スル所ロナリ。然ニ本月七日ニ至リ。実美復タ遽カニ其説ヲ變シ。臣ニ謂テ曰ク。予固リ内閣ノ分離ヲ以テ是ト為セリ。然ルニ今ヤ朝鮮ノ交リ或ハ將サニ破レントスルノ際。予反テ其不便ヲ生センヲ恐ル。故ニ以為ラク姑ラク之ヲ延ヒテ無事ノ日ニ至ルヲ俟チ。然ル后チ之ヲ行フニ若カズト。子以テ何如ント為ス。夫レ内閣ノ当サニ分離セザル可ラサルヤ。今復タ臣ノ故ラニ之ヲ言フヲ須ズ。且ツ無事ノ日。尚且ツ之ヲ分離セズンバアル可ラザル者。反テ今將サニ有事ントスルノ日ニ分離ス可ラズ。臣実ニ其何ノ謂ナルヲ知ラズ。臣益惑フ。故ニ謹

デ茲ニ此ヲ具シ。奏聞シ。進止ヲ取ル。庶クハ陛下。臣ノ衷誠ヲ垂鑑シ。以テ乙夜ノ覽ヲ賜ンコトヲ。臣退助感激屏營之至ニ勝ヘズ。

明治八年十月十二日

冊子原寸 縦二八・五糎 横二〇・五糎 五枚

二六六 三条太政大臣より島津左府公へ

華族会館へ出頭の件

(封紙ウツ書) 島津殿 実美

ノヽ

御安全奉賀候、然ハ会館江徳大寺・柳原代理出頭相頼置候処、柳原義眼疾ニテ出頭難相成候ニ付東久世江も相頼候様仕候ハ、都合宜候ニ付、此段申上度如此候也、

十月十三日

文書原寸 縦二八・五糎 横六五糎

二六七 鳥取県士族湯本文彦ヨリ左府公へ

天下ノ憂ハ却テ内憂ニ在ルヲ論ス

(封筒) 東京 鳥取県士族 (朱「文彦」)

左大臣島津公閣下 湯本文彦 (朱「文彦」) 稽首再拜謹上

(封筒ウツ) 執事御中 稽首再拜謹上

(朱「文彦」) 鳥取県第一大区小八区四百四番地

〇 〇 〇 〇

鳥取県賤臣湯本文彦稽首再拜謹上書于

左大臣從二位島津公閣下、臣去年以建言之事辱

閣下之厚答感激銘骨、益思報効日待其事、至四月一日、

遂又書迂衷、以汗清高、其後県人今并鉄太郎拜謁白事、

閣下忝存問、臣且賜高諭、曰、今將參朝從事、其宜領

此意、臣聞命雀躍自喜不已、曰、閣下而出則天下之事

不足復憂也、已而未及聞革新之事、而韓地之事既発矣今

閣下出而從事、韓地之事亦如彼、実天下有為之機而亦不

可不為之秋、雖臣下驚、誠宜星夜電行、仰贊偉孝以奔走

其間然而沈痾未愈、衰羸殊甚意馬空馳、延領東望帳然泣下也、夫韓地之事、天下固有公論不須、臣嗷嗷然、臣之所大憂、則不在韓地而在外邦、不在外邦而在內事也、古曰、知彼知己百戰不危、今議者知彼之可伐、而不知我之未可以伐、知韓地之不足恐、而不思外邦之不可以不虞、今天下之事果為如何也、然欲以之比癸酉之時、是非知己之未可以伐乎、去年支那之事、且為英國所周旋、今免事於韓地、則清英魯國各乘隙而起、或陽助其勢使之交爭、或隱阻其事使之危疑、或兩利而使兩弊、或商恩以收其權、若如是則怨結於隣敵、利歸於強國、我國勢未能不聽之、豈非不思外邦之不可以不虞乎、其幸無有此事、征討大興或有兵連禍結、內地疲弊亂民怨畔、奸雄乘之而起、不知何以治之、若或有軍將擁兵不動抗、表乞正內、不知何以制之、故曰、臣之所大憂、不在韓地而在外邦、不在外邦而在內地也、雖然臣亦固主征韓者、豈不欲雪國辱以發揚皇威於海外乎、唯獨長慮却顧不能無所憂也耳、臣實謂閣下之當、此時在具胆之重職、任天下之安危者、皇天

之所以眷祐 皇祚保護 朝廷、而如韓地之事、則閣下大有為之資也、語曰、日中必斲執刀必宰可為而不為反受其禍、伏願、閣下乘此機、因此資斷然英堯補佐 聖天子、改紀大政、正內治本、則廟堂正而大政立綱紀張、而人心一賢者在位能者任職、則所為而成所施而立、国力強盛 兵備充實、威稜之所加敵國已服、然後鼓天下之公憤、資天下之全力、問罪於韓地、伸屈於歐米、則可以揚皇威於宇內、措宗社於富岳之安也、語曰、時乎時乎、時不再來、唯 閣下察之、臣干黷威嚴無任激切屏營之至、

明治八年十月十四日

鳥取県士族

臣湯本文彦(朱、文彦)

再拜稽首謹上

冊子原寸 縦二八糎

封筒原寸 縦二〇・五糎

横二〇糎 三枚

横 八糎

三六 秋田県士族小松弘毅ヨリ左府公ヘノ建言

北海道開拓ト警備、邏卒ヲ巡查士ト改称シシ

族ヲ任スル事、琉球ニハ暫ク旧制施行ノ事

〔封筒〕
謹上

小松弘毅

〔欠換、百拜マ〕

〔封筒ウラ〕
封

封

方今至急ノ事件ト慮シテ、機密ニ管スル故ニ他

ニ委セス、奉汚

尊聡、大東有志ノ士、誠ニ尊 公如北辰、請了察

センコトヲ、

一北海道ハ魯亜ニ近シテ緊要ノ地ナリ、其險隘ハ天造自

然ノ長城ナリ、故ニ開拓ノ方ハ其要衝ノ險ヲ残シ、防

禦宜キ便ヲ見計ヒ開闢スヘシ、五穀ニ乏ケレハ食ニ当

ツ可モノヲ植ヘ、牛羊ヲ野畜スヘシ、人衆寡適セサレ

ハ守リ難シ、今マ急ニ多衆ヲ充ツヘカラス、近来家祿

奉還ノ者ハ商法ニ利ヲ失ヒ、遊蕩ニ空ク費シ、挙家養

育ノ難モノ諸県多ク有リ、区戸長ニ詳細ニ調ヘサセ、

資金ヲ失フ者ヲ明春暖和ノ候ニ乘シ、北海道ニテ地ヲ

与フヘシ、且ツ六年迄資金ヲ賜リ、七年ヨリ家祿ヲ賜

ランコトヲ請モノ有ラハ、此モ北海道ニテ地ヲ賜フヘ

シ、其他ハ諸県村市空手ニテ俗ニ小間居モノ一文商ノ

者モ調テ此ノ地ニ移シ、業ヲ与ヘテ可ナリ無資ノ士、無
手ノ民ハ、窮

スレハ盗ヲ為シノ徒ナリ、東京中ヲ大觀スレハ、空、右ノ内ニ士

手ノ民多キヤニ見ユ、徒ラニ衆庶ノ輻湊ハ害アラシ

ハ区長ヲ立テ、平素ハ開拓ヲ勸メ、操練ヲ励シ、文武

ヲ学シム、平民ハ工商ヲ励スヘシ、右防禦経界ノ方ハ

其人ヲ撰テ全島ヲ委スヘシ、若シ全権ノ賢ヲ遣シトキ、

弘毅願ハ僕従トシテ随ワンコトヲ許サル、トキハ大幸

ナリ、

一 巡查ハ日本中都鄙村市ニ充ント為ハ幾巨万ノ費アリ、

士ハ即今定職ナキヲ以テ文武ノ宜キモノヲ撰ンテ巡查

ヲ務メスムヘシ、邏卒ナト、賤名ヲ除キ巡查士ト称ス

ヘシ、最モ等級ヲ分テ其下等ハ賤役ニ役シテ可ナリ、

然ラハ盗ハ自ラ滅シ、有事トキハ兵ト為テ可ナリ方今
士ヲ

撰ハスシテ、長丈ノ徒ノミヲ撰ミ巡查トス、或ハ兵役トス、空ク給金ヲ費ノミ、其実用ナシ、長丈ノ人ニ非ストモ文武ノ秀タルヲ用ヘハ実効アリ、壯強ノ平民ハ田畑ニ力役シテ効アリ、土ハ生テ国事ニ死ヲ知ル、其怯懦ナルモノモ恥シメテ使フトキハ平民ニ賢レリ、況ンヤ怯懦ナラサ、然ルトキハ月給モ多ク与ヘズトモ勤ムヘシ、其軍伍ノ編制ハ区长ヲ主管トシテ、常ニ操練ヲ委シテ可ナリ、故ニ巡查ノ職アル士ハ裁判官ニ属スレトモ、軍伍ノ制ハ巡查職アル者ト雖モ区长ノ責タルヘシ、

一 琉球ハ日本版図内ナルコト明ニ万邦ニ示シ、其国君ハ旧ノ如ニ其地ニ君トシテ治メスムヘシ、郡県ノ制ニ泥ミテ君ヲ移サントセハ、必ス一難ヲ生スヘシ、其衣服制度モ其風習ニ随シメテ可ナリ、然ハ内地ノ制ト違テ制一ナラサルノ論アルヘケレトモ、内地トテモ、諸県頻々トシテ蠢動ノ機アルハ、華士族ノ所ヲ得サルニ在リ、只今華族ノ方ハ無学無識ノ人多シ、其大諸侯ヲ撰テ先ツ八方ニ鎮セシムヘシ、最モ旧藩ニ旧君ヲ復スヘシ（仙台・南部ノ如キハ朝廷ノ頭官、或ハ皇族ノ秀ヲ用ヘキ歟）、其他ハ小諸侯ハ学ノ成ルニ随テ追々復土セシムヘキヲ令スヘシ、最モ諸県ノ租税ハ大蔵省ニテ管轄シテ可ナリ、然ルトキハ琉球ニモ

障ラス、琉球地ノ租税ハ漸ク以テ制ヲ立ヘシ、必シモ内地ノ如ク収斂（徴）為ントセハ必害アラン、

明治乙亥十月十六日

秋田県第一大区三小区四百五十一番地小松直之准父應居當時東京西ノ久保桜川町二番地松野金治方ニ寄留

小松弘毅

百拝

冊子原寸 縦二〇・五種

封筒原寸 縦二二種

横 一四種 五枚

横七・五種

云々 三条太政大臣より島津左府公へ

参議諸省卿分離之件

（封筒）

島津左府公

実美

（封筒）
封

レ

秋冷相加候処益御安全奉賀候、然ハ分離一条ニ付昨日も御来書之処、他出中ニ而不捧御答、多罪之至御海宥可被下候、猶一兩日中御決裁之

御沙汰被為有候様奉願置候間、自ら不日

御沙汰可被為有事と存候間、此段乍延引御答迄、如此御

座候、艸々拝具、

十月十七日

実美

島津殿

文書原寸 縦一七纏 封筒原寸 縦一八纏

横六一纏

横五・五纏

三〇〇 徳大寺実則卿ヨリ島津左大臣へ

参内ノ件

(封筒)

「左大臣殿

徳大寺実則」

(封筒ウラ)

緘

」

益御安泰奉賀候、陳は明日午前十時

閣下御用召、定而御参内之筈トハ奉存候得共、頃日来御

所勞之趣二付、自然御不参も難計候間、明日御用召、御

所勞タリトモ被相扶、推而も御参候様

御沙汰二付、從小生此段及拝啓候、恐々頓首、

十月十八日

左大臣殿

実則

文書原寸 縦一七纏 封筒原寸 縦一七・五纏

横五二・五纏

横六・五纏

三〇一 久光公ノ三条相国弾劾文ノ一部

公書翰ノ一部共二通

(包紙ウラ書)

「久光公御上書ノ一節」

二七〇一ノ一

昨夕は華墨御投与忝拝読仕候、然は先日は御来臨之處、

例之愚論申述、嘸御笑止ニ可有之と恐縮仕候、右二付

縷々之御教示承知、痛入次第第二御座候、且高祿

(後欠)

文書原寸 縦一九纏 横五一・五纏

二七〇ノ二

(前欠)

一事ノ行ハル、アラス、且右大臣巖倉具視其間ニアリテ、
首鼠両端譎詐百出ナリ、嗚呼大臣トシテ如此ナルハ国家
衰運ノ然ラシムル所トイヘトモ、亦臣ガ不肖ニシテ、是
ヲ調和スル能ハサルノ致ス所ナラン、然リト雖モ

陛下今日臣カ言ヲ用テ彼輩ヲ黜ケ給ハスンハ、皇国
ハ終ニ西洋各国ノ奴隸タランコト、鏡ニ掛テ見ルカ如シ、
実ニ危急存亡ノ秋ナリ、臣空ク大臣ノ職ヲ穢シ傍觀坐視
スルニ忍ヒス、因テ先ニ一封ノ書ヲ上リ愚衷ヲ陳述ス、
今ニ至ルマテ可否ノ

勅諭ヲ拝承セス、然ルニ再ヒ忌諱ヲ憚ラス、謹怒ヲ畏レ
ス、国家ノ為ニ鄙言ヲ吐露ス、

陛下若シ臣カ言ヲ疑ヒ、速ニ

観念ヲ定メ給ハスンハ、臣退テ、可否ノ

勅裁ヲ待奉ランノミ、臣恐悚ノ至ニ堪ス、伏シテ斧鉞ノ
罪ヲ待ツ、臣久光誠恐誠惶頓首敬白、

明治乙亥十月

左大臣從二位臣島津久光

上 押

文書原寸 縦 二二糎 包紙原寸 縦二八・五糎

横 一七〇糎 横 四一糎

三三三 久光公ノ三条太政大臣彈劾上奏書

扣書共三通

二七〇ノ一

(包紙ウツ書)
一建言

乙亥十月

左大臣從二位臣島津久光

誠恐誠惶謹テ上言ス

夫政治ノ要タルヤ、廟議一和シテ万民ヲ保安スルニアリ、
然ルニ太政大臣三条実美百官統轄ノ術ニ乏ク、事務ヲ行
フ忽卒遅緩ニ流レ、黜陟ノ典、情実愛憎ニ出テ、不信ヲ

海内ニ示シ、苛令重斂、人心疑懼、怨懟ヲ抱キ、已ニ瓦解ノ形ヲ生ス、且參議ノ輩ハ各省ノ長官ヲ兼任シ、皆自ラ恣ニシテ無用ノ冗費ヲ厭ハス、不急ノ土木ヲ起シテ國家ノ衰頹ヲ顧ミス、人民保護ノ実ナク、外交モ亦其宜ヲ失ヒ金貨濫出、遂ニ輕侮ノ勢ヲ致シ 皇國已ニ不測ノ禍ニ陥ントス、故ニ大ニ英斷ノ政ヲ行ヒ、億兆ノ耳目ヲ一新セサレハ 皇運ヲ挽回スル能ハサルハ有識ノ士ノ知ル所ナリ、然ルヲ実美一毫モ顧念セス、因循姑息、非ヲ遂ルコト益確ク、愈外國ノ鼻息ヲ仰カントスルカ如シ、長息ノ極ト云ヘシ、今般板垣退助ノ建言、其當ヲ得タリト云ヘシ、然ルヲ実美事ヲ左右ニ託シ、遷延已ニ数月ノ久キヲ経テ、遂ニ朝鮮ノ事起ルヲ幸トシテ
陛下ノ聡明ヲ眩惑シ奉リ、之ヲ拒ムニ至ル、夫朝鮮ノ事タルヤ、廟議一和セサレハ举措必當ヲ失フヘシ、今政府責任ノ大臣ナク、只參議ニ依頼シ、參議ハ党援相結ヒ、紛紜錯雜、何ヲ以外征ニ違アラランヤ、早く其兼任ヲ罷メ其人員ヲ減シ、廟議一致、政体粲然タラシメ、而後外征

ノ事ヲ議スヘキナリ、夫実美已ノ責任ヲ忘レ、何ヲ以方機ヲ掌ルコトヲ得ンヤ、唯実美ノミナラス各省院使寮、府県ノ長官等モ皆責任ナシ、若シ事故アレハ罪ノ歸スル所ナク、皆非ヲ

天皇陛下ニ帰シ奉ル、不臣ノ至ト云ヘシ、夫如斯ナレハ蒼生何ヲ以安堵シ、國基何ヲ以鞏固ナランヤ、實ニ慨嘆ノ極ナリ、伏シテ惟レハ、天下ハ

天祖ノ天下ニシテ

陛下ハ

天祖二代ラセ給ヒテ、万民ヲ統御シ給フノ 御大任ナレハ、速ニ其根源ノ宿弊ヲ一洗シ給ヒ、上ハ

天祖ノ神慮ヲ安ンセラレ、下ハ億兆ヲ撫育シ給ヒ、宝祚ヲ不朽ニ伝ヘ給フコソ 御孝道ノ第一ト申奉ルヘケレ、臣去年以來重職ヲ辱シ、眼勉從事シテ 洪恩ノ万一ヲ報シ奉ラント欲シ、実美ト議スルコトアリト雖モ、曖昧糲糊、未タ一事ノ行ハル、アラス、嗚呼、太政大臣トシテ如此ナルハ、國家衰運ノ然ラシムル所ト雖モ、亦臣力不

肖ニシテ是ヲ調和スル能ハサルノ致ス所ナラン、然リト
雖モ

文書原寸 縦 二二種 封筒原寸 縦 二五・五種
横 四六五種 横 七・六種

陛下、今日臣カ言ヲ用テ実美ヲ黜ケ給ハスンハ、皇国
ハ終ニ西洋各国ノ奴隸タランコト、鏡ニ懸テ見ルカ如シ、
実ニ危急存亡ノ秋ナリ、臣空ク大臣ノ職ヲ穢シ傍觀坐視
スルニ忍ヒス、因テ先ニ一封ノ書ヲ上リ愚衷ヲ陳述ス、
今ニ至ルマテ可否ノ

二七〇二ノ二
(包紙ウツ書)
「恭奉」
親展
左大臣從二位臣島津久光
封

勅諭ヲ拝承セス、然ルニ再ヒ忌諱ヲ憚ラス、謹怒ヲ畏レ
ス、国家ノ為ニ鄙言ヲ吐露ス、

本文書ハ二七〇二ノ一号文書ト大略同文ニ付省略ス

陛下若シ臣カ言ヲ疑ヒ給ヒ、速ニ

文書原寸 縦 一六・五種 包紙原寸 縦 三三種

叡念ヲ定メ給ハスンハ、臣退テ可否ノ

横 一三三種 横 二八・五種

勅裁ヲ待奉ランノミ、臣恐悚ノ至ニ堪ス、伏シテ斧鉞ノ

罪ヲ待ツ、臣久光誠恐誠惶頓首敬白、

明治八年十月

左大臣從二位臣島津久光

乙亥十月十九日 差上置候処

拝

同廿二日 御採用無之と

上

御沙汰ニ而御下ケ相成候事、

本文書ハ二七〇二ノ一号文書ト大略同文ニ付省略ス

文書原寸 縦二一・五糎 包紙原寸 縦二九・五糎

横 三五九糎

横三五・六糎

三〇三 久光公ノ三条太政大臣彈劾上奏文

徳大寺実則卿手写

本文書ハ二七〇二ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一八糎 横二六三糎

三〇四 三条相国ヨリ岩倉右府へ

久光公ノ彈劾上奏ニ付

御安全奉賀候、過刻ハ御病中江出頭御妨申ハ迷惑と奉恐

入候、扱左府上書之義、眼目ノ趣意下官江黜候義建言之

事ニ付、下官より敢而発論も難仕、尤於

皇上御採用不被為有義ハ不容疑候得共、世上ニ流布致候

而は甚於下官も心ニ不快、全議奏ニ逢候も同様ニ付、此

儘明了之

勅裁も不被為有候而は、於下官も奉職罷在候事難相整候

間、何卒速ニ可否之御決裁被為有候様偏ニ渴望仕候、因

循日を送り、僻遠ニ伝播致候節ハ必ず人民之方嚮ニも関

涉仕候事顯然ニ付、此儀ハ御迷惑と奉存候得共、尊公能

御輔贊不得止御場合と奉存候間、呉々御尽力奉折候、右

不得止衷情打明及拜啓候、宜御周旋奉願度候、勿々、

不具、

十月廿日

実美

巖公

文書原寸 縦一七糎 横八四糎

三〇五 有栖川宮熾仁親王御建白書

(包紙ウツ書、巻)
明治八年十月廿二日

有栖川宮御建白

熾仁誠恐誠惶頓首、謹テ当今ノ時勢ヲ察ルニ、内ハ人心

大政ニ安ンセス、外ハ各国交際ノ大事アリ、天下ノ危急
此時ヨリ大ナルハナシ、加ルニ近時朝鮮ノ事発セシヨリ、
人心恟々、下民ノ疑惑日又一日ヨリ甚シ、即今ノ時ニ会
シ大臣内々和セス、廟議紛々、一是一非、互ニ党与ヲ擁
シ、

皇国ノ安危又此時ヨリ急ナルハナシ、故ニ熾仁不敏ヲ不
憚、先般愚衷ヲ建言シテ三大臣ノ共和ヲ主トシ

皇国ノ危急ヲ輔佐裁制シ奉ランコトヲ仰望ス、後又中山
従一位以下数名ヨリシテ、内外輸出入ノ不均、大蔵ノ空
乏等ヲ憂慮シ建白スルト雖モ、急速御採用ノ廉モ無之、
去日板垣退助ノ建白中、參議ニシテ省長ヲ兼ル、其弊害
不尠等之事ヲ論シ、併せて目下時世變動ヲ憂慮シ、聖
衷ヲ悩マシ奉ラムコトヲ建言セリ、然而シテ太政大臣ヲ
始メ、朝鮮ノ事起ルニ会シ、紛擾之中又之ヲ擯棄シ、加
之先般左大臣島津久光ヨリ建白ノ趣

皇国政治ノ急務ヲ論スルヤ、其立意固ヨリ
皇威ノ衰頹ヲ憂へ、万国ノ侮辱ヲ蒙ラサルノ意ニ出ツ、

其言ニ就テ利害得失ヲ較量スレハ、国家ノ裨益渺シトセ
ス、然而シテ三条大臣ニ於テ安然之ヲ裁決セス、因循模
稜捨テ今日ニ至リ、拾救スヘカラサルノ大事ニ至レリ、
謹ンテ考フルニ、大臣内々和セスシテ外万国ニ抗立スル
ハ、万モ有ル可キ理ナシ、内国蒼生ノ治安ヲ策ス、亦難
シト謂フヘシ、次テ近日久光ノ建言スルヲ見ルニ
宝祚ヲ万世ニ安ンシ、天下人心ノ帰向スル処ノ大義ヲ分
別シ、天下ノ大勢今日ニ決スルノ旨ヲ建白ス、宜シク其
可否ヲ斟酌シ

御震断無之トキハ

皇国ノ大事、維新以來ノ巨基、一朝土崩瓦解ニ至リ可申
哉モ難量、

陛下ノ聖明ニシテ、此時機ノ屯難アル者実ニ痛歎ノ至、
涙ノ下ルヲ覺エス、

陛下宜シク此機ヲ洞察シ、非常ノ

英断ヲ以理非曲直ヲ判シ、大政ノ基本ヲ定メスンハ、事
機奔逃

皇威地ニ墮チ、何ヲ以テ

列祖ノ神靈ヲ安シ奉リ、億兆ノ蒼生ヲ護シ、抑熾仁恭シクモ皇族ノ班ヲ辱シ無涯ノ徳沢ニ浴ス、燃眉ノ急難黙止、幾回モ闕ニ伏テ微衷ノ徹上ヲ期ス、謹犯

天威奉建言候、誠恐誠惶頓首、

明治八年十月廿二日

有栖川熾仁

文書原寸 縦一八・五糎 包紙原寸 縦二八糎

横 五二糎

横四〇糎

三〇久光公ヨリ岩倉右府へ

辞表提出ト其理由

岩倉右府ヨリノ返書

合二通

二七〇六ノ一

〔端裏書〕
十月廿四日 右大臣江差遣候書状

再白、辞表ハ速ニ

御許可被為在候様御周旋、偏ニ奉頼候也、

愈御安康奉賀候、然は一昨日も略申上候通、去ル十九日、

天下之御為と存込、忌諱謹怒ヲ不憚、太政大臣之失体ヲ
挙テ免職之儀致上書候処、廿二日

皇居江被為 召、太政大臣ハ御一新以来之功臣ナルヲ以、
上言之趣 御採用不被為在候

勅詔ニ而上書御下ケニ相成、且朝鮮事件ニ付勉勵可仕之
旨拝承仕、別而恐縮仕候、同僚之非ヲ挙而上言仕候上ハ、
朝鮮事件切迫トハ乍申、共ニ朝ニ立テ熟議相整可申様無
之、尤朝鮮事件之故ヲ以、猶更御政体御改正之趣ニ申上
候事ニ有之候ヲ 御採用不被為在段拝承仕候上ハ、積年
之病夫勉勵も仕兼、且功臣ニ有之候得は、何様之失体有
之候而も

御宥恕ニ而、高官江被

召置候 御趣意と奉恐察、当惑至極奉存、速ニ辞表差出
候次第ニ御座候、尤被為 召候ニ付而は太政大臣失体之
細目御尋も可被為在欵と愚考仕参内仕候処、右之御尋一
円不被為在、大ニ失望仕候、就而ハ下官讒謗と被 思食
候哉と深く心痛仕罷在申候、何卒貴公之御尽力ヲ以、乍

恐黑白分明之 御沙汰拝承仕度、此段以愚札御依頼申上候也、

乙亥十月廿四日

久光

右大臣殿

文書原寸 縦一六種 横一三・五種

二七〇六ノ二

(封筒)

「島津左大臣殿

御請

具視

拝承、弥御清栄欣然候、然は御辞表御差出ニ付云云御細示、何も謹承、寔ニ不容易次第、小生一存何共御答難申入、尚

思召伺候上可及御答ニ候、不取敢御請迄如此候也、

十月廿四日

具視

左大臣殿

玉机下

文書原寸 縦一六種 封筒原寸 縦一八種

横四三種

横五・五種

青森県八戸士族太田広城ヨリ左府公へノ建

白

国家救済策ニ就テ

(包紙ウラ書)
「愚意上申

青森県士族元八戸
太田広城」

太田広城」

謹而

臣広城誠恐誠惶頓首再拜、

皇国ノ形勢ヲ惟ルニ、維新此来益開化進歩ト唱へ、眼前ノ風習ニ礫錯シ、既ニ従前ノ文飾ト異リ、多ク英米ノ風俗ニ走り、仮令ハ新聞紙上ニ於ルヤ、悉ク政体ヲ愚昧シ、自主自由ノ理ヲ取違ヒ廉恥廉直ノ風ヲ失ヒ、各一人ノ權道ヲ立、其風習殆ント幕政ノ端ニ近カラントス、夫古へ

ヲ擊ミルニ、先哲ノ詆所仁ヲ立義ヲ守ル、若シ内ニ肥ヘ外ニ瘦ル時ハ民其沢ヲ不蒙、之レヲ以テ之レヲ考レハ、國家危急存亡ノ秋ニ錯行シ、外ニ黃財ヲ失ヒ内ハ益ス疲弊ニ至ル、是唯權道者ノ訛誤セシヨリシテ今日ノ形勢ニ至ル、未タ国内ノ是ヲ見ル事甚タ齡ク、其費ヲ見ヤ益ス甚シ、道路ニハ諸木ヲ植ヘ灯火ヲ照シ、守リヲ解テ巡査ヲ置ク等、一モ其民ト共ニ樂シムノ域ヲ脱シ、裁判ヲ置テ今日ノ身代ヲ洗ヒ、情モナク道ヲ高山ノ上ニ開キ、私欲ニ耽テ^{マツ}官許ヲ議ス、実ニ愛國ノ有志夙ニ不能眠、歎息悲憤黙止スルニ不忍、仰キ希クハ今日ノ風習ヲ一洗セントスルトキハ築力徒ニ被牽、却テ國魂ヲ亡ホスニ至ル、夫レ人ハ賢ヲ觀テ起レルヲ養老者トス、今時ニ當テ繼天典ヲ立、天下ノ父母タラント人心爰ニ帰ス、謂所左府ノ大臣ニ出、初テ万民心ヲ抑テ歡喜愛ニ止ル、此時ヤ徵臣憂國ノ赤志ヲ吐露シ、國恩万分ノ一ヲ報シ度、然リトイヘトモ今ヤ財尽キ、内ト外ト此拒キヲ綱目スルノ第一トナスハ、是唯主客ノ二別ニ出テ、内ハ則チ紙財ヲ以テ補

ヒ、外ハ則生産ヲ以テ之ヲ齋フノ外ナカルヘシ、然レハ其施行スル処ノモノ勸業ノ外他ナシ、依テ三府五港各県ニ勸業寮ヲ設ケ、貿易ノ事務一切勸業ニ附屬スルヲ要ス、其他ノ愚意ヲ左ニ上申ス、

一 外國貿易上ハ一切勸業ノ所轄トナシ、相對ノ取引ヲ禁ス、但シ輸入品甄辨ヲ不許ヲ要ス、

一 諸官省ヲ廢シ外務・内務・兵部ノ三省ヲ置、外是ニ屬セシムヘシ、

一 府県ノ地理ヲ量リ之レヲ合県シ、司法ト勸業ノ出張ヲ置クヘシ、

一 士族ヲシテ兵制ヲ綴ミ、當分徵兵ノ則ヲ廢スヘシ、

一 戎服ノ外平世洋服ヲ禁スヘシ、

一 旧藩主ノ良能ヲ選ヒ、當分旧國ヲ所轄セシムヘシ、

一 金穀其外物品取引上ハ人心相對上ニ出ル故ニ其裁判ヲ不採ヘシ、

一 官員ノ商業ヲ嚴禁スヘシ、

一 國債ヲシラヘ消却ノ道ヲ立ヘシ、

一人民ニ賦課スル公費民費ノ區別ナカルヘシ、
右ノ条々細目ヲ述ルニ不遑、先建白ノ度ヲ以テスト雖ト
モ、未タ採目ヲ得ス、依テ御下問アラシニ一詳ヲ説カン
事ヲ、臣広城戦慄伏土頭謹而白ス、

青森県士族元八戸藩
南部信順臣

明治八年十月二十六日 太田広城(朱)

呈

左大臣島津久光殿閣下

冊子原寸 縦二八・五種 包紙原寸 縦二四・五種

横 二〇種 三枚 横 三三種

三〇八 左大臣免官ノ辞令

左大臣島津久光

依願免本官

明治八年十月廿七日

太政官

文書原寸 縦二・五種 横二八・五種

三〇九 琉球重臣ヨリ三条太政大臣ヘノ上書及副書

清国トノ儀礼及職制ノ件

二通

二七〇九ノ一

一般内務大丞松田道之殿ヲ藩地江御差渡、清国江隔年
進貢、或は清帝即位之節慶賀使差遣、且冊封請来候得
共自今被差止、藩制茂改革被仰付候と之件々御殿達相
成候付、松田殿江孤藩之情状縷々相願候得共、一切御
採用無之、無扱奉願趣有之被差免候上、今般上京形行
御届申上候処、藩内之情実細々言上可仕旨、御直沙汰
之趣謹テ承知仕、左条之通り上陳仕候、
一琉球ト支那トノ統、五百年來恩義有之、断テ絶候而は
恩意ニ背キ信義ヲ失ヒ、人タリ国タルノ道相廢レ候ニ
相当リ、且往古より兩屬之儀は各国明知する所ニ而、
他邦江新ニ臣事スル体トハ詛合茂相替、殊ニ方今
御親政、各国御交際向專信義ヲ以テ被為執行御事ニ付、
仰願クハ敝藩支那トノ統茂信義不取失様、乍恐寛洪之
御処置被下候ハ、

天皇陛下御大德益相顕レ、宇内之輿論ニ係候而茂、御不条理之御儀ニは相唱へ申間敷、海陬僻居之小邦御兩國江依頼致国立居候処、五百年來之礼節、無名義俄然断絶仕候上は、縦令船舶之往来万貨之需用等、随意ニ之ヲ行フコトヲ得ルト雖トモ、何之面皮アリテ渡唐可仕哉、然時は今日必用之物貨、其他交易上万端必至不如意相成、国家経営向茂差支可申、是等之情義不得止人氣、且ハ藩内安苦ニ関シ上下安堵之場ニ不到、人心騷然、且又御征台之末支那トノ御談判相済候段、松田殿御沙汰ニ候得共、御信書茂拜見不仕、支那より茂何之沙汰茂無之而已ならず去秋渡唐進貢使当三月北京江参着、表文貢物無異儀受納、都而之取扱向例格通相済、同治帝殂落ニ付白詔并新帝即位之紅詔、当夏帰帆貢船より到来、懐柔之厚キ何茂従前ニ相替儀無之候間、何卒海外小邦之事情、旁出格之御仁恤ヲ以、是迄通被仰付被下度奉願候、自然其通難被仰付儀ニ候ハ、此上は何分致方無之、

皇国より支那江御談判、いつく迄茂名儀分明之御取分被為在、確乎断然之道御立被下候ハ、如何様とも可奉畏旨藩議を遂罷登候儀ニ御座候間、此儀御採用難被成御事ニ候得は、いか様御沙汰被下候とも、微々タル小邦之敢而難及事柄ニ付、此段茂前広奉言上置候、宜敷御垂憐奉仰候、

一職制之儀基ハ国柄ニ応シ人氣ニ隨て相定、官吏之職掌庶民之承順、實際之景況ニ適シ、藩内安穩ニ相治リ候処、職制改革してハ政令民情貫徹不致、藩治不行届、人民可及困難段申上候処、此ノ藩制アレハ此ノ職制ナル可カラスト之趣、松田殿御説諭有之候得共、琉球は開關以來分ト国立シ

皇国・支那江属スル以來茂被叙王位、職制茂別段相立、御内地とは御同視難被成所より、藩ニ被封候而茂国体政体永久不相替、是迄通被仰付候段、一昨年外務卿より御達有之、昨年内務省江御管理替之砌茂何篇是迄通二而、更ニ相替儀は無之段、林友幸殿御口達、藩内一

同難有拝承御礼等申上置候処、御内地同様之職制二而

は藩内安堵不仕事御座候間、旁別段之御取訳を以、是

又従前通被仰付被下度奉願候、

右は国家危急存亡之掛る所二而、松田殿江情義を陳シ、

歎願スレトモ聴許セラレス、藩中之者共憂鬱之余り、

歎願スル由多勢雲集及騒動候付、藩情具二言上、可蒙

御寛容と申論、乍漸制御シ置候次第二而、願意御採用

於無之は藩中由茂安心不仕、事変難計、藩王初一同憂

慮ニ堪兼居申仕合御座候間、前件之情況被遊御憐察、

何卒願意相計候様奉仰御寛仁候、此段御依頼申上候也、

明治八年十月廿七日 親里親雲上

内間親雲上

喜屋武親雲上

幸地親方

与那原親方

高安親方

池城親方

大政大臣三条美殿

冊子原寸 縦二七・五櫃 横二〇櫃 三枚

二七〇九ノ二

(包紙ウツ書)
上

先般内務大丞松田道之殿、藩地江御差渡御敵達之内、清

国へ断絶之儀并職制改革之件難行、百方苦情相願候得共

御採用無之、無執奉願趣有之被差免池城親方等上京願意

具陳スル通二而、実ニ孤藩安苦ニ関シ藩王深ク愁歎寢食

茂安ンセス、闔藩一同苦慮ニ堪兼申次第御座候間、何卒

敵藩之情況被遊御憐察、願意御採用有御座度、伏シテ奉

懇願候、我等出京之上は藩内之苦情、猶

閣下江上申、幾重ニ茂願達候様藩王申付趣茂御座候付、

此段奉願候間、宜御依頼申上候也、

明治八年十一月

小祿親方